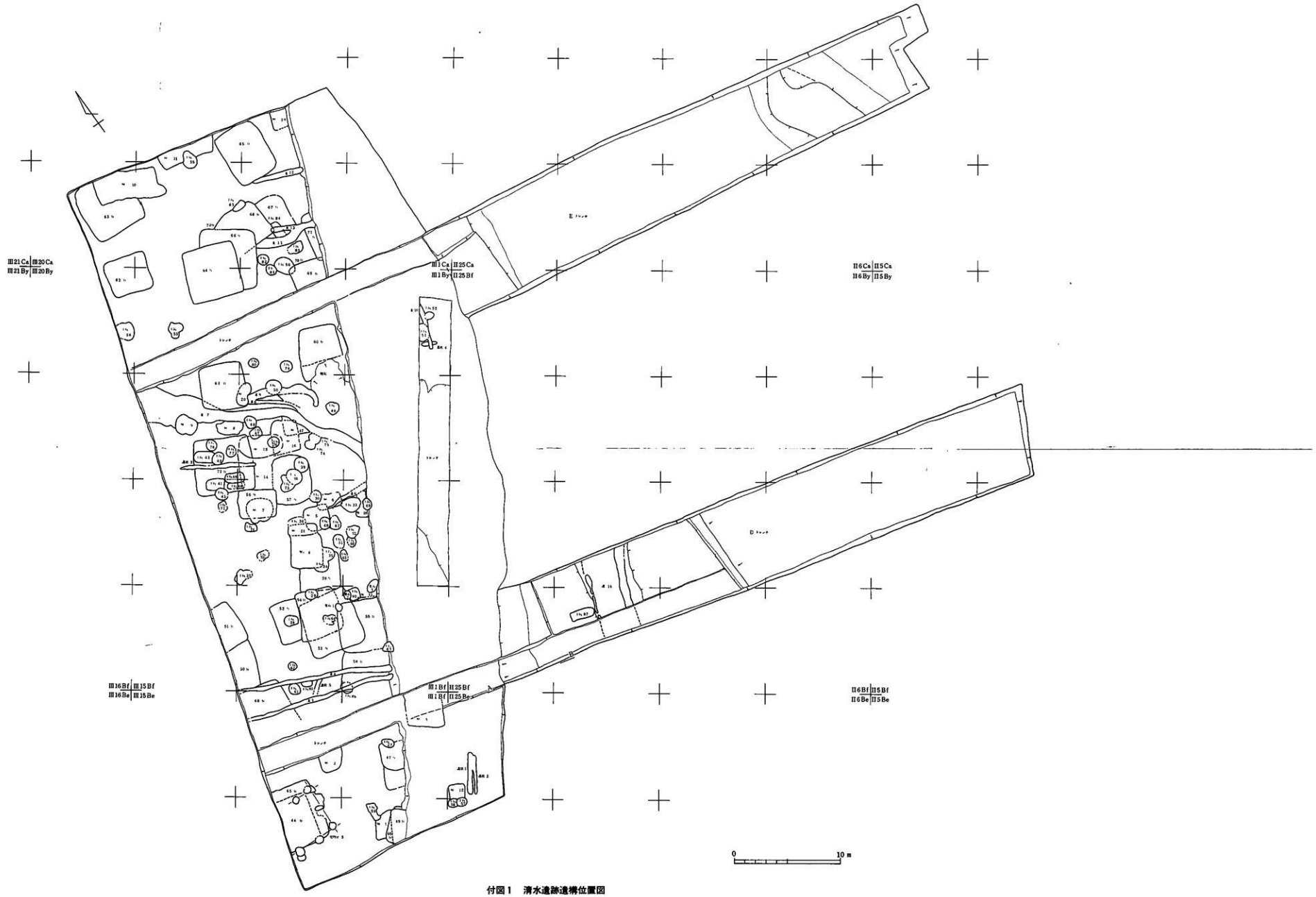
# 清水遺跡

雇用促進住宅建設にかかわる宅地造成に先立つ
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

1991年3月

長野県飯田市教育委員会




付図1　清水遺跡遺構位置図

付図２　清水遺跡柱穴址

# 清　水　遺　跡

雇用促進住宅建設にかかわる宅地造成に先立つ
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

1991年3月

長野県飯田市教育委員会

# 序

現在、当地方の緊急課題として、交通網の整備が叫ばれ、その第１として中央自動車道と並ぶ幹道である国道153号の整備があります。具体的な対応として、市街地を迂廻する飯田バイパスが計画され、その工事は順次進行中です。

その工事計画地内に雇用促進住宅があり、計画の中でその移転が余儀なくされ、その移転先が飯田市松尾清水に決定され、その地が埋蔵文化財包蔵地清水遺跡に該当するため、記録保存としての発掘調査を実施したわけです。

調査の結果は本文中に記したとおりで、当地方を代表する遺跡の１つとして注目すべきものであり、本来現状のままで後世に伝えるべきであったといえます。しかし、先述のとおり、地域的課題解決のためのやむを得ない開発であり、本報告書の刊行により、後世に伝える次善の策をよしとしなければならないことも現実のことといえます。

本書及び発見された諸資料の活用により、地域の歴史解明の新路が導びかれることを期待するところです。

最後になりましたが、調査実施にあたり、深いご理解とご協力をいただいた飯田市土地開発公社をはじめとする関係機関各位と、梅雨空の下、汗と泥にまみれての発掘調査に従事していただいた多くの皆様に衷心より感謝申し上げ序といたします。

平成３年３月

飯田市教育委員会

教育長　福島　　稔

# 例　　言

1．本書は雇用促進住宅移転新築工事に伴う埋蔵文化財包蔵地松尾清水遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は飯田市土地開発公社の委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。

3．今次調査地点と昭和49・50年度調査地点は同一遺跡内に位置するため、連続する遺構番号を付した。

4．発掘調査及び整理作業においては、遺跡略号MSZに地番のひとつ8113－2を付して一貫して使用した。

5．本報告書の記載については、記載順は住居址を優先し、時代順を原則とした。遺構図は本文と併せ挿図とし、遺物及び写真図版は本文末に一括した。

6．本書は、小林正春・佐々木嘉和・佐合英治・吉川豊・馬場保之・澁谷恵美子が分担執筆し、それぞれの分担は文末に記した。なお本文の一部について小林が加筆・訂正を行った。

7．本書に掲載された図面類の整理は佐合・馬場が、遺物実測は松枝高明・佐合・澁谷があたった。なお作業実施にあたり佐々木・吉川及び整理作業員が補佐した。

8．本書の編集は調査員全体で協議の上、佐合・吉川・馬場が行い、小林が総括した。

9．本書に掲載した遺構図の中に記した数字は、それぞれの穴の深さ（単位cm）を表わしている。

10．本書に掲載した柱穴平面図中の網掛け部分は建物址を構成すると思われる柱穴の分布を示している。

11．本書に掲載した石器実測図の表現として、使用痕及び擦痕は図内に実線で、刃つぶし及び敲打痕は図外に破線で、ロー状光沢は網掛けで示した。

12．本書に関連する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

# 本 文 目 次


序

例言

目次

Ⅰ 経過 …… 1

1 調査に至るまで …… 1

2 調査の経過 …… 2

3 調査組織 …… 5

Ⅱ 遺跡の環境 …… 7

1 自然環境 …… 7

2 歴史環境 …… 8

Ⅲ 調査結果 …… 10

1 遺構と遺物 …… 10

1） 竪穴住居址

弥生時代後期 …… 10

① 63号住居址 ② 67号住居址

古墳時代前期 …… 12

① 46号住居址 ② 49号住居址 ③ 55号住居址 ④ 59号住居址

⑤ 60号住居址 ⑥ 61号住居址 ⑦ 62号住居址 ⑧ 64号住居址

⑨ 65号住居址 ⑩ 68・(73)号住居址 ⑪ 69号住居址

⑫ 72号住居址

平安時代 …… 26

① (44)・45号住居址 ② 47号住居址 ③ 48号住居址

④ 52号住居址 ⑤ 53号住居址 ⑥ 54号住居址 ⑦ 56号住居址

⑧ 57号住居址 ⑨ 70号住居址

時期不明 …… 33

① 50号住居址 ② 51号住居址 ③ 58号住居址 ④ 66号住居址

⑤ 71号住居址 ⑥ 73号住居址

2） 掘立柱建物址 …… 36

① 掘立柱建物址5

3） 溝址 …… 37

① 溝址3 ② 溝址4 ③ 溝址5 ④ 溝址6 ⑤溝址7

⑥ 溝址8　⑦ 溝址9　⑧ 溝址10　⑨ 溝址11　⑩ 溝址12
⑪ 溝址13　⑫ 溝址14
4） 溝状址 …… 44
① 溝状址1　② 溝状址2　③ 溝状址3　④ 溝状址4　⑤ 溝状址5
5） 竪穴 …… 47
① 竪穴1　② 竪穴2　③ 竪穴3　④ 竪穴4　⑤ 竪穴5
⑥ 竪穴6　⑦ 竪穴7　⑧ 竪穴8　⑨ 竪穴9　⑩ 竪穴10
⑪ 竪穴11　⑫ 竪穴12　⑬ 竪穴13　⑭ 竪穴14　⑮ 竪穴15
⑯ 竪穴16・17　⑰ 竪穴18　⑱ 竪穴19
6） 集石 …… 56
① 集石1　② 集石2　③ 集石3
7） 土坑 …… 57
① 土坑27　② 土坑28　③ 土坑29　④ 土坑30　⑤ 土坑31
⑥ 土坑35　⑦ 土坑33　⑧ 土坑34　⑨ 土坑35　⑩ 土坑36
⑪ 土坑37　⑫ 土坑38　⑬ 土坑39　⑭ 土坑40　⑮ 土坑41
⑯ 土坑42　⑰ 土坑43　⑱ 土坑44　⑲ 土坑45　⑳ 土坑46
㉑ 土坑47　㉒ 土坑48　㉓ 土坑49　㉔ 土坑50　㉕ 土坑51
㉖ 土坑52　㉗ 土坑53　㉘ 土坑54　㉙ 土坑55　㉚ 土坑56
㉛ 土坑57　㉜ 土坑58　㉝ 土坑59　㉞ 土坑60　㉟ 土坑61
㊱ 土坑62　㊲ 土坑63　㊳ 土坑64　㊴ 土坑65　㊵ 土坑66
㊶ 土坑67　㊷ 土坑68　㊸ 土坑69　㊹ 土坑70　㊺ 土坑71
㊻ 土坑72　㊼ 土坑73　㊽ 土坑74　㊾ 土坑75　㊿ 土坑76
(51) 土坑77　(52) 土坑78　(53) 土坑79　(54) 土坑80　(55) 土坑81
(56) 土坑82　(57) 土坑83　(58) 土坑84　(59) 土坑85　(60) 土坑86
(61) 土坑87
8） その他の遺構 …… 72
① 柱穴址
9） 遺構外遺物 …… 73
Ⅳ まとめ …… 77

# 挿 図 目 次


| | | |
|---|---|---|
| 挿図1 | Dトレンチ土層断面図 | 4 |
| 挿図2 | 清水遺跡位置及び周辺遺跡図 | 6 |
| 挿図3 | 調査位置及び周辺図 | 9 |
| 挿図4 | 63号住居址 | 10 |
| 挿図5 | 67号住居址、土坑84 | 11 |
| 挿図6 | 46号住居址 | 12 |
| 挿図7 | 49号住居址 | 13 |
| 挿図8 | 55・58号住居址、土坑63・86 | 14 |
| 挿図9 | 59号住居址 | 15 |
| 挿図10 | 60号住居址 | 16 |
| 挿図11 | 61号住居址 | 17 |
| 挿図12 | 62号住居址 | 19 |
| 挿図13 | 64号住居址 | 20 |
| 挿図14 | 65号住居址 | 21 |
| 挿図15 | 68・73号住居址 | 22 |
| 挿図16 | 58号住居址、70号住居址カマド | 23 |
| 挿図17 | 72号住居址 | 25 |
| 挿図18 | 44・45号住居址 | 27 |
| 挿図19 | 47号住居址 | 28 |
| 挿図20 | 48号住居址 | 29 |
| 挿図21 | 52号住居址 | 30 |
| 挿図22 | 53・54号住居址 | 31 |
| 挿図23 | 56号住居址、竪穴7 | 32 |
| 挿図24 | 57号住居址 | 33 |
| 挿図25 | 50号住居址 | 34 |
| 挿図26 | 51号住居址 | 34 |
| 挿図27 | 66号住居址 | 35 |
| 挿図28 | 71号住居址 | 36 |
| 挿図29 | 掘立柱建物址5 | 37 |
| 挿図30 | 溝址3・4、溝状址5 | 38 |
| 挿図31 | 溝址6 | 39 |

挿図32　溝址７・８・９ …… 41・42
挿図33　溝址10・11・12・13、溝状址４ …… 43
挿図34　溝址14、土坑87 …… 45
挿図35　溝状址１・２・３ …… 46
挿図36　竪穴１・２・３・４・21、土坑34・35・36 …… 48
挿図37　竪穴４・５・６・７・８・９・10 …… 51
挿図38　竪穴11・12・13・14・15・16・17、土坑40 …… 54
挿図39　竪穴18・19・20、土坑33・69 …… 55
挿図40　集石１・２・３ …… 56
挿図41　土坑27・28・29・30・31・32・66・37・38・39・73・41・45・42・43 …… 61
挿図42　土坑44・46・47・48・49・50・51・52・53・54・55・56・81・57・58・59
60・61・62…… 65
挿図43　土坑64・65・67・68・70・71・72・74・75・76・77・78・79・80・82・83
85…… 71

## 付 図 目 次

付図　1　清水遺跡遺構位置図
付図　2　清水遺跡柱穴址

## 図 版 目 次

第１図　63・67・46・55号住居址出土遺物 …… 80
第２図　55・59号住居址出土遺物 …… 81
第３図　59号住居址出土遺物 …… 82
第４図　59号住居址出土遺物 …… 83
第５図　59号住居址出土遺物 …… 84
第６図　59号住居址出土遺物 …… 85
第７図　60・61号住居址出土遺物 …… 86
第８図　61・62号住居址出土遺物 …… 87

第9図　64・65・68・69号住居址出土遺物 …… 88
第10図　69・72号住居址出土遺物 …… 89
第11図　44・45号住居址出土遺物 …… 90
第12図　44・45号住居址出土遺物 …… 91
第13図　44・45号住居址出土遺物 …… 92
第14図　44・45・48・53号住居址出土遺物 …… 93
第15図　53・54・57・70号住居址出土遺物 …… 94
第16図　66号住居址、掘立柱建物址5、溝址7出土遺物 …… 95
第17図　溝址14出土遺物 …… 96
第18図　溝址14出土遺物 …… 97
第19図　竪穴1・4・5・6・7・8・9・10出土遺物 …… 98
第20図　竪穴10・11・16・17、集石2、土坑34・35出土遺物 …… 99
第21図　土坑46・53・56・70・71・72・79・86、グリット柱穴址出土遺物 …… 100
第22図　グリット柱穴址出土遺物 …… 101
第23図　遺構外出土遺物 …… 102
第24図　遺構外出土遺物 …… 103
第25図　遺構外出土遺物 …… 104
第26図　遺構外出土遺物 …… 105
第27図　遺構外出土石器 …… 106
第28図　遺構外出土石器 …… 107
第29図　遺構外出土石器 …… 108
第30図　67・69・72・63号住居址、遺構外出土遺物 …… 109
第31図　56号住居址、溝址7、竪穴10・11、土坑36・40・49、グリット柱穴址出土遺物 110
第32図　遺構外出土鉄器、銭 …… 111

# 写真図版目次

図版1　調査地調査前（北から）、同（西から） …… 114
図版2　調査地全景（南から）、同（北から） …… 115
図版3　63号住居址、55号住居址、59号住居址 …… 116
図版4　59号住居址遺物出土状態 …… 117
図版5　60号住居址、同遺物出土状態、61号住居址 …… 118

図版 6　62号住居址、同炉址、64号住居址 …… 119
図版 7　65号住居址、同炉址、68号住居址編物石出土状態 …… 120
図版 8　72号住居址、同炉址、44・45号住居址 …… 121
図版 9　52・53・54号住居址、56号住居址、64・66・68・67号住居址重複状態 …… 122
図版10　溝址 3 ・ 4 、竪穴10、竪穴 4 ・21・土坑36、竪穴11・土坑55、竪穴11遺物出土状態 123
図版11　竪穴 9 、集石 1 、集石 2 、土坑77・42・43・41・45（左隅奥から） …… 124
図版12　63号住居址出土石器、67号住居址出土土器・石器、55号住居址出土甕・壷 …… 125
図版13　59号住居址出土甕 …… 126
図版14　59号住居址出土甕・壷、同小型丸底土器、同高坏 …… 127
図版15　60号住居址出土甕、同小型丸底土器、同高坏、同砥石 …… 128
図版16　61号住居址甕・小型丸底土器・鉢、同高坏、62号住居址甕・高坏
　　64号住居址高坏、65号住居址高坏 …… 129
図版17　68号住居址高坏、69号住居址出土甕 …… 130
図版18　69号住居址出土高坏・てづくね土器、
　　72号住居址出土甕、同甕・小型丸底土器、同高坏 …… 131
図版19　44・45号住居址出土甕、同坏 …… 132
図版20　44・45号住居址出土須恵器甕・壷、同坏、同灰釉陶器、同砥石 …… 133
図版21　53号住居址出土甕、同須恵器甕・坏、70号住居址出土坏、同灰釉陶器 …… 134
図版22　溝址 7 出土石器・鉄器、溝址14出土甕・壷、
　　竪穴 5 出土坏、竪穴 7 出土天目茶碗・常滑・砥石 …… 135
図版23　竪穴10出土鉢、同かわらけ、同灰釉陶器、同鉄器、竪穴11出土壷・鉢、同鉄器 … 136
図版24　土坑40出土鉄器、土坑49出土鉄器、土坑53出土坏・鉄器、土坑71出土土器、
　　土坑79出土甕、土坑86出土甕・小型丸底土器、
　　穴址出土遺物（甕・坏・天目壷・鉄器） …… 137
図版25　遺構外出土縄文時代土器、同弥生時代中期土器、同弥生時代土器 …… 138
図版26　遺構外出土土師器、同須恵器 …… 139
図版27　遺構外出土内黒坏、同平安時代甕、同灰釉陶器、同天目釉陶器・磁器 …… 140
図版28　遺構外出土山茶碗・常滑、同おろし皿、同すり鉢 …… 141
図版29　遺構外出土黒曜石石鏃・使用痕のある剥片、同石錘・不定形石器、
　　同磨製石鏃、同打製石斧・有肩扇状形石器、同打製石斧・乳棒状石斧 …… 142
図版30　遺構外出土打製石斧、同横刃形石器、同敲打器、同砥石 …… 143
図版31　遺構外出土刀子・釘、同鉄滓、同銭 …… 144
図版32　重機によるトレンチ調査、重機による表土剥ぎ、トレンチ調査 …… 145
図版33　遺構検出作業、遺構掘り下げ作業 …… 146

図版34　穴掘り下げ作業、測量作業、清掃作業 …… 147
図版35　ラジコンヘリコプターによる写真撮影作業、遺跡現地説明会スナップ …… 148

# Ⅰ 経　過

## 1．調査に至るまで

飯田市街地の南方、飯田市松尾常盤台に所在する雇用促進住宅は、当地方において長年の懸案であった一般国道153号飯田バイパスの路線決定とともに移転を余儀なくされた。

バイパスの路線決定後、移転先の検討に着手したわけであるが、現在地の条件が、飯田市街地とも近く、周辺の商工業地帯への交通の便も良く絶好の地であり、移転地の決定には若干の時を要することとなった。

種々検討の結果、現在地と同地区にあたり、ほぼ同様の好条件下にある飯田市松尾清水地籍に決定された。

一方、移転先にあたる清水地籍は、天竜川の氾濫原に面した低位の段丘上にあたり、早くより人々の生活した場所であり、清水遺跡として知られ、当地方を代表する弥生時代から平安時代にかけての集落遺跡であった。

そのため、造成工事実施者である飯田市土地開発公社と、文化財保護の立場にある飯田市教育委員会で、再三にわたる事前協議の結果、造成工事着手前に埋蔵文化財包蔵地の緊急発掘調査を実施し、記録保存をはかる方向が示された。

一連の事前協議の後、平成元年11月16日に飯田市土地開発公社理事長田中秀典より、飯田市教育委員会宛に、開発に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協議依頼が正式に提出された。それに対し、飯田市教育委員会では、長野県教育委員会文化課と協議する中で、平成元年12月１日に「飯田市松尾清水遺跡における開発行為について」として次のような回答を行なった。

回答内容は、清水遺跡が当地方を代表する弥生時代から平安時代の集落遺跡であり、本来は現状のまま後世に伝えるべきではあるが、開発の主旨、内容からしてやむを得ないものと判断される。しかし、遺跡の重要性等勘案し、次善の策ではあるが、発掘調査等による完全な記録保存をはかり、開発に対応すべきであるとした。

その後、平成元年度末までに調査計画、予算等について具体的な協議を行ない、平成２年４月10日、飯田市土地開発公社と飯田市長との間で、埋蔵文化財包蔵地の発掘調査についての委受託の契約を締結した。

なお、契約に先行して文化財保護法第57条の２第１項及第98条の２第１項に関する手続きを行なった。

以上の経過をふまえ、平成２年４月17日現地において発掘調査に着手した。

## 2．調査の経過

### 1）調査前の状況

清水遺跡は、天竜川及びその支流の祝井沢川の氾濫原に面した最低位の段丘面上の遺跡である。現状は水田のため、地表面での土器等の採集は困難で、わずかに平安時代の須恵器の破片が採集されたのみであった。

しかし、昭和49・50年に国道152号の改修工事に伴って実施した発掘調査により、弥生時代から平安時代にかけて44軒の竪穴住居址など多数の遺構や遺物が発見された。

今回の調査箇所は、その場所に連続しており、同様に弥生時代から中世にかけての大集落址の一画にあたると予想された。

また、天竜川氾濫原に該当する段丘の下段部分については、昭和36年等の災害時に冠水した場所であるが、周囲の地形などから判断すると、弥生時代以降の古い水田跡が地中に埋もれていることも予想される場所である。

### 2）試掘調査

調査対象面積が広く、地形的にも２段になっており、全面に遺構等が分布するか否かを判断するため試掘調査を行なった。

試掘調査は、建物建設予定地の長軸に合わせ、幅２ｍのトレンチを設定し、重機により表土剥ぎ作業を行ない、その後人力による精査を行なった。

その結果、２段になっている上段面は、黄灰色の粘土層及び砂礫層が基盤を成し、これに黒色土の落ち込む遺構の存在と、古墳時代の遺物が相当量出土した。

下段面は、36災の氾濫を受けた面で、現在の耕作土下に災害復旧時の客土が30cm前後あり、その下層は1.5～２ｍ程の砂・礫・泥の堆積があり、36災の水害の状況を示し、その下面に旧耕作面や水路等が確認された。下段の最下面に認められた旧耕作面下層にも若干の土器・石器が出土した。

試掘調査の結果、上段面は全体に遺構・遺物が分布しており、造成により削平される部分については全面発掘調査実施が必要と判断された。

一方、下段面については、住居址等の存在する可能性は低いが、かつての水田址など生活遺構等の存在する可能性も指摘され、建物建設部分についてのみ再度発掘調査を実施することとなった。

### 3）発掘調査

試掘調査の結果を受け、本発掘調査を実施することとなった。４月25日から５月１日まで上段面については全面にわたり、下段面については、建物部分について重機によって表土剥ぎ作業を

を行なった。その後、5月7日から人力により本格的な発掘調査を実施し、6月19日現地作業を終了した。

その間、6月17日には、現地での見学会を開催し、約150名の見学者があった。調査の結果は、調査前の予想通り、弥生時代後期・古墳時代前期・平安時代・中世の住居址をはじめとする各種の遺構と、それらに伴って多数の土器・石器などが発見された。

発見された遺構と主な遺物を時代別に概括すると次のようである。

① 縄文時代

住居址などの遺構は発見されなかったが、中期及び後期の土器片と石器が若干出土した。

② 弥生時代

遺構： 後期中島式期竪穴住居址2軒

遺物： 中期－寺所～阿島式土器片

後期－壷・甕・高坏などの土器、有肩扇状形石器・打製石包丁・打製石斧等の石器類

③ 古墳時代前期（4・5世紀）

遺構： 竪穴住居址24軒

遺物： 壷・甕・高坏等の土師器多数、打製石包丁などの石器類・青銅製品

④ 古墳時代後期（6・7世紀）

遺構は発見されなかったが、土師器及び須恵器など土器類の破片。

⑤ 平安時代

遺構： 竪穴住居址3軒

遺物： 甕・坏などの土師器

〃 須恵器

碗・皿・壷などの灰釉陶器等

⑥ 中 世

遺構： 具体的な住居址とは確定できないが、方形の竪穴・柱穴群・溝址など多数の遺構が発見された。

遺物： 上記各種の遺構に伴って多量の陶磁器類が出土している。主なものとしては、山茶碗・天目茶碗・古瀬戸壷・同甕・青磁碗などがある。

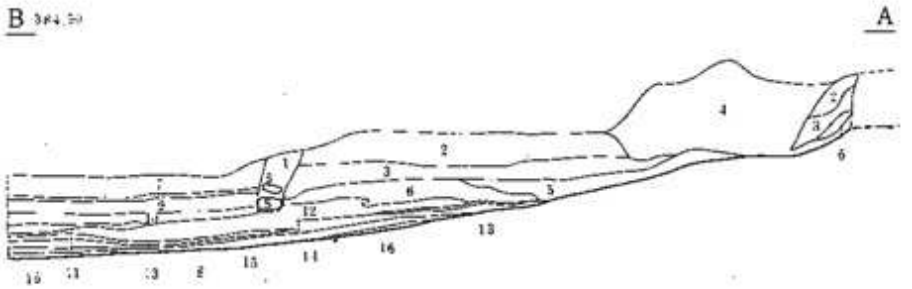
⑦ その他

住居址等の発見された、最下位の段丘面の地形は、その先端部が高く、西方の山寄側に徐々に傾斜しており、段丘地形の特徴が捉えられた。

また、住居址の構築された下層には、厚さ５～10cm程の黒色土層が認められており、弥生時代中期以前に遡る水田の存在した可能性も考えられる。

さらにまた、最下位段丘面下段の氾濫原には、36災後の復旧工事による埋土も含め、現在の地表面から２～３ｍ下に黒色土等の広がる面が認められており、詳細な調査は実施できなかったが、弥生時代後期前後の古水田の存在も十分に予想された。

以上の現地作業による成果をふまえ、飯田市考古資料館において、遺物の整理・図面類の整理等の諸作業を行なった。




1．撹　乱(水田石垣)
2．暗茶褐色土
3．暗茶褐色土(ロームブロックを含む)
4．礫　土
5．暗茶褐色砂
6．褐色砂
7．暗褐色土
8．赤茶褐色土
9．暗褐色土
10．茶褐色土
11．灰色砂
12．明褐色砂
13．赤茶褐色砂
14．暗褐色砂
15．茶褐色砂
16．明茶褐色砂

挿図１　Ｄトレンチ土層断面図

## 3．調査組織

調査担当者　小林　正春

調　査　員　佐々木嘉和・佐合　英治・吉川　豊・馬場　保之・澁谷恵美子

作　業　員　森　章・高木　義治・中平　隆雄・木下　当一・木下　傳
新井　康史・大島　利男・窪田多久三・矢澤　博志・今村　春一
松島　卓夫・吉川　正実・豊橋　宇一・正木実重子・小木曽　正
清水　三郎・勝野　操・市ノ瀬　昇・村松　輝司・市瀬　長年
藤本　幸吉・細田　七郎・松沢　幣一・坂下やすゑ・伊藤　和恵
高橋収二郎・松下　真幸・松下　成司

整理作業員　池田　幸子・伊原　恵子・大蔵　祥子・金井　照子・金子　裕子
唐沢古千代・唐沢さかえ・川上みはる・木下　早苗・木下　玲子
櫛原　勝子・小池千津子・小平不二子・小林　千枝・佐々木真奈美
田中　恵子・筒井千恵子・樋本　宣子・丹羽　由美・萩原　弘枝
林　勢紀子・原沢あゆみ・平栗　陽子・福沢　育子・福沢　幸子
牧内喜久子・牧内とし子・牧内　八代・松本　恭子・三浦　厚子
南井　規子・宮内真理子・森　信子・森藤美知子・吉川紀美子
吉川　悦子・吉沢まつ美・若林志満子

事　務　局　飯田市教育委員会社会教育課
竹村　隆彦　（社会教育課長）
中井　洋一　（　〃　文化係長）
小林　正春　（　〃　文化係）
吉川　豊　（　〃　〃　）
馬場　保之　（　〃　〃　）
篠田　恵　（　〃　〃　）

1 清水遺跡　2 城遺跡　3 寺所遺跡　4 御射山遺跡　5 石打場遺跡
6 田圃遺跡　7 塚越遺跡　8 大島遺跡　9 城陸遺跡　10 坂下遺跡
11 内御堂遺跡　12 川原遺跡　13 主膳遺跡　14 屋敷遺跡　15 司馬垣遺跡
16 竹ノ下遺跡　17 京田遺跡　A 坊主塚古墳　B 妙前大塚古墳　C 羽場獅子塚古墳
D 姫塚古墳　E 上溝天神塚古墳　F おかん塚古墳　G 水城獅子塚古墳　H 御射山獅子塚古墳
I 八幡町古墳　J 代田獅子塚古墳　K 照月庵古墳　L 戦争塚古墳　M 塚越古墳

**挿図 2　清水遺跡及び周辺遺跡位置図**

# II　遺跡の環境

## 1．自然環境

清水遺跡の所在する飯田市松尾地区は、飯田市街地の南西約２～５kmにあり、飯田市のほぼ中央部に位置する。四囲は、東は天竜川をはさみ飯田市下久堅に、北は松川をはさみ下伊那郡上郷町に、南は毛賀沢川をはさみ飯田市竜丘と接し、西は明瞭な地形上の境界は無いが飯田市鼎とに囲まれている。

地区内の東端を、天竜川が南流するため、その氾濫原を最下段に５～６の段丘面で形成されている。

それらは、高位と低位とに２大別でき、その境は鳩ケ峯八幡宮の社叢を中心とする段丘崖である。

高位の段丘は、前述の段丘崖上に広がる八幡原をはじめとする安定したローム層に覆われた台地上で、その標高は480m前後である。

低位の段丘は、前述の段丘崖下から天竜川氾濫原までの間で、松尾地区の大半が該当する。この中は、５～６面の小段丘面があり、それぞれの比高差は２～５mであり、標高380～430mである。それぞれの段丘面の広さは一様ではないが、いずれも南北方向に段丘崖の存在を確認できる。しかし、上位段丘からの小河川も何本かあり、これらにより、小規模な扇状地形の形成された部分もあり、その部分においては段丘崖の把握は困難である。

清水遺跡は、これらの段丘のうち、天竜川氾濫原に面した最下段の段丘最端部にある。この段丘は、天竜川の現水面との比高差４m程である。また、基本的に段丘地形ではあるが、明河原地籍で大きく入江状に入り込んだ氾濫原が終息する場所でもあり、岬状となる。これは、天竜川対岸から連続する花崗岩の基盤の存在によるものといえる。

そのため、当清水遺跡が氾濫原ぎりぎりの位置まで遺構が分布する要因ともなっていると考えられる。

また、清水遺跡の北側には、祝井沢川が天竜川に注ぎ込む部分であり、これにかかわる自然災害発生の可能性は、ある程度予測される。これらの状況から見て、清水遺跡は天竜川氾濫原を活用した生産基盤を控えた生産力の高い集落といえるが、自然の災害とも背中合わせであり、集落の形成については、時代毎の様々な工夫、配慮があったものと考えられる。

## 2．歴史環境

松尾地区の遺跡を概観すると、天竜川氾濫原及び段丘崖を除いてほぼ全面的に包蔵地であり、古墳の多い事は特筆され、前方後円墳８基と円墳は60余基を数える。また、八幡町の旧道際で会所新築に伴う調査で現在の家並の下より石室の下部を検出し、記録の無いまま消滅した古墳が多数存在したことも推測できる。

松尾地区での遺跡発掘調査としては、学術調査により寺所遺跡の一部が昭年43年１月と昭和46年３月に、昭和46年度国の補助事業として妙前大塚（３号）古墳、工場新築に伴い南ノ原遺跡・毛賀御射山遺跡、天竜川護岸工事と国道152号付替に伴い、清水遺跡などが調査報告されている。さらに報告書の発刊が遅れているが、上溝会所新築に伴う調査で上溝天神塚古墳の一部が調査されている。

以上、調査された遺跡はそれぞれ重要な遺構・遺物が発見されており、当地方の歴史解明に大きな意味を持つものが多い。

個々に概観すると、寺所遺跡では弥生時代中期前葉に位置づく、寺所式土器が発掘され南信地方の標式土器になっている。

昭和49・50年の清水遺跡、平成元年に行なわれた城遺跡の調査により、弥生時代後期及び古墳時代前期の集落址が発見され、かなり大規模に、かつ安定した生活が営まれていたと判断される。

妙前大塚古墳からは、県宝に指定された「眉庇付冑」が出土し、当地域で最も古い古墳の一つとされる。

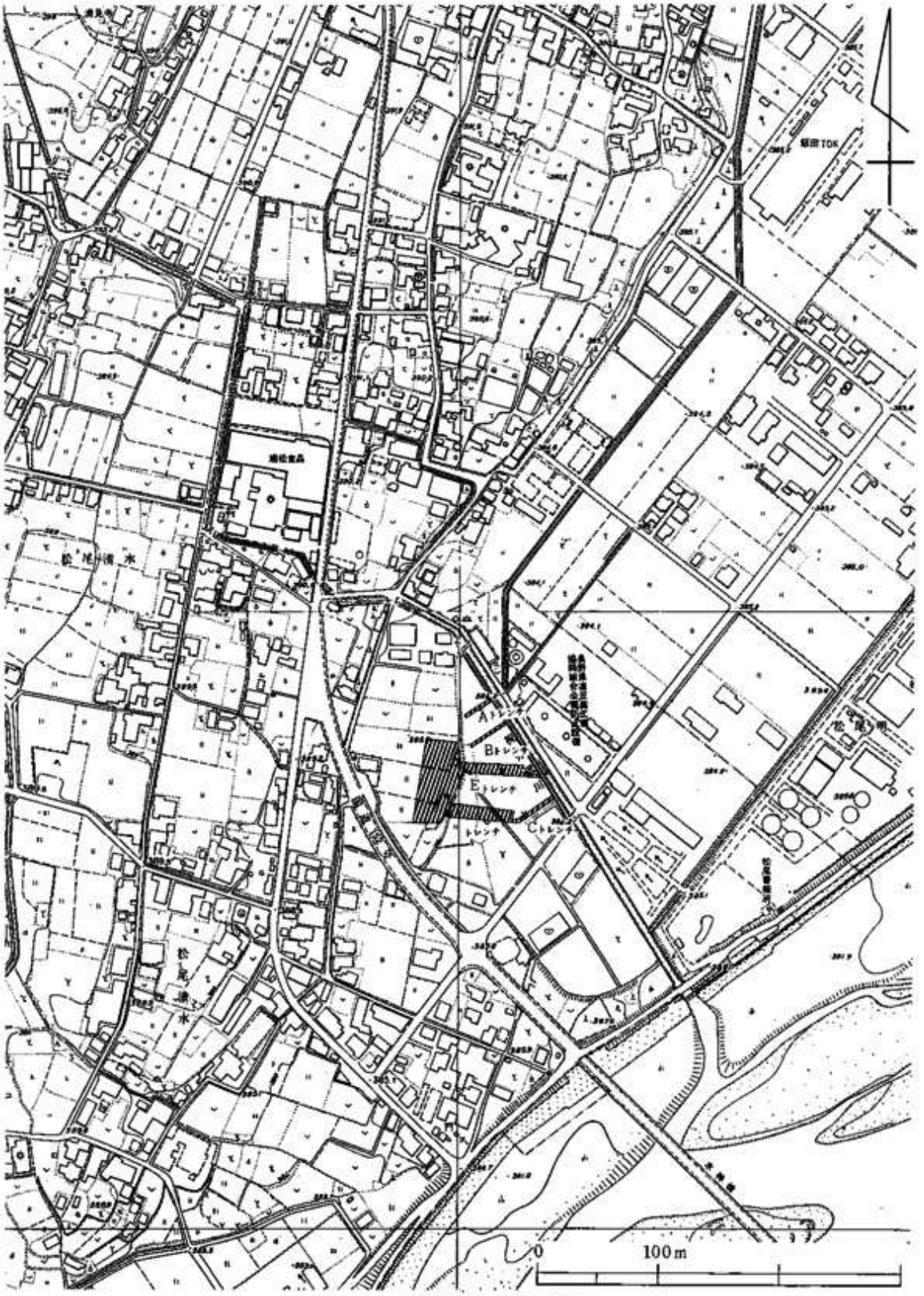
南ノ原遺跡では、中世小笠原氏の重臣の居館址と見られる屋敷跡・堀・柵列が調査され、完形の茶臼・天目茶碗等が出土している。

毛賀御射山遺跡からは、平安時代の布目瓦の出土があり、古代寺院の存在が推測できる。

以上が発掘調査で確認された歴史であるが、中世に入ると諸記録等残っている。鳩ケ峯八幡宮の神像銘には、建仁３年（1203）より造立をはじめたとあり、重要文化財となっている。南ノ原の南端部に築かれた松尾城は、北条氏滅亡後信濃守護職となった小笠原氏の居城で毛賀沢川を隔てた鈴岡城との親属間の確執は史実に明らかである。

歴史的に松尾地区を概観したが、平坦で肥沃な地であり、原始より古代、そして現代まで大いに栄えた地ということができる。

そのような歴史環境の中で、当清水遺跡は様々な意味を有しており、拙速に論じ難いが、弥生時代以降今に至るまで、高収穫可能な生産基盤を控えた、松尾地区の中心的な集落と概述することはできる。さらに、中世以降の特筆事項の１つとして、商工業をはじめ他地域との交流等に重要な意味を持つ、秋葉街道に関連した天竜川渡舟の交通要所でもある。　　（小林　正春）




挿図3　調査位置及び周辺図

# III　調査結果

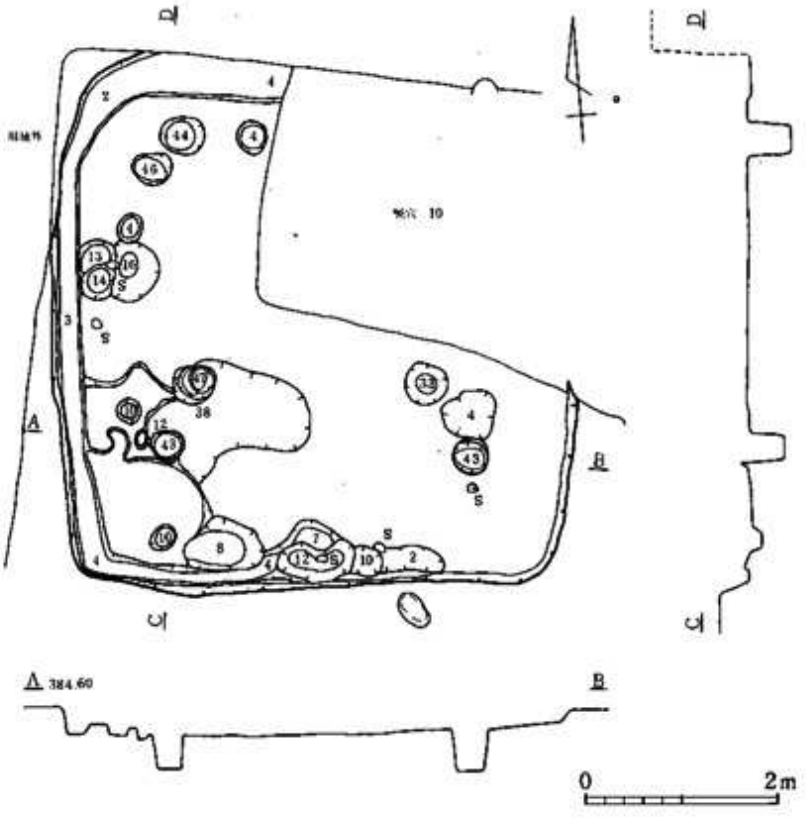
## 1．遺構と遺物

### 1）竪穴住居址

**弥生時代後期**

**①　63号住居址（挿図4　第1図）**

調査区北西隅、竪穴10に切られて検出された。北壁際は調査区外にかかる。東西5.4ｍ、南北推定5.6ｍの不整方形を呈する竪穴住居址で、東西方向はN84.8° Wを示す。床面はほぼ平坦であるが、全体的に軟弱である。壁は北西隅を除く部分が把握され、東半はややゆるやかなものの、




挿図4　63号住居址

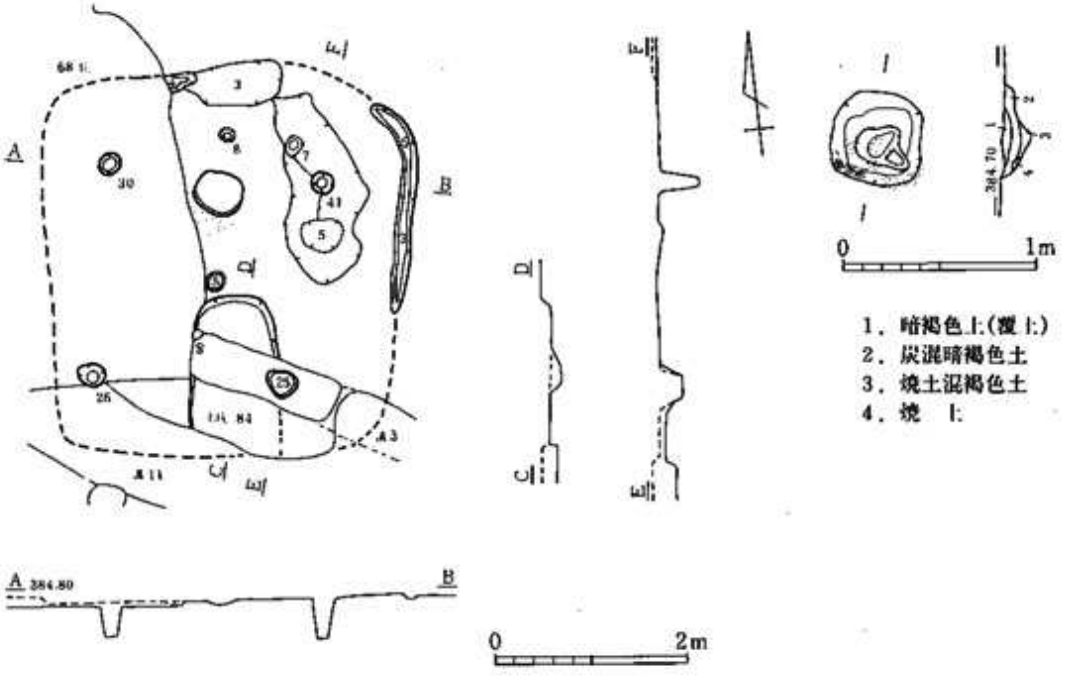
西半は急に立ち上がる。この急な壁下には幅20～40cm、深さ２～７cmの周溝が掘り巡らされている。主柱穴は北東を除く３本が確認され、径30～40cmの不整円形を呈し、深さはそれぞれ43・43・46cmを測る。炉址等は確認されなかった。

出土遺物は弥生土器壷・甕・有肩扁状形石器・磨製石鏃・剥片石器・礫石錘・敲打器等があり、出土量は少ない。甕は斜走短線が施される。有肩扁状形石器は刃部が基部の約２倍と大きい。磨製石鏃は半製品である。剥片石器は硬砂岩・珪質岩製である。

出土遺物等から弥生時代後期前半の竪穴住居址である。　　（馬場　保之）

② 67号住居址（挿図５　第１図）

68号住居址の東側で炭化物を含む範囲を住居址とした。覆土はごく浅いものであり、その下で貼り床を確認した。東半分は68号住居址に切られ、南側は溝11・13及び土坑84により切られているため、調査できたのは北東部分3.0×2.2mのみであった。住居址の規模を推定する材料としては、主柱穴４個と炉が確認できている。それから測りだしたこの住居址は3.8mの隅丸正方形であろう。そして、主軸はN９° Eを示していることになる。調査した部分の東側は幅14cm深さ５cm全長2.0mの掘り込みがあり、北方向にほぼ直角に曲がるところから周溝と見られる。しかし、ほとんど壁は残っていない。このほかにも周溝の一部とみられるものが、北側の壁直下の68号住居址との境にもある。主柱穴は67号住居址の床の上で確認できたのは一つだけでこれが北東のも




挿図５　67号住居址，土坑84

のである。北西及び南西の主柱穴は68号住居址の床面で検出した。残る南東のものは溝址13中で確認した。深さは41～25cmといずれもしっかり掘られている。北東と北西の主柱穴の中間で焼土を伴う円形の掘り込みがあり、炉とした。大きさは直径46cmの円形で2段に掘られた地床炉であった。

覆土が浅かったため、遺物もほとんど出土していない。拓本で示した波状文と斜走短線を組み合わせた甕（第1図7）は炉の中からの出土である。また、手づくねと見られる小型の土器（第30図1）もある。

住居址検出の状況と遺物から判断すれば、弥生時代後期の遺構である。　　（吉川　豊）

古墳時代前期

① 46号住居址（挿図6　第1図）

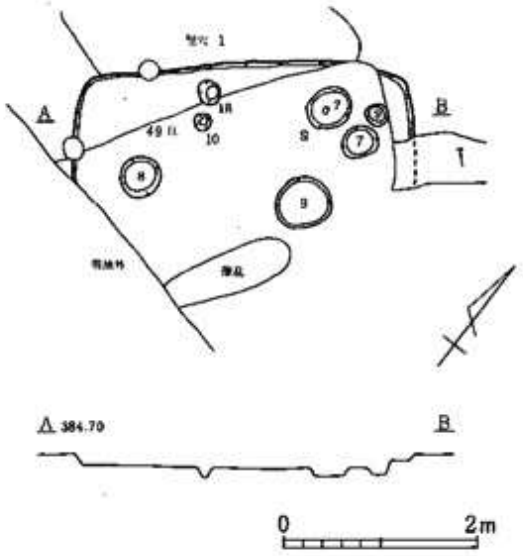
調査区の南西端に、49号住居址を切り、竪穴1に切られて検出された。水田造成のため、南東側約半分が削平を受けている。北東・南西方向3.4mを測り、主軸方向N40.1° Wを示す方形を呈する竪穴住居址である。本址上部は水田耕作を受けており、壁下部が確認されたのみで、壁の立ち上がりの状態は不明である。硬い床面がほぼ全体で確認され、49号住居址上部に貼り床される。炉址等の付属施設は確認されなかった。

出土遺物は土師器壺・甕・高坏等であり、出土量は僅少である。壺は小型の丸底状を呈し、薄手の器壁をもつ。他に灰釉陶器碗破片が混入出土している。

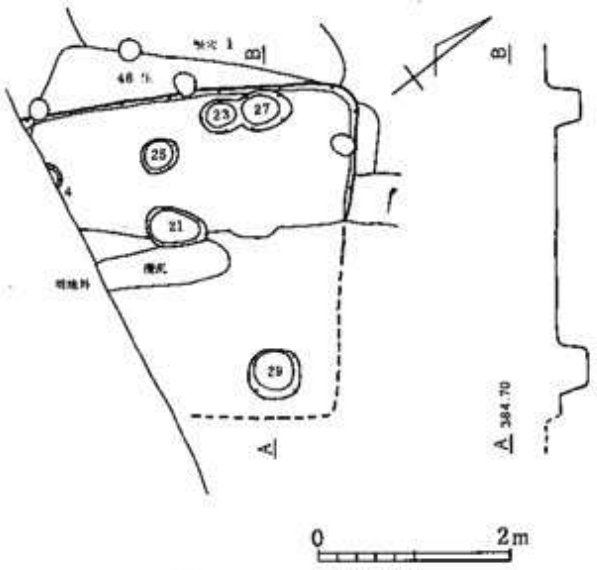
重複遺構および出土遺物等から古墳時代前期に比定される。　　（馬場　保之）

② 49号住居址（挿図7）

調査区の南西端、46号住居址に切られて検出された。方形を呈すると考えられる竪穴住居址であるが、北西辺と北東辺は直交せずやや不整形である。一部調査区外にかかり、また水田造成に伴なう削平を受けているため、規模・主軸方向等詳細は不明である。本址の掘り方は地山の砂礫層に及んでおり、底面は平坦である。東隅の柱穴周辺に硬い貼床が確認された。壁はややゆるやかな立ち上がりを示す。北西辺中央やや




挿図6　46号住居址




挿図7　49号住居址

離れた柱穴の東側縁辺に僅かに焼土があり、この付近に炉址があった可能性がある。上部に46号住居址の貼り床がなされる。

出土遺物は土師器甕・坏、高坏等があり、出土量は僅少である。甕は外面刷毛目調整が施される。

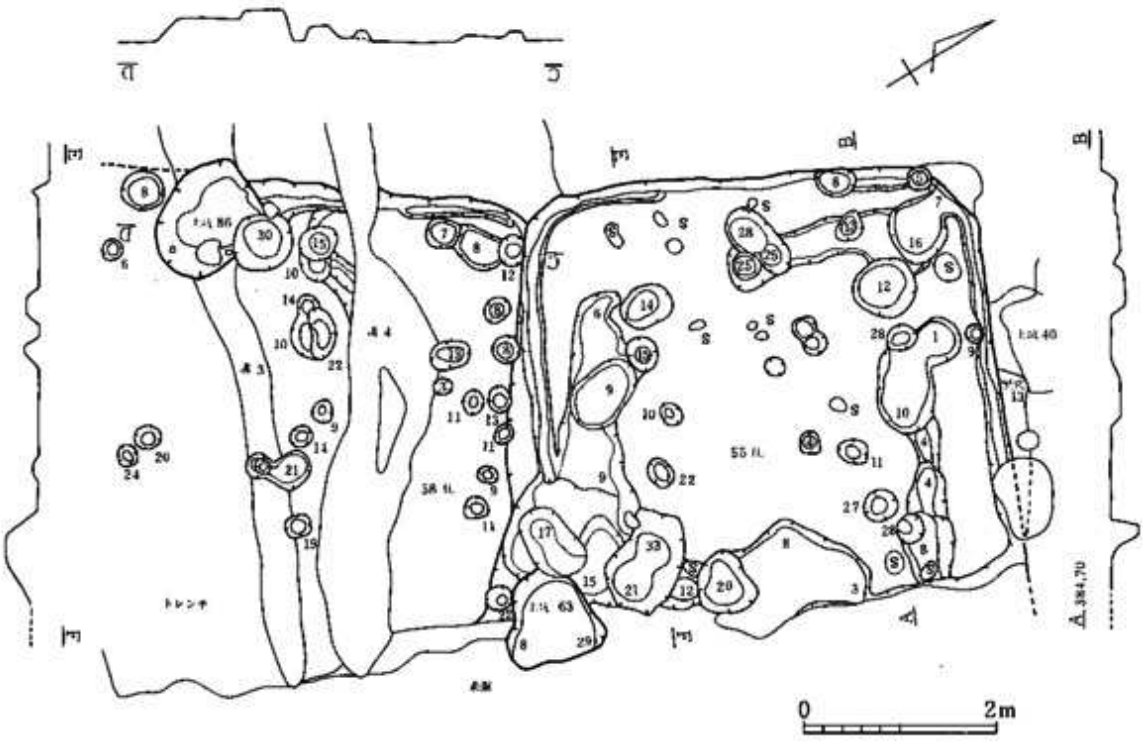
出土遺物・重複関係より古墳時代前期の住居址と思われる。

（馬場　保之）

③　55号住居址（挿図8　第1・2図）

調査範囲中央部のやや南側に確認した。53号住居址に切られ、58号住居址と一部重複し、竪穴13を切る。南東側は水田の造成時に切り土されている。全体の¾程が調査できた方形の竪穴住居址である。全体の規模は不明であるが、把握した北西壁は4.8mを測る。主軸方向はN65°Wを示す。壁高はすべての面が他遺構と切り合うため、良好残存部でも18cmで、南側は周溝のみの確認である。周溝は北西部中央部が途切れているが、床面より5cm程掘り凹められている。また、壁から0.5～1m内側にも溝が廻っている。部分的に途切れ、深さ4～10cmを測るもので、幅は25～60cmと一定でない。これが床面施設に伴うものか、住居址を拡張したための旧周溝であるのかは把握できなかった。床面は平坦で、堅く締まった良好なものである。主柱穴は、それぞれの規模、深さもまちまちで疑問を残すものではあるが、北隅の穴を除き3本を把握した。4本主柱穴と考えられる。炉址は住居址中央部からやや北西に寄った位置にある。深さ4cm、径20cm程を測る。小形の地床炉で、焼土もわずかに認めただけである。

出土遺物は、比較的少ない。全体の器形が知れるものはないが、土器として土師器壺（第1図9・8）、小形甕（11）、甕（第2図1・2）、坏、高坏（3～5）等がある。10の胴部下半にはケズリ整形が認められ、いずれも丁寧なナデで仕上げられている。小石粒を含む胎土で、色調は橙色及び薄い橙色を呈している。焼成は両者とも良好である。小形甕はヘラケズリ後ナデ整形している。焼成は良好で、茶色を呈し、胎土中には小石粒を含んでいる。図化した甕はいずれも球形の胴部となるもので、第2図1の口縁端部はヘラ整形されている。高坏には、坏部下半に凹みによる稜を持つものがある。色調は3の坏部が薄い茶色、4・5の坏部と脚部が橙色である。



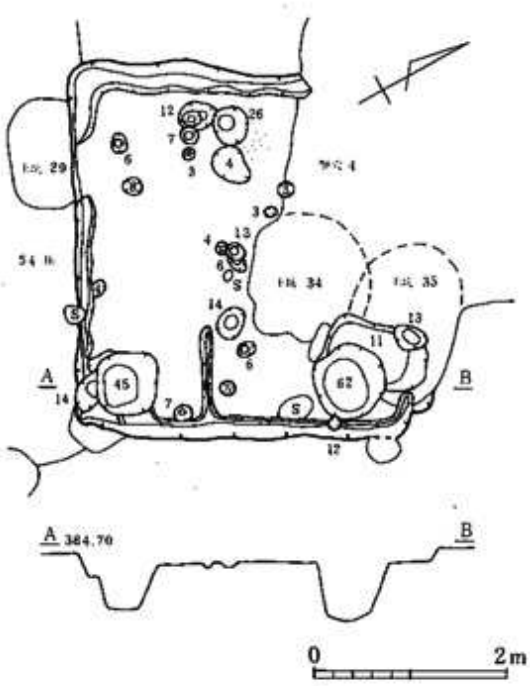

**挿図８　55・58号住居址，土坑63・86**

いずれの高坏にも胎土中に小石粒が混入している。焼成は良好であるが、器面が荒れるため整形は不明である。他に、石器として大型の敲打器（第２図６）がある。

時期は、これら出土遺物から古墳時代前期後半に位置づけられる。　　（佐合　英治）

④　59号住居址（挿図９　第２・３・４・５・６図）

調査範囲のほぼ中央部確認した。54号住居址、竪穴４、土坑29・35・37・53に切られている。また、50号～53号住居址や、中世以降と考えられる穴址が把握された層を取り除いた後の下層で検出された。全体の¾程が調査できた方形の竪穴住居址である。規模は3.8×3.5ｍを測る。主軸方向はN62°Wを示す。壁高は切り合いの無い北東壁と南東壁で15cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。周溝は竪穴４に壊されている北側を除き検出された。壁直下を全周していたものと考えられる。深さは４～７cmを測り、比較的浅い部分が多い。床面は平坦で、壁際を除き堅く締まった良好なものである。覆土は暗褐色土である。焼土が多量に認められ、火事の住居址と考えられる。西隅を中心に石が混入している。石は径５～20cmを測るもので、ほとんどのものが床面




挿図9　59号住居址

より浮いた状態である。また、甕、高坏等の遺物が、十数個体床面上につぶれて出土した。住居址の全体に広がっており、後の廃棄や、祭祀的な要素も考えられたが、どちらも確証は得られなかった。主柱穴は確認できなかった。本址に付属する施設として、南東壁の両隅にある穴がある。南側の穴は方形で規模は65×60cm、深さ46cmを測る。甕が二個体入っていた。北側の穴は径75cmで円形を呈しているが、別の穴と切り合っており、底部や壁の状態から南側の穴と同様に方形であった可能性が高い。深さは61cmを測る。両者とも、いわゆる貯蔵穴と考えられる。また、この南東壁のほぼ中央部には、周溝から延びる周溝状の溝がある。深さは4cm前後である。炉址の位置からこの部分が入り口と考えられるが、この溝が入り口施設に付属するものであるかの把握はできなかった。炉址は住居址中央部からやや北西に寄った位置にある。深さ4cmの浅い地床炉で、歪んでいる。径は35cm程を測る。

出土遺物は、きわめて多い。土師器甕（第2図7～9、第3図1～7、第4図1～4・6、第5図1～11）、壷（第4図5、第5図12～14、第6図1・2）、甑（第6図3）、高坏（4～11）がある。甕にはやや大型のものと、中型、小型の三種があり、後二者は球形胴のものである。これに対し大型のものは胴部がやや長くなる。また、小型の甕の中には第5図9のように肩部が張り出し、ほかのものとは器形が異なるものも存在する。小型、中型甕の整形にはハケとヘラミガキがある。大型甕にはこれにハケ後ナデ、または、ヘラミガキを行なうものがある。色調は、第2図7、第5図9が橙色を呈しているほかは、暗い茶色から薄い茶色である。胎土中にはみな小石粒が含まれており、、第3図2、第4図2、第5図1には雲母も認められる。焼成は、第2図7・8、第5図9が不良のほかは、普通もしくは良好である。壷にも小型丸底、坩など三種類の大きさのものがある。第4図5は薄い橙色を呈する壷で、焼成がやや不良のため、器面が荒れている。胎土中には小石粒が混入し、やや大きめの石粒も認められる。坩の体部はハケ後ナデで仕上げられ、第6図1の口縁内部はヘラミガキされている。色調は明るい橙色を呈している。小型丸底はハケ後ヘラ調整する第5図13と、ナデを行なっているものとがあり、体部内側には、指頭による調整も見られる。甑は一孔のものであるが、底部のみで全体の器形は不明である。焼成は

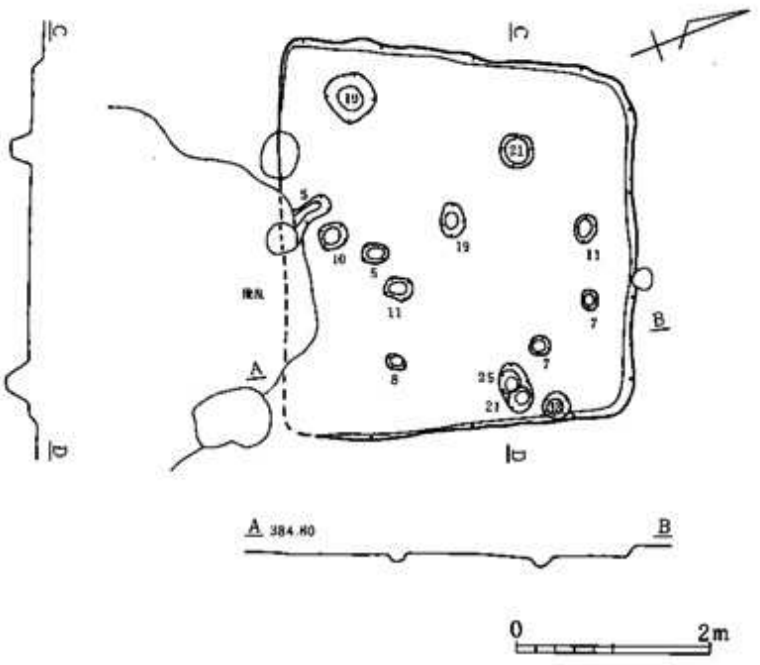
良好、胎土中に小石粒を含み、茶色を呈している。高坏のうち全体形がわかるものは4点である。坏部に明瞭な稜線を作り出しているものは、第6図9のみである。ほかのものも稜部を意識し、接合部を意図的に残したものと考えられるが、明瞭なものではない。脚部は下半部が急に開くものである。脚部の整形は例外なくヘラミガキされ、先端部が横ナデである。脚内部はほとんどのものが絞り痕をそのまま残しているが、ナデまたはヘラケズリでこれを消すものが一例ずつ認められた。坏部の整形はヘラミガキを主体とするものが大半を占め、第6図5・7はナデにより仕上げられている。胎土中に小石粒が例外なく含まれており、第6図4・5・7・8・11には2～3㎜の大粒のものも見られる。総じて焼成は良好で、色調は薄い茶色もしくは茶色である。

時期は、出土遺物から、古墳時代前期後半に位置づけられる。　　（佐合　英治）

⑤　60号住居址（挿図10　第7図）

Ⅲ7BVグリットを中心に検出した。隅丸方形竪穴住居址である。規模は4×4mと推測したが南側がやや台形に広がり、壁・床が確認できず、黒褐色粘質土を掘り下げたので、やや掘り過ぎた。床面は比較的良好であるが、基盤の石が露出している。検出面から20cm以下と浅く覆土下層に炭・灰の薄い層があり、火事にあっている様子である。炉址の確認はできなかったが、床面ほぼ中央に焼土の散布が見られ、簡単な地床炉であった可能性がある。主柱穴と確認できる穴は、北隅のものが位置的に良いが、深さが21cmで他の穴も25～5cmと浅い。

遺物の出土量は少なく甕・小形丸底・坩・高坏・砥石等である。甕1は北隅近くで出土した。頸部～口縁部を欠き、全体形は把握できないが、胴部球形にちかく、雑な箆磨きが施され部分的に刷毛目が残っている。2は台付甕の台片で、ほぼ½現存している。



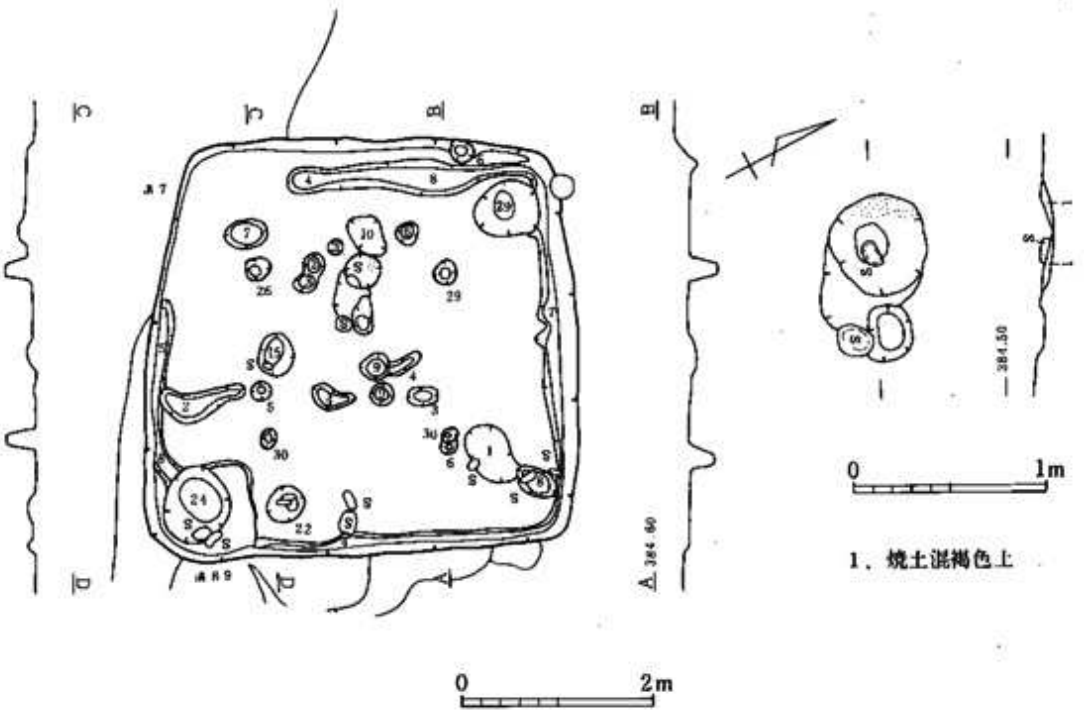

挿図10　60号住居址

小形丸底坩３～５の法量はほぼ同じであり、胴下部から底部は箆削りで調整されている。４の胴部は箆磨き、５は刷毛調整後なでられている。高坏６は坏部に稜を持ち、緩く外反する。脚は接合部から直線的に広がる。外面は全面なでられ、脚内面は箆削り後なでられている。砥石７は砂岩製であり、多数の面に使用痕が著しく残っている。

時期は出土した土師器から、古墳時代前期である。　　（佐々木　嘉和）

⑥　61号住居址（挿図11　第７・８図）

調査範囲の中央部からやや北に確認した。西隅が溝址７と重複し、南東壁の一部が、土坑20に切られている。ほぼ全体が調査できた方形の竪穴住居址である。平面形は溝址７と重複する部分の把握があまかった為、やや歪んだものとなってしまった。規模は4.2×4.4mを測る。主軸方向はN65° Wを示す。壁高は13～20cmを測る。壁面は北東壁の中央部分が比較的緩やかな立ち上がりを成すほかは垂直に近い。周溝は溝址７と切れ合う西隅を除き、ほぼ全周している。北西壁の周溝が、壁下から10cm程内側に検出された以外は、壁直下を掘り凹めたものである。また、東隅では幅狭く、幅が５cmに充たない部分もある。深さは東方側の二壁が７cm前後を測るのに対し、西方側の二壁は３cm程と浅い。床面は平坦で、北西壁下を除き、良好なものである。主柱穴は４本である。径は15～20cmを測り、小形の穴である。深さは西の穴が26cm、残りのものは30cmを測る。本址に付属する施設として、北と南隅にある穴がある。両者とも平面形は円形で、北の穴の




挿図11　61号住居址

規模は径55×65cm、深さ29cmを測る。南側の穴の縁には土手状のマウンドが認められた。規模は65×80cm、深さ24cmを測る。北の穴からは遺物は出土しなかったが、いわゆる貯蔵穴と考えられる。炉址は住居址中央部からやや北西に寄った位置にある。径50cm、深さ9cmを測る。石が炉址の中央部に転落した状態で検出されたが、これが炉縁石であったものかは確認できなかった。また、この炉址の西側に灰が詰まった穴が検出された。二つの穴が切れ合ったように歪んでおり、深さは5cm程である。灰かきの穴と把握したが、炉址の作り替えの可能性もある。

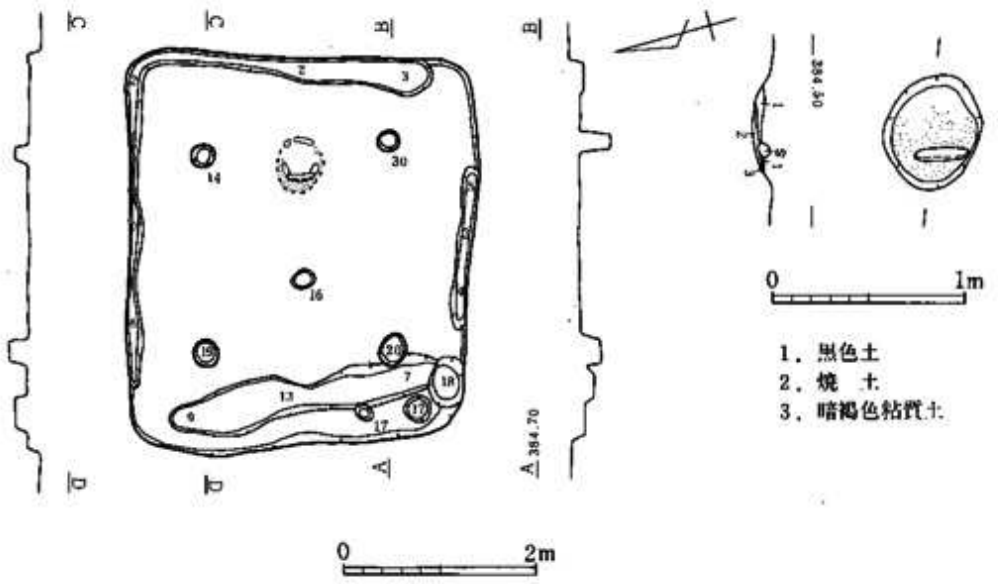
出土遺物は、比較的多い。図化可能なものとして土師器甕（第7図8・9、第8図1・2）、てずくね（第8図3）、高坏（4～7）がある。第7図8の底部はヘラケズリにより調整されており、内外面ともヘラミガキ整形である。胴部下半の残存部は少ないが、球形胴となるもので、壺となる可能性がある。ほかの三点は小型のものである。第7図9は外面を丁寧はナデで仕上げており、内面にはクシ状工具と、指頭による調整痕が見られる。底部は内外面ともヘラ調整である。第8図1の調整は器面が荒れるため不明である。2は小型丸底土器とも言えるものであるが、底部をヘラケズリにより作り出している。内部にヘラ及び指頭による調整痕が見られ、外面はナデ整形されている。甕の色調は2の外面が橙色を呈しているほかは、暗い茶色もしくは茶色である。焼成は皆良好で、胎土中に小石粒が混入し、やや大きめの石粒も含んでいる。てずくねとした土器は明るい茶色をしており、底部と内部にヘラの調整が見られる。焼成は良好、胎土中には小石粒が混入し、石粒も含んでいる。高坏には坏部がハの字状に開くものと、断面逆台形の二者が存在する。整形は前者がナデのみである。後者は脚内部にヘラケズリがみられ、残りの部分はヘラミガキによるものである。他に脚部のみであるが、四孔されたものもある。高坏の焼成は皆良好、色調は薄い茶色ないし、茶色である。胎土は第8図7に大きめの石粒が見られないほかは、小石粒が混入し石粒を含んでいる。また、5には雲母も認められる。他に、石器として敲打器（第8図8）があるが本址に付属するものかは不明である。

時期は、出土遺物から古墳時代前期後半に位置づけられる。　　（佐合　英治）

⑦　62号住居址（挿図12　第8図）

調査区域の北西隅に検出した。主軸方向N16°W、東西4m×南北3.5mで南壁が北壁より20cm程短かくやや台形状を呈する隅丸方形竪穴住居址である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは12cm前後である。周溝は北・東・南壁で確認できた。幅8～36cm、深さ2～6cmを測る。西側では壁に沿った形での周溝はなく、壁から20～30cm離れて幅24～48cm、深さ7～13cm、長さ3m程の溝が検出された。主柱穴は4本あり、口径20～30cm、深さは最も深いもので30cm、あとは14cmと20cmのものがある。炉は東側主柱穴の中間に設けられており、炉縁石をもつ地床炉である。炉縁石の西側上面と炉床全体に堅く締まった焼土が広がる。

出土遺物のうち図化できるものはわずかである。土師器甕・高坏等がある。甕（第8図9）は



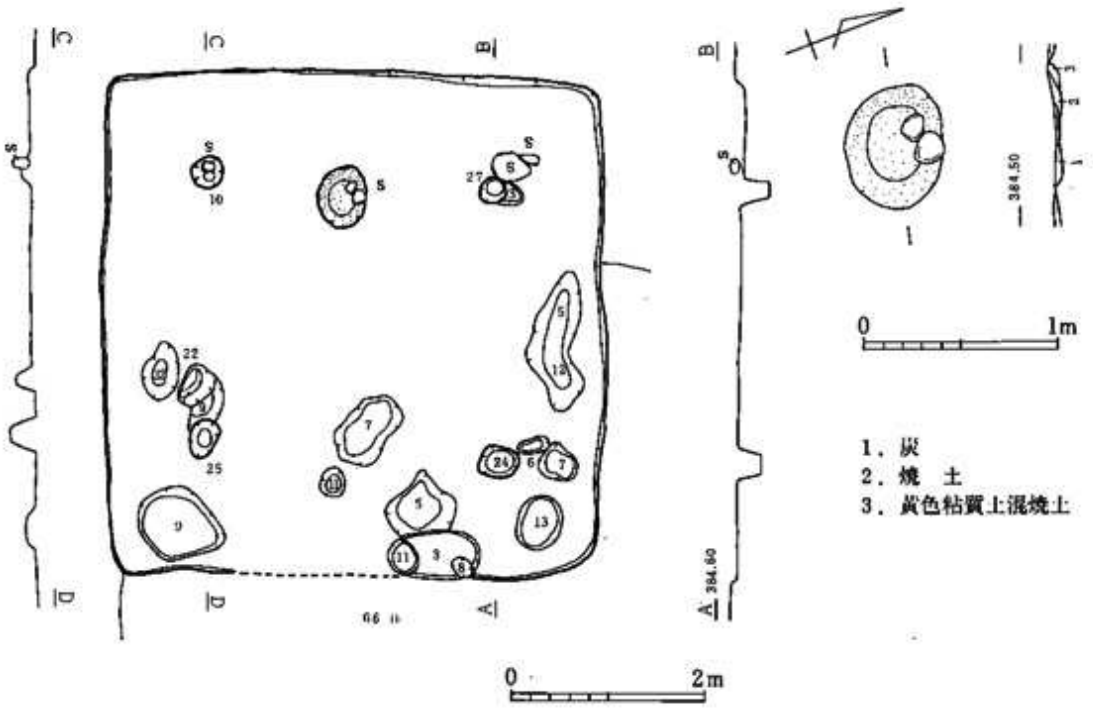

挿図12　62号住居址

胴部付近に最大径をもち、口縁は外反する単純口縁で、端部は面取りされる。内外面茶褐色。口縁部は横ナデ、内外面胴部はヘラミガキが施され光沢がある。東壁周溝付近より出土。10も甕の底部である。内外面共に茶褐色、外面と底部にはヘラミガキが施され、内面にもヘラによる調整がみられる。胎土に小石粒を含み、焼成は良い。11の脚はハの字状に広がり、端部には面取りがなされ、ナデ調整が施される。内外面共に赤みがかった茶褐色を呈する。器面は整っておらず、全体に作りは雑であり、透孔はない。高坏の脚部であろうか。

出土遺物から本住居址は古墳時代前期に比定される。　（澁谷恵美子）

⑧　64号住居址（挿図13　第9図）

調査区北より、試掘トレンチEの北側で確認した住居址であり、東側で66号住居址を切っている。東側の壁は一部掘り足りない部分があるが、規模は5.2×5.2mの隅丸の正方形である。主柱穴は4本が確認できた。また、北と西の主柱穴の中間に焼土をもつ落ち込みがあり炉とした。この炉は60×50cmの楕円形で覆土には焼土のほか炭も含まれている。深さは2cmとごくごく浅い地床炉である。この住居址の主軸方向は、N69° Wを示していることになる。床面は比較的しっかりした貼り床であり、平坦であった。主柱穴は西側のものが10cmと浅いが、その他のものは25cm前後と比較的しっかり掘り込まれている。壁は比較的急角度ではあるが10cmとごく浅い。床面の東側半分にはいくつかの穴がある。そのうち、東壁中央直下にある90×50cmの楕円形の落込みは入り口施設の可能性がある。



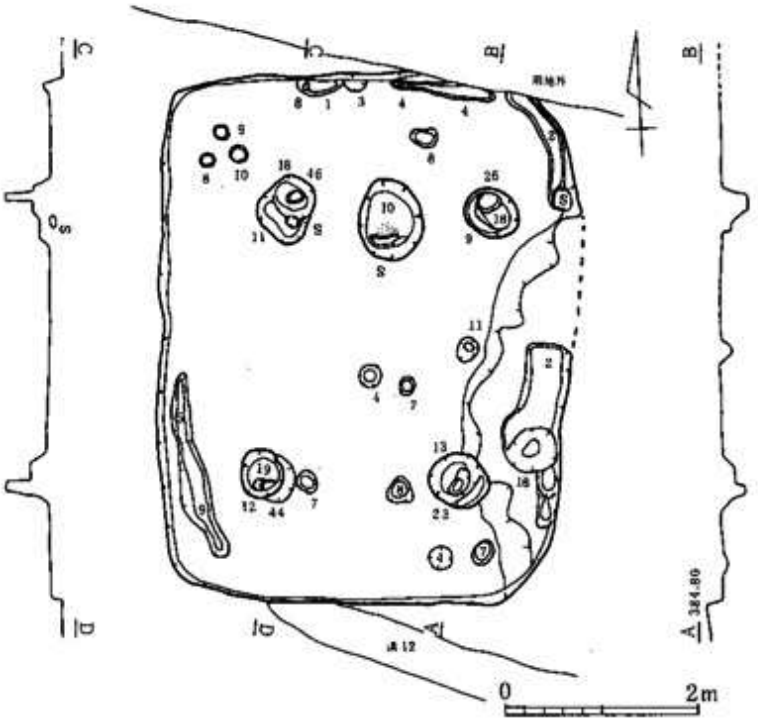

挿図13　64号住居址

暗褐色の覆土からは波状紋を施した土師器壺の口縁部（第９図１）と土師器の高坏の坏部（第９図２）、その他、土師器甕の小破片が出土している。

遺物と住居址の形態から判断すれば、古墳時代前期の遺構である。　　（吉川　豊）

⑨　65号住居址（挿図14　第９図）

調査範囲の北端に検出した。南壁の一部が溝址12に切られている。全体が調査できた隅丸長方形の竪穴住居址である。規模は5.5×4.2mを測る。主軸方向は真北を示す。壁高は10cm程を測る。壁面は確認壁高が少ないため立ち上がりの状態を確実に把握するには至らなかった。周溝は部分的に検出され、南壁下では確認できなかった。確認できた北壁と東壁の周溝は壁直下に掘り凹められているが、西壁のものは壁下から15cm程住居址内側にあり、幅も一定でない。深さは２～７cmを測る。床面は平坦なもので、壁際を除き堅く締まった極めて良好なものである。主柱穴は４本確認した。径は60cm前後を測る。深さは最深部で、東側の二本が25cm程、西側の二本が45cm程を測る。どの穴も二段構造になっており、更に、底部の一部が径15～30cmの穴となっている。穴の壁面の状態から同位置で柱を立て替えているものと考えられる。本址に付属する施設として、東壁の中央からやや南にある穴がある。径55cm、深さは17cmを測る。穴の検出面に高坏一個体分




**挿図14　65号住居址**

が出土しており、深さはあまり無いが貯蔵穴と考えられる。また、この東壁部中央では実質的には壁面は把握できておらず、スロープ状になっている。周溝もほかの部分とは異なり、幅が45cmと広い。炉址の位置からすると入口が通常多く造られる壁とは90度ずれるが、入口施設と考えられる。炉址は北側の主柱穴二本の中間にある。住居址中央部側に炉縁石を伴った地床炉である。規模は85×65cmで、南北に長い小判形をしており、深さは11cmを測る。

出土遺物は、少ない。土師器高坏（第9図3）と、弥生時代の壷の破片数点があるが、弥生時代遺物は本址に付属しないものである。高坏は脚部先端を欠くがほぼ完成品である。坏部中程にゆるい稜を持ち、これより上部がハの字状に外反している。整形は脚内部にナデが見られるほかは、ヘラミガキされている。焼成は良好で、茶色を呈している。胎土中に小石粒と、石粒が混入している。

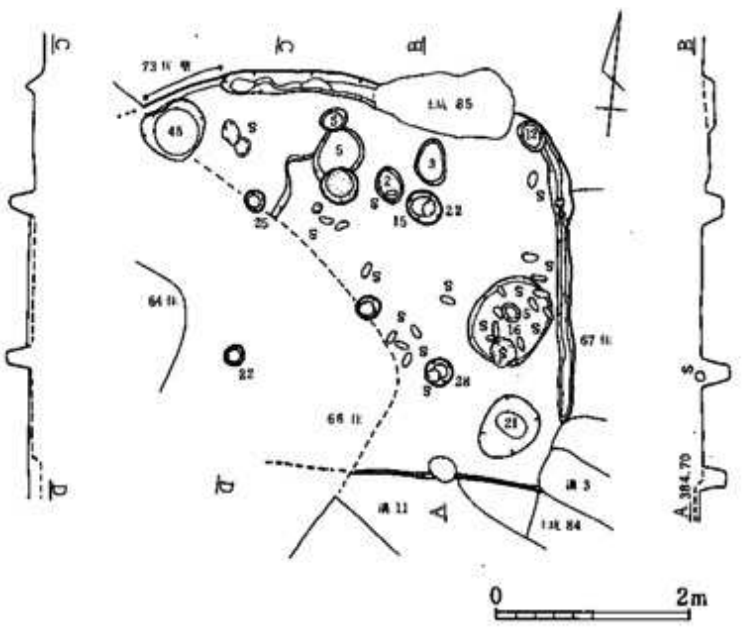
時期は、出土遺物、竪穴の形態から古墳時代前期後半に位置づけられる。　（佐合　英治）

⑩ 68号住居址・73号住居址（挿図15　第9図）

66号住居址と67号住居址の間で検出した住居址である。この住居址は西側で66号住居址と切り合っているが、新旧関係は不明である。また東側では67号住居址を切っている。したがって全体を調査することはできなかった。規模は4.0×3.6mの隅丸方形と推定できる。確認できた主柱穴と炉から主軸はN3°Eを示している。床は北西の一部を除いては貼り床が施され、ほぼ平坦である。主柱穴は66号住居址の床面で南西側のものを、66号住居址の壁で北西側のものを確認した。北東側、南東側のものは貼り床上にあった。いずれも円形の平面形をしており、深さは25cm前後である。炉は北西側と北東側の主柱穴の中間やや壁よりにある。周溝は東側で幅12cm深さ1cmと残りが良くないのに対し、北側では幅20cm深さ8cmある。しかし、北東の角付近は土坑85により切られているため、周溝は残っていない。また、66号住居址と切り合っている北西の角付近の壁は、68号住居址の壁と違った方向を示しているため、73号住居址としたがこの部分以外にこの住居址に付随するとみられる遺構は確認できなかったため、規模も主柱穴及び炉も確認できなかった。68号住居址の床面にはいくつかの穴がある。東側壁中央付近には92×76cmの比較的大きな楕円形のものがあるが、深さは5cmとごく浅い。それに対して南東の角付近にあるものは54cmの不正円形で深さは21cm、さらに73号住居址の壁とした部分の付近には直径54cm深さ45cmの円形の深い穴があった。いずれもこの住居址に付随するものとみられるが性格は不明である。壁が残っているのは、南側では溝11と溝13の間のごく一部と、北側では土坑82の西側で周溝が残っている部分のみであり、10cmと低いが比較的急角度に掘られている。

覆土から出土した遺物で図化できたものは土師器の高坏（第9図4）のみであり、それ以外は土師器の小破片で器形のわかるものはなかった。また、住居址の床面全体に、編み物石とみられる硬砂岩の細長い石が散らばっていた。

68号住居址は出土遺物と検出状態から見て古墳時代前期の遺構であるが、一部のみを確認した73号住居址につ



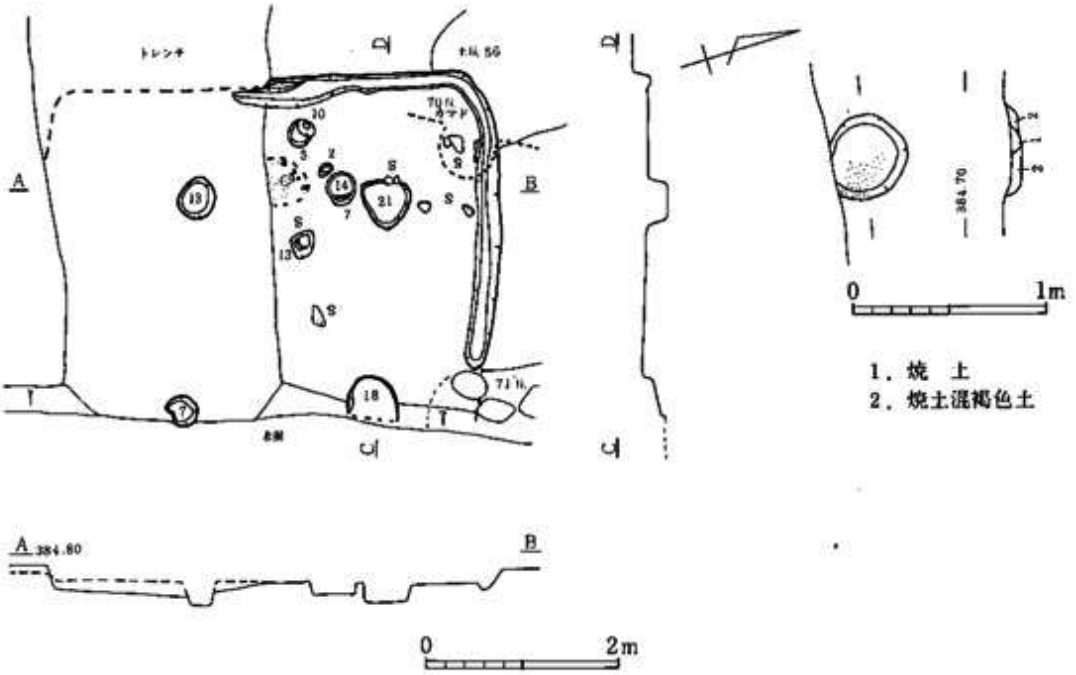

挿図15　68・73号住居址

いては時期は不明である。　　（吉川　豊）

⑪ 69号住居址（挿図16　第9・10・30図）

調査区域の北東端に検出した。住居址の南側及び東側はトレンチにかかり、北西隅に70号住居址のカマドの痕跡があり、北側の71号住居址を切る。床面を確認できたのは全体の⅓程度であるが、床確認面から2ケ所、南側トレンチ内で2ケ所、計4つの主柱穴が確認でき、主軸方向N16°W、一辺4.4mの隅丸方形竪穴住居址に復元し得る。壁面は北側では緩やかに傾斜し、西側はほぼ垂直に立ち上がり、壁高19～20cmを測る。床確認面では周溝が検出でき、北西隅がやや狭く、幅16～24cm、深さ3～9cmを測る。4主柱穴のうち、残りのよいものは、やや不整形であるが、直径28cm後後、深さ21cmを測る。炉は南側主柱穴のほぼ中間に設けられた地床炉であり、中心部に焼土が広がる。半分は南側トレンチにかかる。

出土遺物は、土師器壺・甕・高坏・甑・ミニチュア品等があり、図化したものについては残りはよい。全体として、胎土には石粒を含み、焼成は普通である。土師器壺（第9図5）は、胴部中央に最大径をもち、口縁は直線的に外反する単純口縁で、端部は丸く仕上げられる。口縁部を除く内面は黒色、口縁部及び外面は茶褐色を呈する。内外面胴部はヘラミガキ、口縁部はナデ調整が施されている。甕は相対的に大小2種類に分けられる。大型のうち、第10図1は胴部中央に




挿図16　69号住居址，70号住居址カマド

最大径をもち、口縁は直線的に外反し、端部は面取りが施される。内外面は茶褐色を呈する。内面はヘラミガキ、外面頸部はヘラミガキ、胴部は縦横のハケを施した後にヘラミガキ、下半分はヘラケズリ後にナデ調整され、口縁部には横ナデが施される。第9図6は口縁部のみである。内面は明茶褐色、外面は茶褐色で前述の甕と同形であろう。第9図7は底部のみで、内外面共にナデ調整がなされ、内面黒色、外面明茶褐色を呈する。第9図8、第10図2～4は小型品である。口縁部径と胴部径の値が近いが、やはり胴部中央に最大径をもつ。第10図3は内外面暗茶褐色、ナデ調整が施され光沢がある。外面にはススの付着がみられる。第10図4は内外面茶褐色、内面胴部はヘラミガキ、底部にはヘラ調整、外面はナデ調整、口縁部には横ナデが施され光沢がある。第10図2は上半部のみ残る。内外面は暗茶褐色。器面が若干荒れているが、内面はナデ、外面はヘラミガキ、口縁部は横ナデが施される。第9図8は内面黒褐色、外面黄褐色。内面はナデ、外面は下半分にヘラケズリがみられるほかはナデ調整が施される。胎土に径2.5㎜程の小石を少量含む。残部は底部の$^{1}/_{5}$程であるが、胴部への立ち上がりからみて、中型品となるかと思われる。高坏（第10図5）はハの字状に広がる脚部のみが残る。内外面橙色。器面が荒れているが、ナデ調整が確認できる。図示していないが、甑の底部が出土している。内外面橙色。器面が荒れているが、内外面にヘラ調整が施されている。胎土に径3㎜程の小石を含み、焼成はあまり良くない。穿孔は一つである。付着物はない。ミニチュア品（第30図2）は手づくねによるもので、部分的にナデ、ヘラにより調整がされている。内外面黒褐色を呈する。西側の壁近くに出土。

出土遺物から本住居址は古墳時代前期に比定される。　　（澁谷　恵美子）

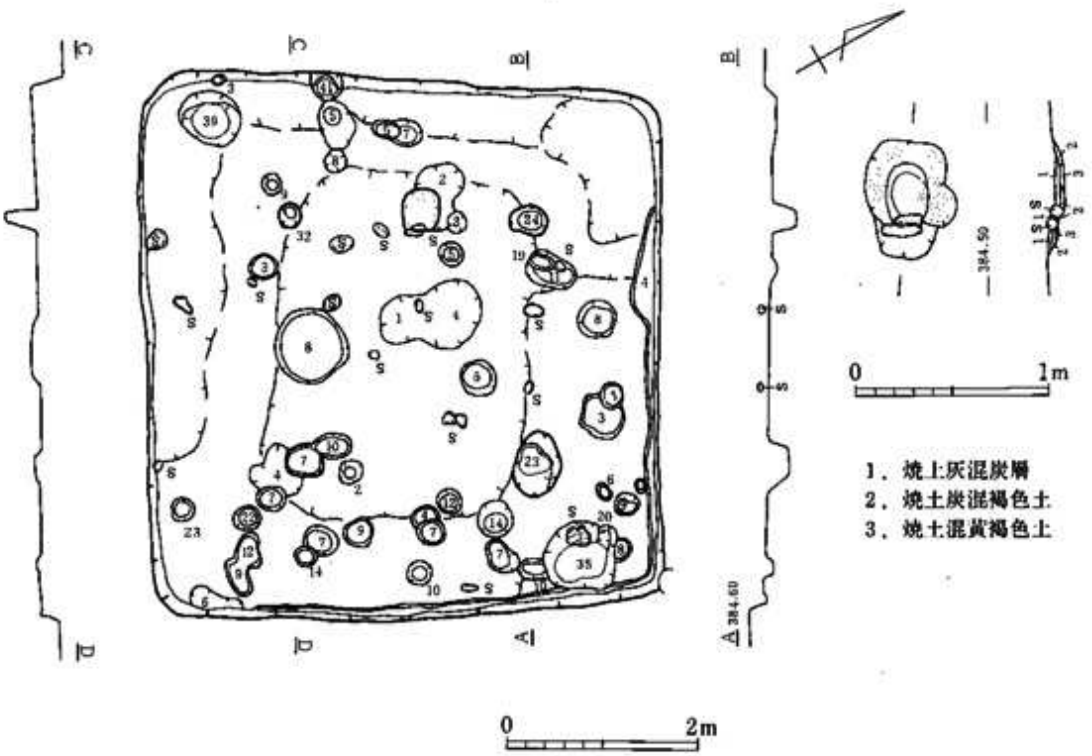
⑫　72号住居址（挿図17　第10・30図）

調査範囲の中央部からやや北側に検出した。本址の上層には溝址3、竪穴14・15、土坑41～46・77・78等多数の遺構が存在していたが、全体が調査できた。方形の竪穴住居址である。規模は5.6×5.3mを測る。主軸方向はN64°Wを示す。検出面からの壁高は13～23㎝を測る。壁面は垂直に近い立ち上がりを成す。周溝は北東及び南東の壁直下に検出したが、深さは2～4㎝で浅いものである。床面は主柱穴内側が凹んでおり、全体に凹凸がある。住居址中央の凹んだ部分は堅く良好なものであるが、壁ぎわは軟弱なものである。北西と南西部は極めて軟弱で、最終的に壁より50～80㎝の間が溝状に凹むものとなった。主柱穴は4本である。平面形も深さもばらつきがあり、径は25～50㎝を測る。深さは北東側の二本が25㎝、西隅の穴が33㎝を測るが、南のものは5㎝と浅い。掘り足らなかった可能性がある。本址に付属する施設として、東隅壁下の穴がある。遺物の出土状態から、いわゆる貯蔵穴と考えられる。底部は壁にそって長方形に掘られているが、上部は規模75×75㎝の方形である。深さは35㎝を測る。また、西隅にも径60㎝、深さ40㎝の穴があり、本遺構に伴う可能性があるが、遺物の出土はなかった。炉址は北西側の主柱穴二本のほぼ中央にある。住居址中央部側に炉縁石を二個伴った地床炉である。規模は東西に長く、60×45㎝

を測り、深さは10cmである。

出土遺物は、比較的多い。土師器甕（第10図6～8）、壷（9）、高坏（10）などがある。甕6は肩部が張り出し、口縁部が垂直に立ち上がるもので、壷とも云えるものであるが、胴部の中程に帯状にすすが付着しており、甕とした。外面にはヘラ、内面にはヘラと指頭の調整痕が見られる。7と8は口縁部と底部片である。全体形は不明であるが中型の甕で、内外面もヘラミガキの整形を主体としている。6と8の胎土中には小石粒が混入、7には含まれている。どれも焼成は良好である。色調は7の内面が黒色を呈しているほかは、茶色である。壷はいわゆる小型丸底土器である。胎土中に小石粒が混入し、焼成は普通、明るい茶色を呈している。器面が荒れるため整形は不明である。高坏は坏部の破片で、浅いものである。体部下半に稜が作り出されている。これより下部はハケ調整している。上部はナデで、内底部はヘラ整形である。色調は薄い橙色、焼成は良好である。胎土中には小石粒が混入し、やや大きめの石粒も認められる。他に石製品として臼玉（第30図4・5）がある。

時期は、出土遺物から古墳時代前期後半に位置づけられる。　　（佐合　英治）



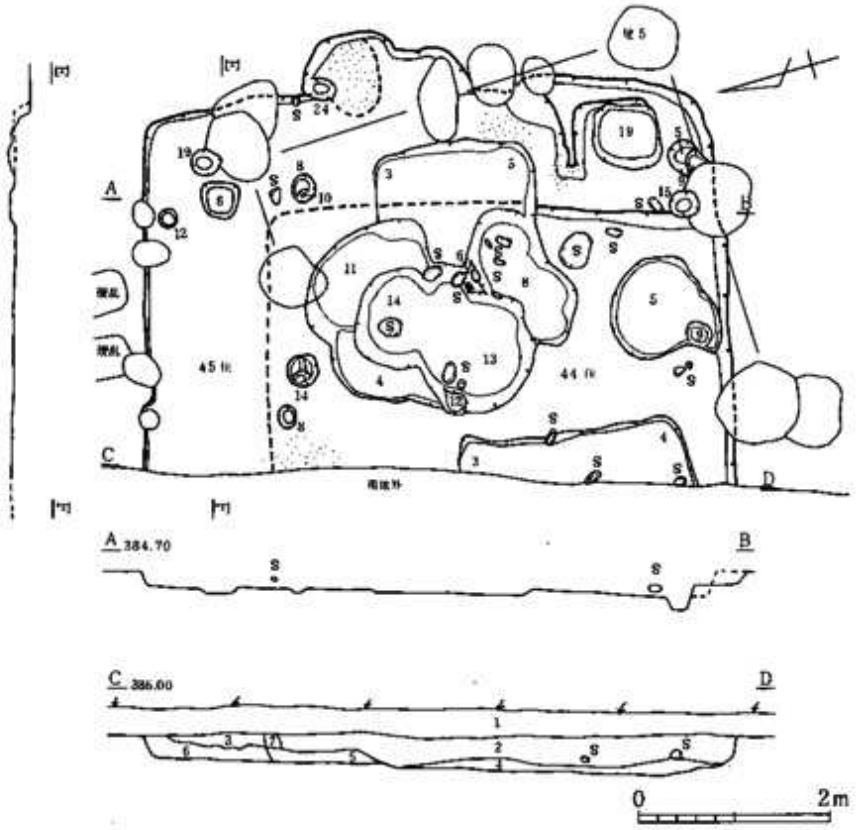

挿図17　72号住居址

## 平安時代

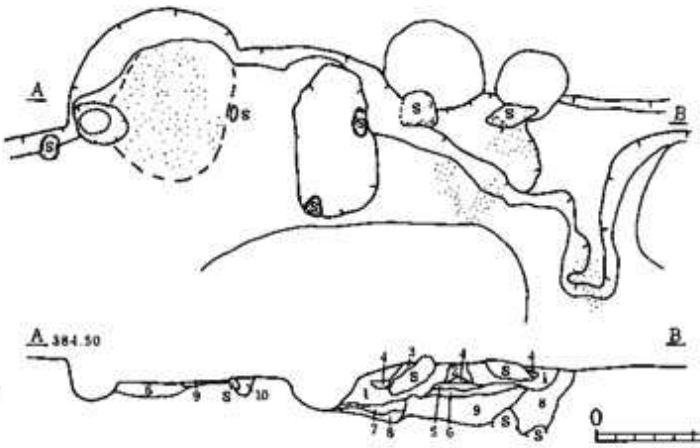
### ① 44・45号住居址（挿図18　第11～14図）

調査区の南西端に重複して検出された。両者とも西側は用地外となっている。44号住居址は、55号住居址の床面検出中に把握された竪穴住居址で、調査できたのは全体の½程である。55号住居址床面が方形に落ち込み、北側にカマドの残骸と考えられる焼土が認められた。全体の規模は不明であるが、把握した一片の長さは4mを測り、この面の方向軸はN17°Eを示す。本住居址の壁そのものの立ち上がりは把握できなかったが、南の壁は55号住居址の壁と重複している。この部分の壁高は31cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は凹凸が激しく、軟弱なものである。床面上には、土坑状の凹みと穴が確認されたが、本址に伴うものかは把握できなかった。主柱穴は確認できなかった。55号住居址も全体の½程を調査した隅丸方形竪穴住居址である。確認した東壁の長さは5.8mを測る。主軸方向はN103°Eを示す。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、北壁の壁高は14～20cmである。床面は比較的平坦なものである。南側では叩き状の層が複数認められたが、北側はきわめて軟弱なものである。主柱穴、周溝は確認できなかったが、南隅に貯蔵穴と考えられる穴が検出された。一片70cmの方形の穴で、周囲が土手状に高くなっている。深さは18cmを測る。カマドは東壁にあり、右隅によっている。石芯粘土カマドであるが、穴等に切られ保存状態は悪い。また、この壁の中央部は外に張りだしており、この部分の床面上には締まった焼土が検出された。別のカマドの火床と考えられる。このことや、カマド位置、床面の状態等から、本址はカマドの作り替え、竪穴の拡張、もしくは、3軒の住居址が重複していた可能性がある。

出土遺物は比較的多い。図化等できる土師器として、甕（第11図1～16）、坏（第12図1～10）があり、甕には長胴のものと、小形のものがある。器面が荒れているため顕著に認められないものもあるが、搬入品と考えられる16を除いて、すべてカキメ整形の甕である。底部には、丸味を持ったもの（第11図10・11・13）と、平らなもの（12・14）二者があり、後者には葉脈痕と、糸切り痕が認められ、14の側面には削り整形も認められる。どの甕も胎土中に小石粒を含み、焼成は普通である。坏はすべて内面黒色処理されているものである。体部がやや内湾するもの（第12図1～4）と、開くもの（5～10）があり、後者は前者に比べ一回り大きい。また、両者とも底部と体部を明瞭に作り出すものとそうでないものとがある。底部にはすべて糸切り痕が認められるが、すれの激しいものが多い。胎土中には、小石粒が混入し、雲母を含んでいる。焼成は普通から、やや不良で、軟質である。色調は、薄い橙色もしくは薄い茶色を呈している。須恵器には、甕（11～20）、壷（第13図1・2）、坏（3～19）がある。甕で全体の器形が知れるものは無い。第12図19を除き、外面はタタキ、内面は指頭のナデで整形されている。胎土中には、石粒、小石粒が認められ、焼成は良好である。色調は、薄い灰色、もしくは紫をおびた灰色である。壷とした第13図1・2の内1は底部のみで別の器形となる可能性がある。2は取って付きの小形の壷で、1と同様に底部には糸切り痕が認められるが、自然釉が全体に掛かりこれを埋めている。1の胎




1．灰色泥土(水田耕土)
2．灰褐色砂質土
3．灰色砂土
4．暗褐色粘質土混灰色砂土
5．灰色砂土混暗褐色粘質土
6．黒褐色粘質土
7．攪　乱




1．黄褐色粘質土(焼土含む)
2．黄褐色粘土
3．黒色土
4．黄色粘土
5．焼土 黄色粘土混褐色土
6．黄褐色土混焼土
7．炭混黄褐色土
8．暗褐色土
9．黄褐色砂質土(焼土、炭をわずかに含む)
10．黄褐色砂質土

**挿図18　44・45号住居址**

土中には小石粒が認められ、青灰色を呈している。2の胎土は精良なもので、色調は白色である。焼成は両者とも良好である。坏には高台部がないものと、有るものがある。前者の坏には内側底部と体部に明瞭な稜を持つものと無いものがある。すべてに顕著なロクロ痕が認められ、底部は回転糸切により離されている。いずれの胎土にも小石粒が含まれており、焼成は良好である。色調は、薄い灰色もしくは灰色である。高台付き坏には大小二種がある。いずれの体部も底部より角度をもって立ち上がっている。また、19の底部には糸切り痕が認められる。図化した灰釉陶器（20・21）はいずれも碗で、淡緑色の釉薬が浸け掛けにより付されている。両者とも、胎土、焼成は良好、色調は灰白を呈している。他に、石器として砥石（第14図1・2）がある。

44号住居址の時期は、切り合い関係が把握できず、確実に伴う遺物がわからないため、不明である。

45号住居址は、カマド中より出土した灰釉陶器皿の破片から、平安時代に位置づけられる。

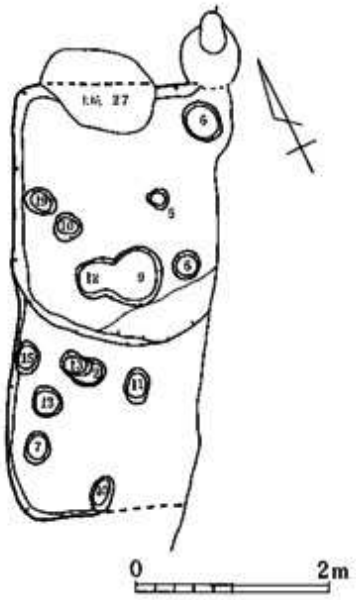
（佐合　英治）

② 47号住居址（挿図19）

調査区の南西、46・49号住居址の北東側に検出された。土坑27と重複する。水田造成の際削平を受け、北西側⅓程度が遺存しているのみである。北東・南西方向4.5m、南東・北西方向N62.7°Wの方形を呈する竪穴住居址で、北側は一段低くなる。本址上部は耕作による攪乱が及んでおり、床面まで約10cmと浅いため壁の立ち上がりの状態は不明である。床面は南側では硬く締っているが、北側では地山礫が露出する。主柱穴・付属施設等詳細は不明である。

出土遺物は遺構と同様、遺存状態は不良で出土量は僅少である。土師器甕・坏、須恵器坏等がある。土師器甕は外面にカキメが施され、須恵器坏は回転糸切りされる。

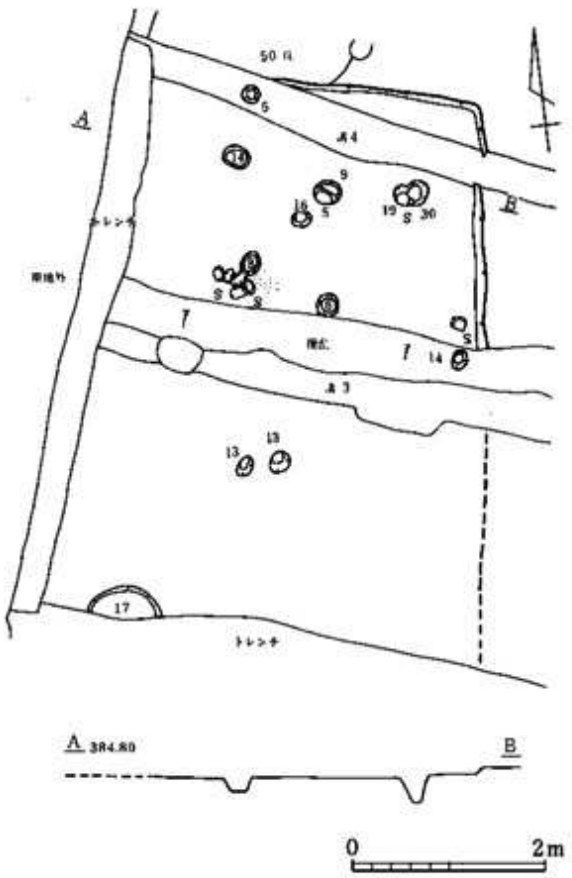
出土遺物等から本址の所属時期は平安時代後期に比定される。（馬場　保之）




挿図19　47号住居址

③　48号住居址（挿図20　第14図）

調査区の西方、試掘トレンチDの北側で用地境付近に白色砂土を確認した。さらに検出を行なった結果ほぼ直角に曲がる部分があったため住居址とした。水田の造成により削平された部分は溝3の北側から試掘トレンチまで続いており、この住居址の南側の壁はわからない。しかし、溝3の南側にある2個の柱穴までがこの住居址の範囲と考えられる。したがって、この住居址は溝3及び溝4に切られ、北側では50号住居址と切り合っているが、新旧関係は不明である。このような状況で確認できた壁は東側の一部と北側の一部にとどまり、規模及び主軸方向は正確にはつかめなかったが、検出時に確認できた北東の角から溝4を挟んだところに深さ30cmと比較的しっかり掘られた直径26cm程度の柱穴がある。これを主柱穴と考えればこの穴の西北西1.9mの所にある直径30cm深さ14cmのものと溝3中にある46×32cmのものも主柱穴と推測できるため、住居址の大きさも3.8×3.3mの隅丸方形と考えられる。また、試掘トレンチから土層確認のために用地境ぞいにあけたトレンチEの断面でも住居址の覆土と考えた白砂は確認できなかったこともこの範囲の推測材料となった。




挿図20　48号住居址

床は柔らかくはっきりしていない。壁は比較的急角度に掘り込まれているが、その高さは10cmとごく浅い。

先に記述した西側にある主柱穴の中間で、焼土及び礫がまとまっている部分があるがこの住居址に付随するものとは考えにくい。

覆土からは出土した遺物で図化したものは須恵器の蓋（第14図3）のみであるが、そのほかにも灰釉陶器及び土師器の小片がある。

出土した遺物から判断する限り平安時代の遺構である。

（吉川　豊）

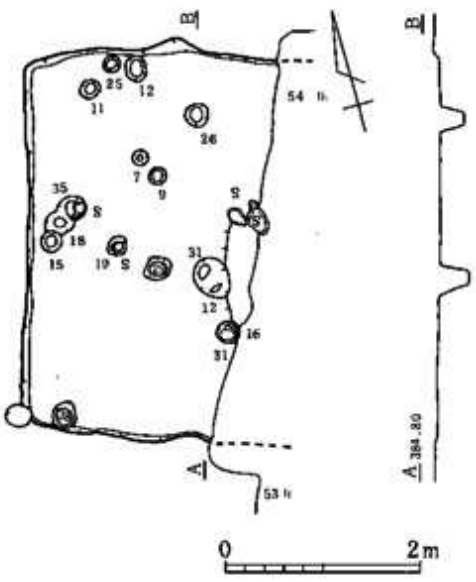
④　52号住居址（挿図21）

調査区中央やや南寄りで48号住居址の覆土と同様の白色砂土を確認し直角に曲がる角を検出したため、住居址とした。東側の半分は54号住居

址と切り合うが新旧関係は不明である。隅丸方形住居址と考えられるが、調査できた部分は4.0×2.6mの東側半分のみであった。カマドの所在もつかめず、主軸方向は不明である。床面はほぼ平坦であるが、柔らかくはっきりしない。壁は最も残りの良い北側でも6cmとごくわずかであり、南側はほとんど残っていなかった。主柱穴は特定できなかったが、床面でいくつかの穴を確認したが、大きさ・深さはさまざまである。

覆土からは小片であるが、カキメのある長胴甕や須恵器坏が出土している。平安時代の遺構と考えられる。

（吉川　豊）




挿図21　52号住居址

⑤　53号住居址（挿図22　第14・15図）

52号住居址の南東で確認した住居址で、5.5×5.3mの隅丸方形と見られる。北側で54号住居址と切り合うが、新旧関係は不明である。東角は59号住居址を切り、東壁には集石1が、覆土上には集石2がある。南側では55号住居址を切っている。床は柔らかくはっきりしていないがほぼ平坦である。床面では多数の柱穴が確認できたが、主柱穴を特定することはできなかった。壁は西側がほぼ直角に8cm掘り込まれており、それ以外は比較的急角度に10cm程度の掘り込みである。

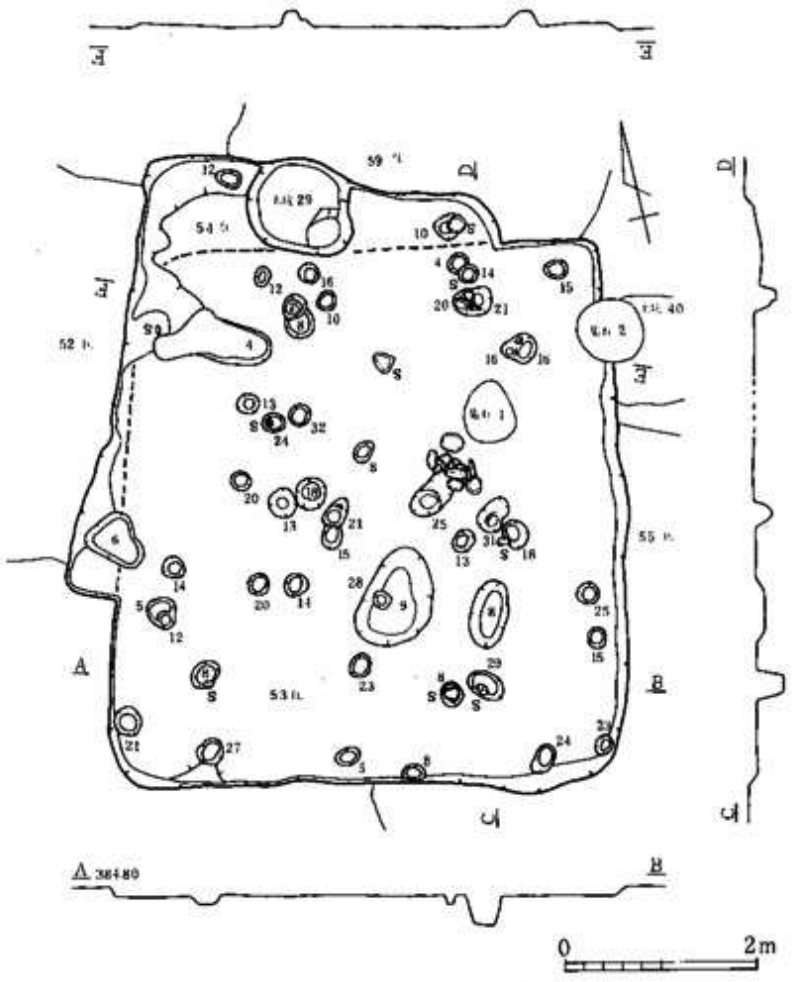
覆土は白色の砂土であり、52号住居址と同じである。出土遺物としては篦磨きのある土師器の小型甕（第14図8及び9）、カキメのある長胴の甕（第14図4）がある。また、須恵器の甕（第15図1・2・3及び4）は破片であるが、タタキがあり自然釉がかかっている。須恵器の坏の底部は回転糸切りの痕が残っている（第15図5）。　その他にも土師器の破片があるが、混入と考えられる（第14図5・6・7）。

遺物等から判断して、平安時代の遺構である。

（吉川　豊）

⑥ 54号住居址（挿図22　第15図）

53号住居址の北側で52号住居址の壁ぎわに直角に曲がる部分を確認した。当初は53号住居址のものと考えたが、この角から南東に3.6mの箇所、及び南西に4.4mの箇所に住居址の角が確認できたため新たに住居址とした。規模は4.4×3.6mの隅丸の長方形と推定できる。ほとんどが53号住居址と切り合っているものの、北西に位置する52号住居址の床面にごくわずか壁が残っている。さらに59号住居址を切る北東の壁は土坑29により一部切られているが、他の部分に比べれば比較的残っているが、深さは10cmで緩やかな掘り込みである。床面は53号住居址と切り合うため、いずれのものか判断できなかった。したがって、確実に54号住居址の床と見られる部分はごく一部でしかなかった。その部分は52号住居址と切り合う西角、及び北の角付近と59号住居址を切る東角付近のみである。この部分では壁際から中央に向かってやや傾斜している。主柱穴やカマドの位置は不明である。




挿図22　53・54号住居址

やはりこの住居址の覆土も52号及び53号住居址と同様白色砂土である。この住居址に付随すると判断できる遺物は少ない。須恵器の高台付き甕（第15図７）はロクロ整形がはっきり残っている。その他に図化したものはなく、長胴の甕の破片の拓本（第15図６）をのせた。

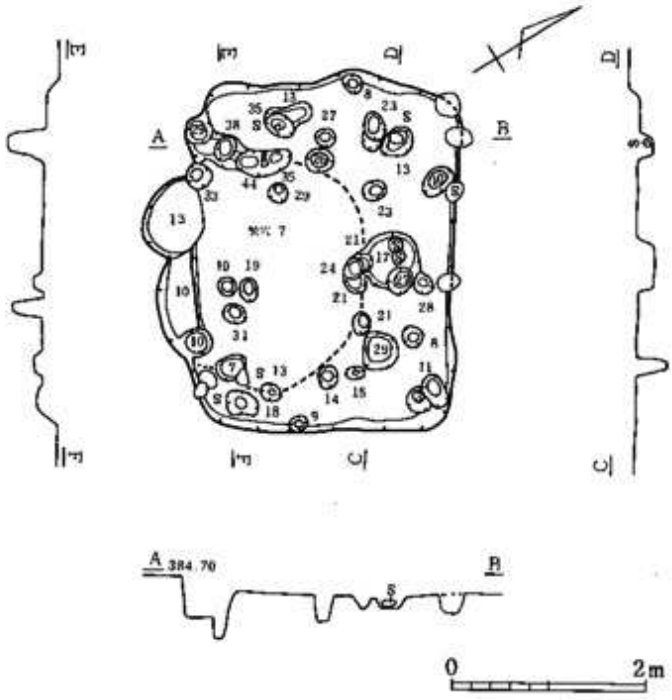
平安時代の遺構と判断した。

（吉川　豊）

### ⑦ 56号住居址

（挿図23）

調査区西側やや中央寄りに、72号住居址を切り、竪穴7に切られて検出された。また57号住居址に接する。南東・北西方向3.6m、南西・北東方向2.7mを測る隅丸長方形を呈する竪穴住居址で、主軸方向はN58.3°Wを示す。埋土は黒褐色土である。床面はほぼ平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。焼土・炭は認められず、付属施設等詳細は不明である。




挿図23　56号住居址，竪穴7

出土遺物は土師器甕・坏、須恵器甕・坏、青磁等であり、出土量は僅少である。土師器甕はカキメ、須恵器甕は外面平行叩きが施される。土師器坏・須恵器坏は回転糸切りされる。

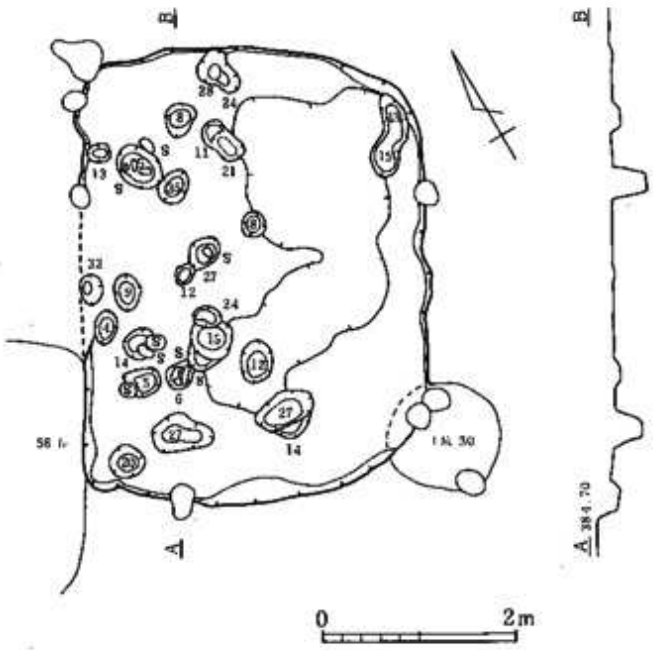
出土遺物・重複関係等から平安時代後期に比定される。　（馬場　保之）

### ⑧ 57号住居址（挿図24　第15図）

調査区西側やや中央寄りに、56住に接し、土坑38・39・73に切られ、土坑30と重複して検出された。南東・北西方向3.6m、南西・北東方向4.7mを測る隅丸長方形を呈する竪穴住居址で、南東・北西方向はN60.9°Wを示す。埋土は黒褐色土の一層である。床面の状態は凹凸が著しく、南東半の地山礫の露出する部分で不整形の掘り凹みがある。

出土遺物は土師器甕・坏、須恵器甕・蓋・坏、砥石等平安時代後期の遺物の他、弥生時代後期前葉の甕、甕・天目碗・鉢・擂鉢等の中世陶器があるが、出土量は僅少である。須恵器甕は外面平行叩きの施されるもの、格子叩きの施されるものがある。坏は高台付の他、糸切り底がある。

出土遺物等から本址の所属時期は平安時代後期に比定される。　（馬場　保之）




挿図24　57号住居址

⑨　70号住居址（挿図16　第15図）

土坑56が69号住居址を切っているが、その69号住居址の北角の覆土上面で灰色砂土と数個の石を確認した。さらには、試掘トレンチEの北側の壁にも同様の砂を確認している。そのため、この部分は住居址の可能性があるとしたが、表土剥ぎの際深く削平したため壁・床・柱穴等住居址に関するものはなにも確認できなかったため、69号住居址を先行して調査した。したがって、この住居址についてはなにもわからない状態である。出土している遺物の範囲が、試掘トレンチEの壁と前述の石の下であるため、この住居址は69号住居址に重なっているものと見られる。

遺物は、試掘トレンチE内から灰釉陶器の皿（第15図17）が、また、69号住居址の覆土上部の石の下からは灰釉陶器の碗（第15図16）、土師器の坏で貼付高台をもつもの（第15図13・14・15）と底部が糸切りのままの坏（第15図9・11・12）また、ロクロ整形の痕がはっきり残っている篦切りの坏（第15図10）が出土している。

遺物から見れば平安時代の遺構であるが、住居址でない可能性もある。　　（吉川　豊）

**時期不明住居址**

①　50号住居址（挿図25）

調査区西端で、48・51号住居址および溝址4に切られて検出された。西半は調査区外にかかり未調査であり、かつ重複遺構のため、規模・主軸方向等詳細は不明である。床面は平坦であるが、硬い部分は検出されなかった。床面までは浅いため、埋土は灰白色砂の一層が把握されたのみで、壁の立ち上がり状態も不明である。

出土遺物は土師器甕・坏、須恵器蓋があり、いずれも細片で出土量も僅少である。

時期は不明である。

（馬場　保之）

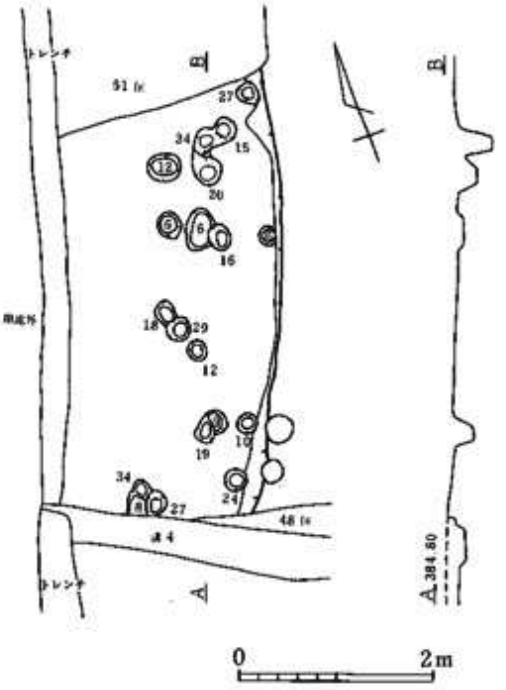
② 51号住居址（挿図26）

調査区西端で50号住居址を切って検出された。西半は調査区外にかかる。南北4.3m、主軸方向N85.3° Wを測り、方形を呈する竪穴住居址である。床面はほぼ平坦で、全体的に軟弱である。検出面から床面までは浅いため壁の立ち上がりの状態は不明であるが、南壁側はだらだらと掘り凹む。付属施設等の詳細は不明である。

出土遺物は土師器甕・高坏、須恵器甕・坏等で、出土量は僅少である。

古墳時代に属すると考えられるが、詳細は不明である。

（馬場　保之）

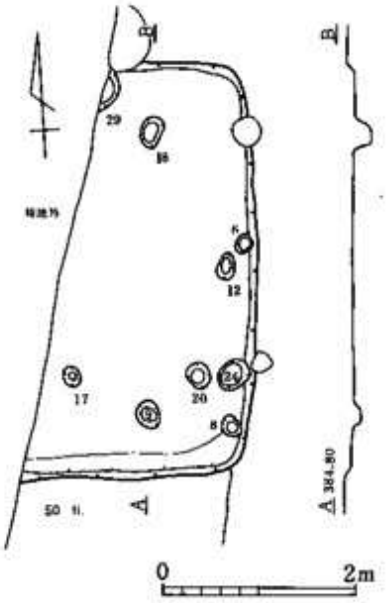



挿図25　50号住居址

③ 58号住居址（挿図８）

調査範囲の中央部のやや南に検出した。55号住居址と重複し、溝址３・４に切られている。東側は、水田の造成時に切り土され、南西側は削平されているが、ほぼ全体が調査できた。規模、形態は一辺3.7mの方形竪穴住居址と考えられる。壁が確実に確認できたのは北西壁のみで、この壁の軸方向はN39° Eを示す。ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は10cm前後であるが、南東壁は２cmの立ち上がりを一部把握するに止々まった。

周溝は北西壁直下にのみの検出で、深さは２～９cmである。また、北東壁が存在していたと考えられる部分には、55号住居址周溝が確認されている。この周溝のプランは乱れており、同位置に周溝が存在していた




挿図26　51号住居址

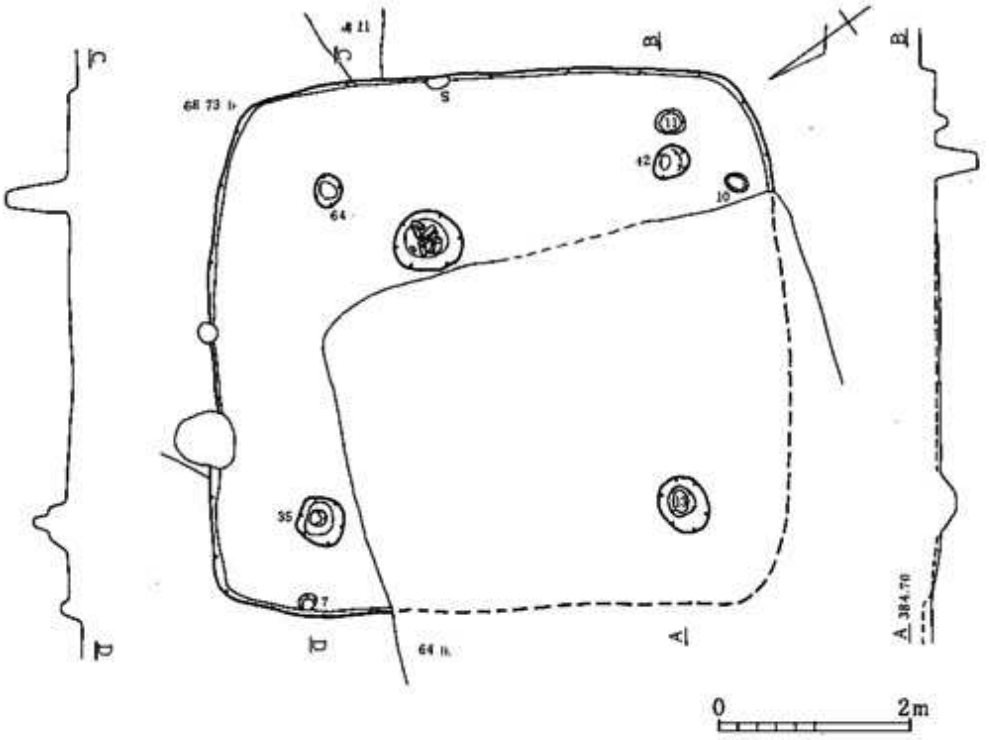
可能性がある。床面は平坦なものであるが、きわめて軟弱で確実に把握できるのは、北側部のみである。主柱穴等は確認できなかった。西隅にある径１ｍ程の穴は、当初本址に伴うものと考えたが、把握した隅の壁から張り出すため別遺構とした。カマド、炉址等の付属施設も確認できなかった。

出土遺物は、きわめて少ない。土師器甕、高坏などがあるが、みな破片である。

出土した遺物は、みな古墳時代前期に位置付くものであるが、時期を判断する材料としては乏しく、本竪穴の時期は、不明である。　　（佐合　英治）

④　68号住居址（挿図27　第16図）

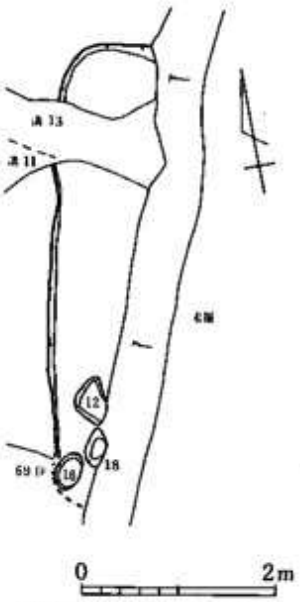
64号住居址の東隣で検出、調査した5.7×5.5ｍの隅丸方形の住居址である。東側では68号住居址と切り合うが、新旧関係はつかめなかった。また、西側では64号住居址に切られているため、この住居址の中央部から西側約半分はなにも残っていない。しかし、４本の主柱穴のうちの１本を64号住居址の床上で確認した。その他の３本の主柱穴は、残存している比較的良好な貼り床上で確認、いずれもしっかりと掘られているのに対し、64号住居址内で確認したものは13cmと浅い。主軸方向は炉（もしくはカマド）の位置が不明でありつかめなかった。確認できた床面はほぼ平




挿図27　66号住居址

坦であり、壁は比較的急角度に掘られているが、最も高いところでも14cmと浅い。主柱穴のほかには、ほとんど柱穴がない。ただ東側の主柱穴の西に細長い石を持つ直径60cm深さ37cmの穴がある。これらの石は編み物石と考えられ、人為的に穴の中へ入れたものと見られる。

暗褐色の覆土からは弥生時代後期の口縁部の破片（第16図1・2）や斜走短線がある壷の胴部の破片（第16図3）やふたつに割れていたが硬砂岩製の環状石斧（第16図5）が出土しているが、出土状況からみると混入の可能性が高く、時代は特定できなかった。（吉川　豊）



挿図28　71号住居址

⑤　71号住居址（挿図28）

調査区域の北東端、69号住居址の南側にて検出した。69号住居址、溝13及び東側のトレンチに切られ、わずか西壁部分が確認されたのみである。これから復元して、一辺4.8m前後の隅丸方形竪穴住居址となると思われる。

本住居址に伴う遺物はないが、本住居址を切る69号住居址よりは古い。とはいえ周囲の状況からみてもそれほど遡らない時代のものであろう。（漣谷　恵美子）

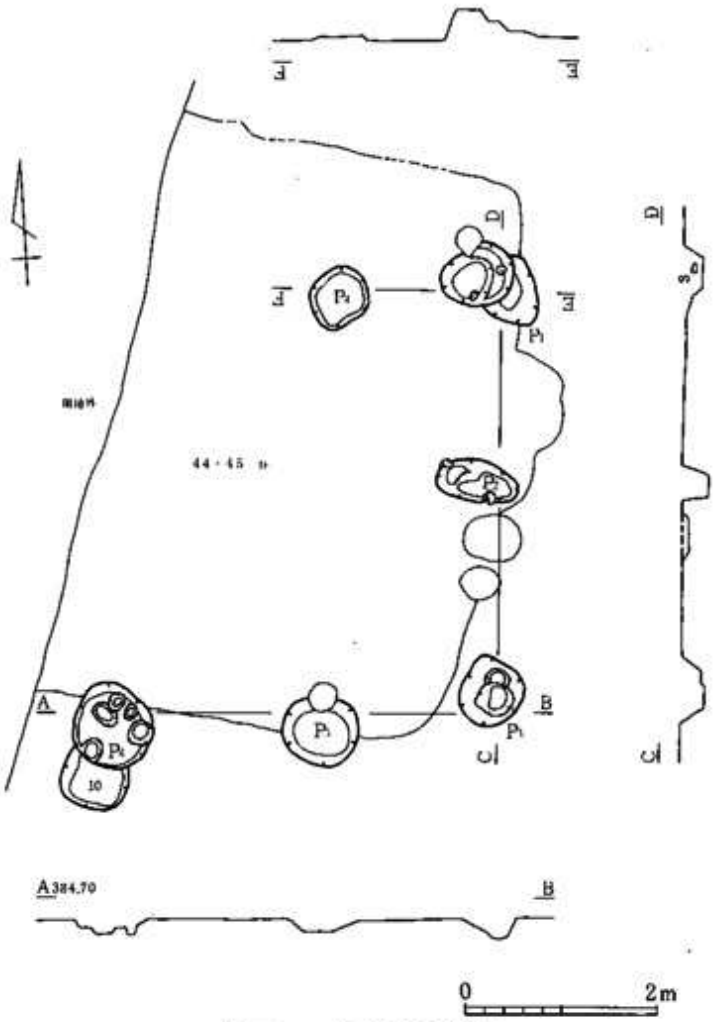
## 2）掘立柱建物址

### ①　掘立柱建物址5（挿図29　第16図）

調査区の南西端、44・45号住居址を切り、一部調査区外にかかる。梁行3間以上、桁行2間の側柱のみの建物址で、柱間は梁行方向2.0m、桁行方向2.3mを測る。主軸方向はN86.5°Wである。柱穴はおおむね径約80cmの不整円形を呈する。埋土は灰白色砂である。

出土遺物は外面カキメの施される土師器甕、軟質の須恵器坏、灰釉陶器碗等であり、出土量は僅少である。

出土遺物・重複関係等から平安時代後期の建物址と思われる。（馬場　保之）

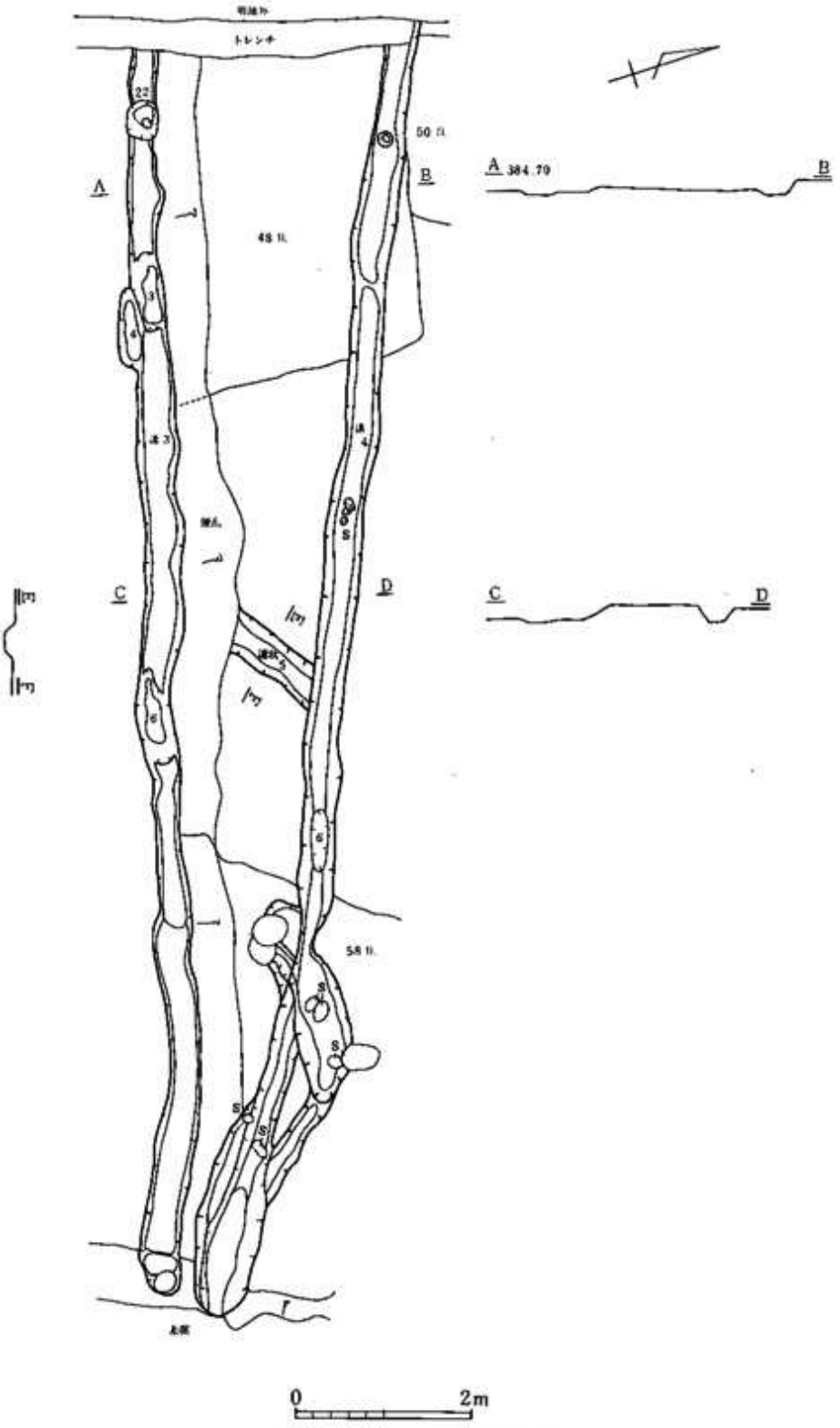



**挿図29　掘立柱建物址5**

### 3）溝址

#### ①　溝址3（挿図30）

試掘トレンチDに平行しておおむね東から西に延びる溝である。東端では58号住居址を切る。しかし、58号住居址以東は水田の造成時に、削平されたため残っていないが、さらに延びるものと見られる。西側は調査区内で48号住居址の床面を切り、さらに用地外へ延びるものと考えられる。したがって調査できた部分で全長が14mにとどまった。この溝の北側にはやはり水田の造成による段差があり、これに多少検出面は低くなったものと考えられるため、この溝の深さは3cmとごく浅くなったと推定される。そこはほぼ平坦であるが、所々に楕円形の落ち込みがある。また、幅は40cmとほぼ一定である。




**挿図30　溝址3・4, 溝状址5**

覆土からは弥生時代とみられる甕の口縁部の破片及び小型壺の口縁部の破片、古墳時代とみられる高坏の脚部が出土しているが、時代の特定はできなかった。また、性格も不明である。

（吉川　豊）

② 溝址４（挿図30）

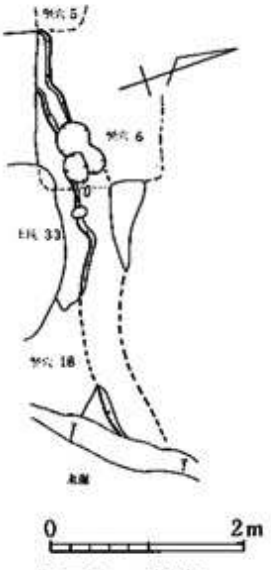
溝３の北側で検出した、南東から北西にむかって延びる溝である。南東では58号住居址を切り、北西では48号住居址を切っている。検出状況は溝３とほぼ同様である。調査した部分で全長14.8m、58号住居址以西では幅40cm深さ14cmとほぼ一定で底部も平坦である。それに対し、58号住居址上では、幅は80cmまで広がり、深さも一定でなくいくつかの落ち込みの連続のようにも見える。

覆土からは弥生時代の波状文を施した甕の破片、土師器の甕破片、タタキの残る須恵器の甕の破片、灰釉陶器片、鉄釉を施した摺鉢の破片、近世陶器片などが出土しているが、いずれも小破片であり、時代の特定にはいたらなかった。なお、性格についても不明である。（吉川　豊）

③ 溝址５（挿図30）

調査区南端、水田の畦畔の際に検出された。畦畔と同一方向をとり、埋土は耕土と同一である。二段の掘り込みになっており、西側が一段高い。ごく近年の水田造成に伴なう攪乱と判断された。

（馬場　保之）




挿図31　溝址6

④ 溝址６（挿図31）

調査区のほぼ中央、竪穴６・18と重複して検出された。蛇行するものの、ほぼ東西方向に走る。幅20～40cmで、掘り込みは浅い。底面は地山の砂礫層に達し、平坦である。

出土遺物はなく、時期不明である。　（馬場　保之）

⑤溝址７（挿図32第16図）

調査区の中央やや北寄り、61号住居址、溝址８、竪穴８・９、土坑48・75と重複して検出された。北西・南東方向にゆるやかなS字状に蛇行する。北西端では幅3.0mと幅広であるが、溝底部の大きさでみる限り全体で大きな差異はない。溝上端の相違は調査区東側で検出面レベルが相当低いことに起因すると考えられる。

北西端には径10～50cmの大小さまざまな礫が多数集中する。僅かに南東側に下っている。

出土遺物は天目碗・擂鉢・碗等の陶器、大平鉢、青磁碗・皿、白磁碗といった中世の遺物のほか、土師器甕、須恵器甕・坏、灰釉陶器碗、砥石等がある。出土量は僅少である。

出土遺物から中世に比定される。（馬場　保之）

⑥　溝址８（挿図32）

調査区中央やや北寄り、62号住居址、溝址７・９と重複して検出された。溝址７とほぼ平行する。北西端は62号住居址と重複するものの、その延長は溝址７の左端にたどりつく。また、本址の南東端は溝址７に合流する。溝址７の一部である可能性も否定できない。幅20～40cmを測り、底面は平坦である。

出土遺物はなく、時期不明である。（馬場　保之）

⑦　溝址９（挿図32）

調査区中央やや北寄り、62号住居址、溝址８、土坑50と重複して検出された。南東半のプランは地山の砂礫層のため不明瞭である。北西側に径10cm程度の礫がが集中する。

出土遺物はなく、時期不明である。（馬場　保之）

⑧　溝址10（挿図33）

調査区中央東側、Fトレンチで、溝状址４、土坑51・52と重複して検出された。わずかに西側に湾曲するものの、ほぼ南北方向に延びる溝で、幅30～40cm、深さ４～８cmを測る。水の流れた痕跡はない。

出土遺物はなく、時期不明である。（馬場　保之）

⑨　溝址11（挿図33）

67号住居址及び68号住居址の南側で検出したおおむね東西に延びる溝である。66号住居址を先に調査したため溝はこの部分で切れているが、さらに北西に延びていたものと考えられる。途中土坑84を切っており、その部分から若干東へ曲がり、溝11と交わる。調査できた部分は全長4.4mで幅は90cmとほぼ一定である。深さは20cmで底は平坦、壁は比較的急角度に立ち上がっている。

覆土からは土師器の甕の破片、天目茶碗及び青磁の破片が出土しているが時期の決定には至らなかった。性格も不明である。（吉川　豊）

挿図32　溝址7・8・9

⑩ 溝址12（挿図33）

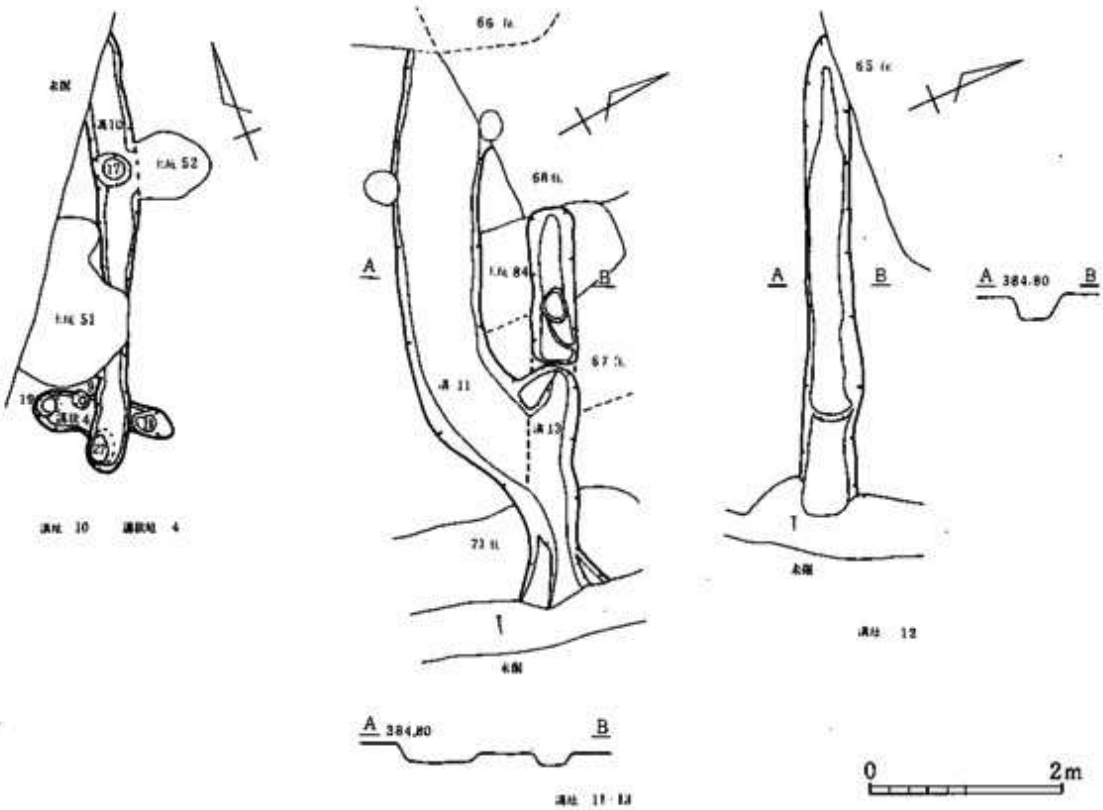
調査範囲の北東に検出した。南東側は水田造成時の切り土により削平されている。北西側は65号住居址南西隅部と重複し、これを切っている。住居址を越えた部分では検出できなかった。長さ5mを確認し、軸方向はN68° Wを示す、幅は50cm前後、深さは9～25cmを測る。壁面は比較的緩やかな立ち上がりの部分が多い。底部は丸味を持ったもので、比高差は北西から南東へ13cm低くなる。覆土は一層で、一気に埋まっており、ブロック状の黄色土が認められることから、人為的な埋土と考えられる。

遺物には、須恵器蓋と坏の細片が一片づつ出土しているが、本址に付属するものかは不明である。

時期、性格を把握できる材料はない。　（佐合　英治）

⑪ 溝址13（挿図33）

溝11の北側で67号住居址を切って北西から南東に延びる溝を検出した。68号住居址方向へ延び




挿図33　溝址10・11・12・13，溝状址4

るものと見られるが住居址の調査を優先させたため土坑84の部分までしか調査できなかった。また、71号住居址を切る南東端は水田の造成のため削平されている。

調査した部分は全長4.2mで幅は40cmでほぼ一定。深さは8～2cmとごく浅く、底は平坦である。覆土からの遺物の出土はなく、時期及び性格は不明である。　（吉川　豊）

⑫ 溝址14（挿図34第17・18図）

Dトレンチに検出した溝址で、幅5m余、長さ5.5m調査した。基盤は天竜川の氾濫原であり、深さにより変化し調査は困難であった。非常に厚い大きな転石混りの灰白色砂礫層の上に、暗褐色土がのり遺物が混入していた。暗褐色土の範囲両側に灰色砂土が溝状に入り、その2本を先に調査した。写真撮影・実測後暗褐色土を掘下げたが、遺物はすべて同時期であった。溝址14とした暗褐色土の範囲は、古水田の可能性が大である。

遺物の出土量は比較的多く、甕・壷・高坏・坩・石器等である。甕17図10は口唇部にきざみ目が入り、3・4・9は底部である。6は台付甕の下部で実測部は完存している。壷17図1・2・5の現存部は小さく、5の内面は剥落している。17図11はミニチュアで甕を模したものである。石器18図1は有肩扁状石斧の半欠品で、硬砂岩製である。

時期は出土遺物から弥生時代後期である。　（佐々木　嘉和）

4）溝状址

① 溝状址1（挿図35）

調査区の南端で、溝状址2と接して検出された。長さ4.0m、幅40～45cm、深さ9cmの直線状を呈する。埋土灰白色砂である。

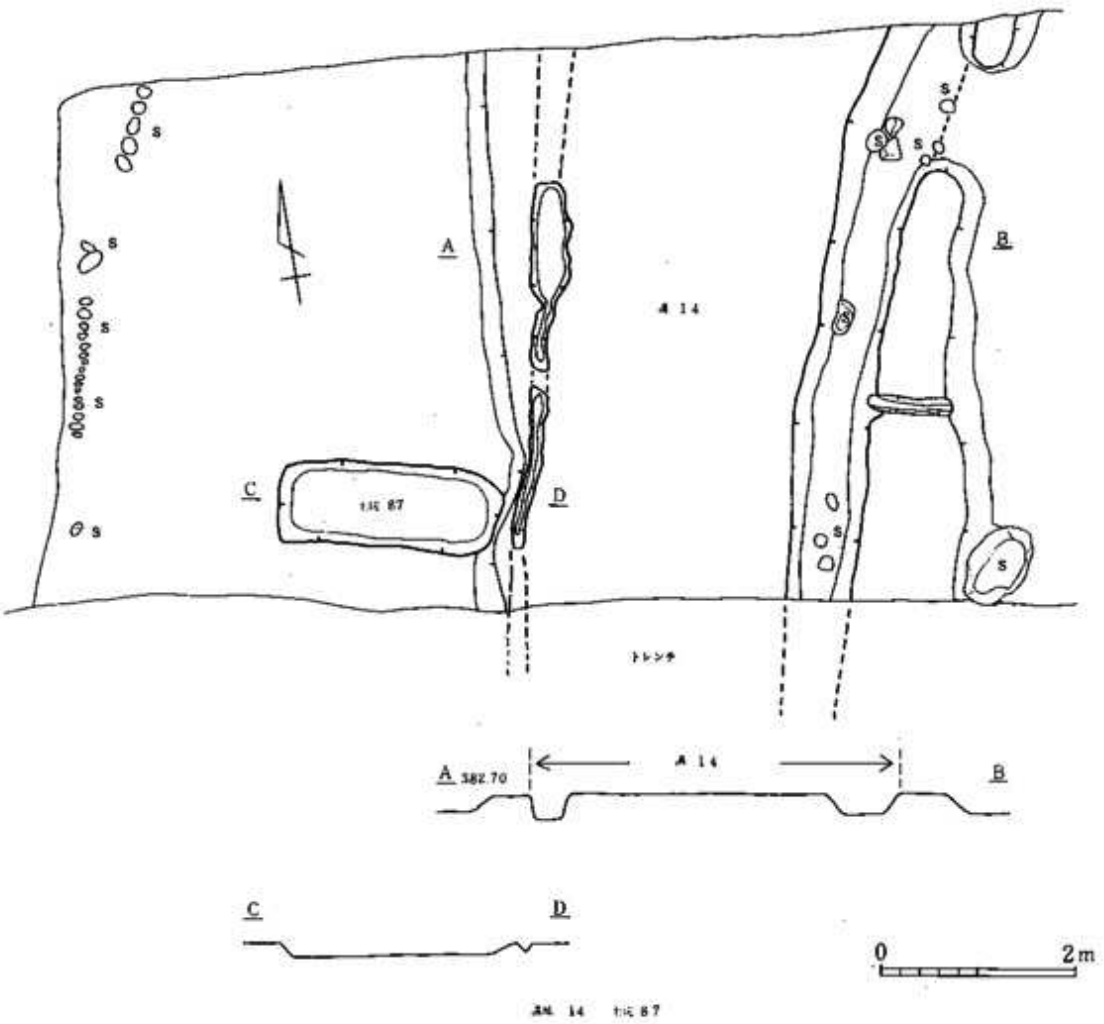
出土遺物は土師器甕細片、須恵器坏、天目碗で、出土量は僅少である。須恵器坏は軟質で回転糸切りされる。

出土遺物から時期は判断できず、時期不明である。　（馬場　保之）

② 溝状址2（挿図35）

溝状址1と隣接して検出された。長さ・幅とも溝状址1よりもわずかに小さいが、方向・埋土等似通う。

出土遺物は須恵器甕1片のみで、本址の所属時期は不明である。　（馬場　保之）



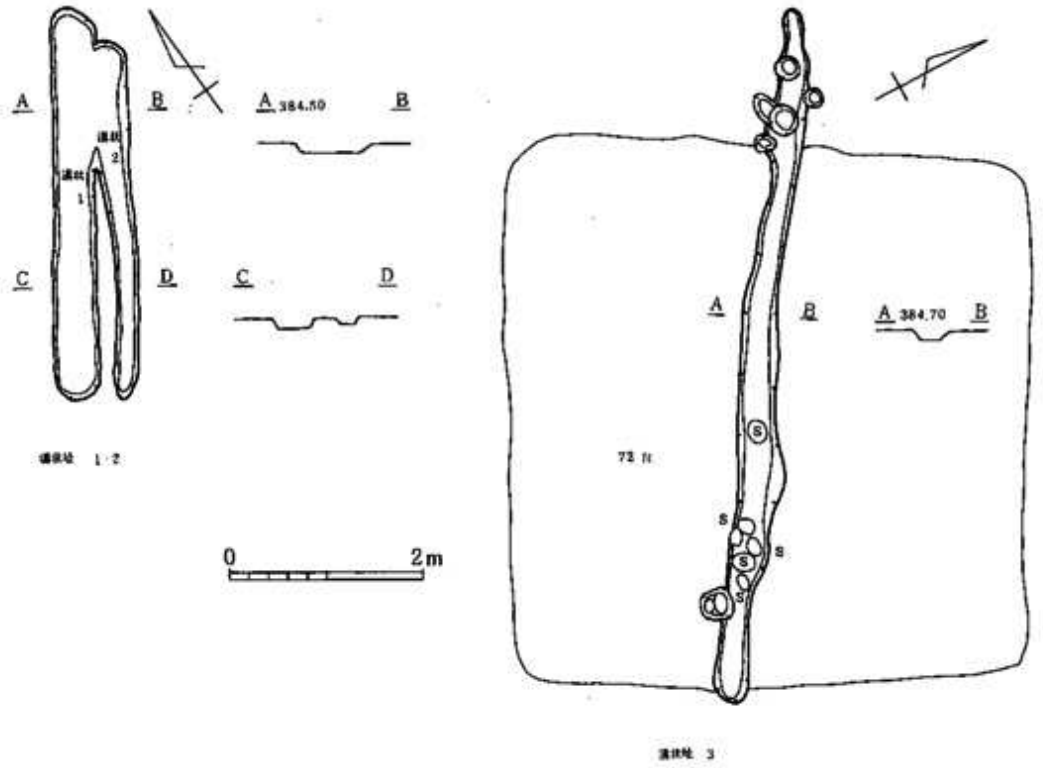

挿図34　溝址14, 土坑87

③ 溝状址３（挿図35）

調査区中央北西寄り、72号住居址を切って検出された。長さ7.1m、幅20～45cm、深さ３～12cmのほぼ直線状を呈する。南東側に径20cm程度の礫が集中する。

出土遺物は土師器甕、須恵器坏があるのみで、出土量は僅少である。土師器甕は外面カキメが施され、須恵器坏は高台付である。

出土遺物等から平安時代に属する溝状址である。　（馬場　保之）




**挿図35　溝状址1・2・3**

④　**溝状址４**（挿図33）

調査区中央東側のFトレンチで、溝址10と重複して検出された。長さ1.4m、幅30～40cm、深さ７cmを測り、直線状を呈する。

出土遺物はなく時期不明である。　（馬場　保之）

⑤　**溝状址５**（挿図30）

調査区南西側、溝址４と重複して検出された。溝址４の北側までは延びていないことから、溝址３・４を結ぶ機能を果たしたとも考えられる。

出土遺物はなく、時期不明である。　（馬場　保之）

## 5）竪穴

### ① 竪穴1（挿図36第19図）

調査区の南西端、46号住居址を切り、土坑59と重複して検出された。不整形を呈する竪穴で、東西の規模は重複遺構のため不明なものの、南北2.1mを測る。床面は硬く締まる。壁の立ち上がりの状態は床面まで浅いためはっきりしないが、ややゆるやかな立ち上がりを示す。

出土量は僅少であり、土師器甕・坏、須恵器甕・坏、灰釉陶器皿、壷・天目碗等の中世陶器がある。土師器甕は外面にカキメが施される。

詳細時期は不明であるが、重複関係等から中世に属すると思われる。（馬場　保之）

### ② 竪穴2（挿図36）

調査区の南西、45・46号住居址・掘立柱建物址5の東側で検出された。本址北側は試掘トレンチにかかり調査できなかったが、東西2.4mの不整形を呈する竪穴である。だらだらと掘り凹んでおり、中央部が低い。

出土遺物は土師器甕・坏、須恵器甕・坏、灰釉陶器、陶器碗等であり、出土量は僅少である。土師器甕は外面カキメが施される。須恵器坏は軟質で糸切り底である。

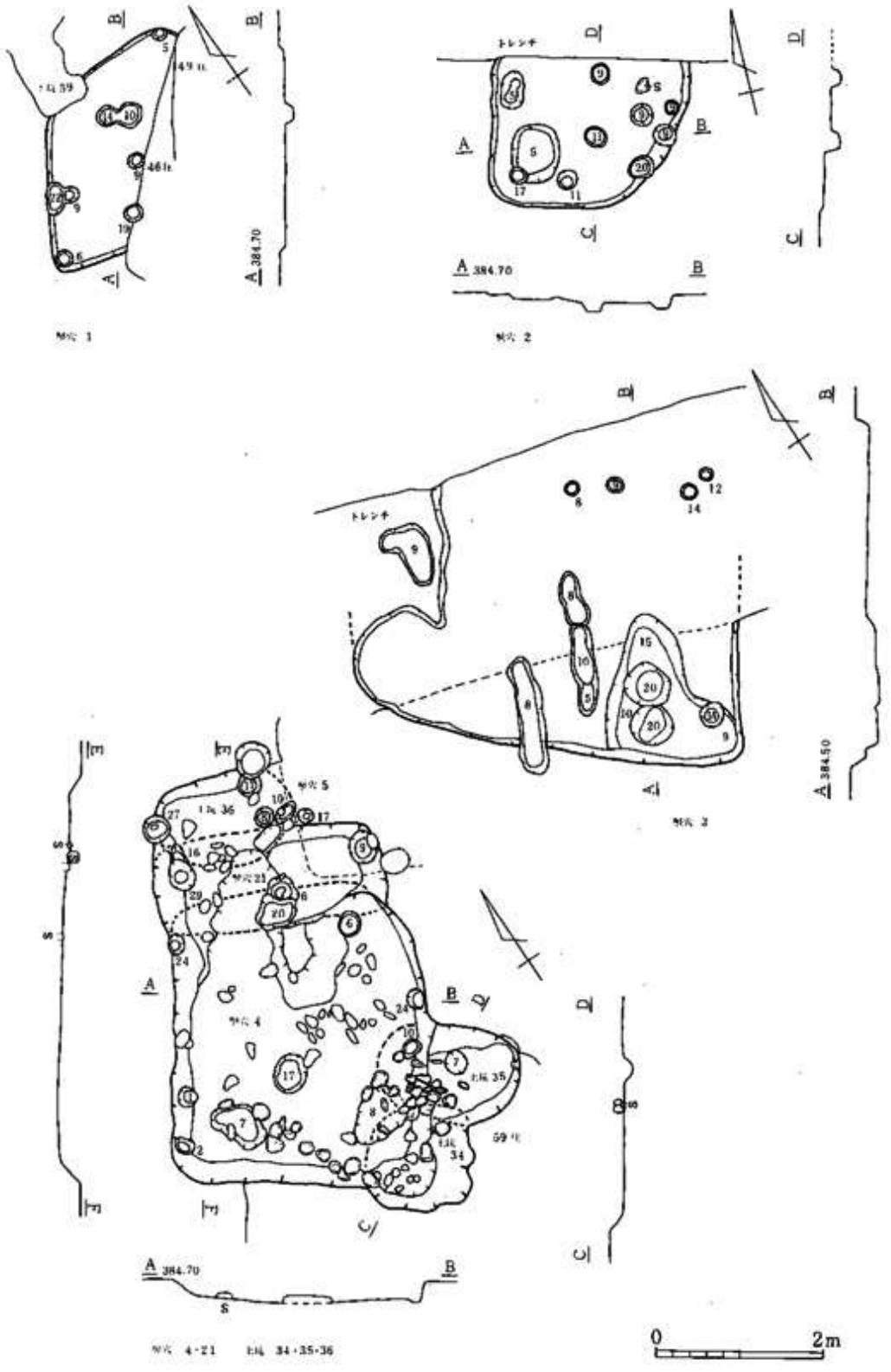
出土遺物等から平安時代の竪穴と思われる。（馬場　保之）

### ③ 竪穴3（挿図36）

調査区南側、試掘トレンチDにかかって検出した。東側半分は試掘トレンチのため削平され規模は不明であるが、壁が残存している部分と東側にある20cm前後の柱穴とみられる4個の穴までを範囲とすれば、4.8×4.0cmの不整方形となる。底部には地山の礫が露出しており、深さは16cm程度であるが、かなり凸凹している。また、南角には深さ15cm1.8×1.2mの不整三角形の落ち込みがあり、この落ち込みの中には3個の穴がある。ごく浅い2本の溝状の落ち込みは、上記の不整三角形の落ち込みの北側にあり、中央から南西に向かって延びる幅24cm長さ1.6mのものと、その西側で幅28cm長さ1.4mのものがあり、位置的には平行に延びている。壁は西から南にかけてのみが残っており、比較的急角度の立ち上がりをしている。北から東側にかけては,前述したように試掘トレンチにより削られたため、壁はわからない。

黒色砂質土の覆土からの遺物の出土がなかったため、時期・性格とも不明である。

また、この竪穴の北西には、80×40cmの不定形の落ち込みがある。（吉川　豊）




**挿図36　竪穴1・2・3・4・21, 土坑34・35・36**

④ 竪穴4（挿図36第19図）

調査区のほぼ中央、59号住居址を切り、竪穴21に切られる。また土坑34・35と重複する。南西・北東方向の規模は竪穴21に切られるため不明であるが、南東・北西方向は3.1mを測る。不整隅丸方形を呈する。床面は砂礫層に達しており、その上位に黄土混黒色土の貼床があるが、硬くはない。壁はだらだらと落ちる。北東壁ほぼ中央に幅0.9m、長さ推定1.4mの高まりがあるが、焼土・炭等は検出されず、カマドとは考え難い。本址の南半は径10～25cm程度の円礫が集中する。

出土遺物は土師器壷・坏・高坏・鉢、須恵器甕・蓋・坏、灰釉陶器皿・瓶・摺鉢・天目碗・鉢・皿等陶器があり、出土量は僅少である。

出土遺物・重複関係等から中世の竪穴と思われるが、詳細は不明である。　（馬場　保之）

⑤ 竪穴5（挿図37第19図）

調査区のほぼ中央、竪穴6・21、土坑36.68と重複する。東西2.4m×南北2.2mの不整方形を呈する竪穴である。床面は平坦で、壁はだらだらと立ち上がる。

出土遺物は土師器甕・坏・須恵器壷・甕、灰釉陶器碗、摺鉢・碗・皿等の陶器があり、出土量は僅少である。

他時期の混入遺物が多いが、中世に属すると思われる。　（馬場　保之）

⑥ 竪穴6（挿図37第19図）

調査区のほぼ中央、竪穴5、土坑30・33、溝址6と重複する。東西2.5m、南北1.4mの不整長方形を呈する。底面は地山の砂礫層に達し、やや凹凸がある。壁はややゆるやかな立ち上がりを示す。

出土遺物は弥生土器甕、土師器甕・坏、須恵器甕・坏、灰釉陶器碗、摺鉢・碗等の中世陶器があり、出土量は僅少である。

詳細時期は不明であるが、中世に位置づくものと思われる。　（馬場　保之）

⑦ 竪穴7（挿図23第19図）

調査区西側やや中央寄りに、56号住居址を切って検出された。2.4×2.0mの不整楕円形を呈すると思われるが、56号住居址と同時に調査したため、詳細は不明である。

出土遺物は天目碗・甕等の陶器、青磁の他、土師器甕、須恵器壷・甕・坏・提瓶、灰釉陶器碗があり、出土量は僅少である。

中世に位置づくと思われる。　（馬場　保之）

⑧ 竪穴8（挿図37第19図）

調査区中央やや北西寄り、溝址7と重複して検出された。不整形を呈する竪穴で、2.5×1.5mの大きさである。底面はほぼ平坦であるが、壁際はだらだらと掘り凹む。内部に径10～30cmの礫が多量に入っており、底面より浮いた状態でほぼ同一レベルに並ぶ。

出土遺物は土師器甕・坏、須恵器蓋・坏、灰釉陶器皿であり、出土量は僅少である。

本址の時期は不明である。（馬場　保之）

⑨ 竪穴9（挿図37第19図）

調査区の北西側、調査区境界に近接し溝址7と重複して検出された。2.1m×1.8mの不整形を呈する竪穴で、北西側の底面は一段低く掘り凹む。壁はゆるやかな立ち上がりを示し、南西側は縁部がさらにゆるやかになる。

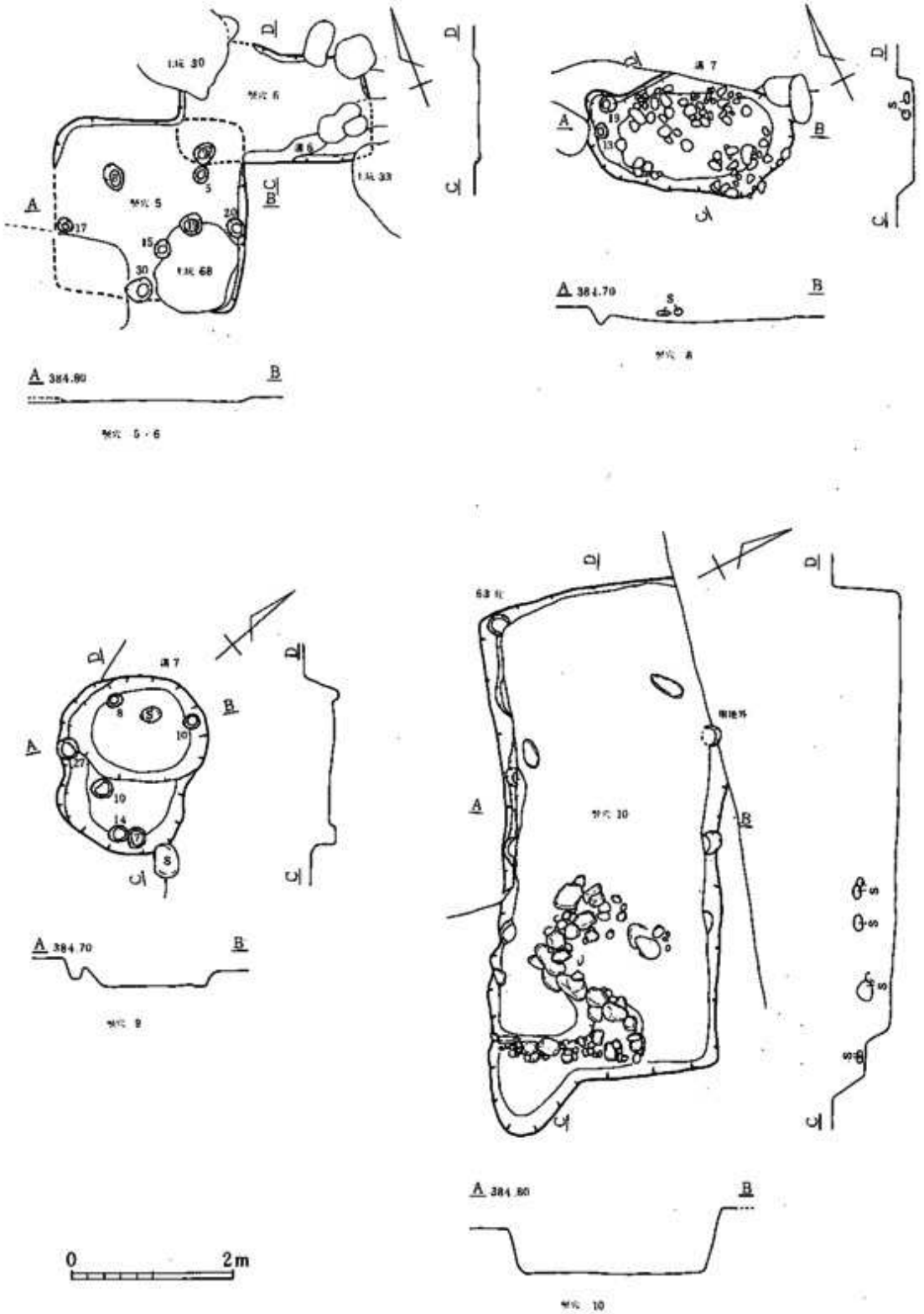
出土遺物は土師器甕・坏、須恵器蓋・坏、砂岩製砥石であり、出土量は僅少である。

時期は不明である。（馬場　保之）

⑩ 竪穴10（挿図37第19・20・31図）

調査区北隅のⅢ16cd中心に検出した、長方形の竪穴遺構である。調査区外に少しかかり、63号住居址を切っている。規模は6×2.8mで、東南隅が楕円形に突出する。深さは80cm余あり、覆土は自然堆積であり中央にレンズ状に灰色砂質土が入り、壁ぎわには黒色砂質土が入っていた。南東壁ぎわと覆土中に自然転石を並べた状態で検出した。壁ぎわの石は竪穴に付くものと推測したが、覆土中の石は確認できなかった。南隅の突出部は入り口施設である。長軸方向はN66°Wを測り、壁はほぼ垂直であり、柱痕と推測される縦の凹状部分を8ヶ所検出した。最近調査例の増加した、方形竪穴の一形態で柱穴は床面まで、掘り込まれていないが、周囲に柱を建て並べ上屋を架けていたものであろう。

遺物の出土量は比較的多く、土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗・カワラケ・陶器・鉄器等出土している。土師器甕19図16・17は平安時代に比定される。須恵器は甕19図21～23、坏24で甕は胴部の小片である。鉢20図2は須恵質で、外面下部は篦削り調整され付高台である。内面見込みやや上に重ね焼痕が残り、そこより上部に自然釉がかかる。須恵質の大平鉢で中世初頭の産であろう。灰釉陶器20図3は、内面見込み以上に、薄い釉が施されており碗である。4は皿の底部で見込みは露胎である。山茶碗20図1は碗で、わずか現存する高台は小さく雑な貼り付けで、籾殻圧痕が残る。19図20は、いわゆるカワラケで、手づくねであり外面に指頭痕が残り、内面は刷毛か篦で雑に調整されている。19図19は陶器の小坏で、内外面に灰釉が施されて黄褐色を呈し、整形・焼成等良好な黄瀬戸である。鉄器は31図4～10で、4～6は錆で一塊になって出土したが、




挿図37　竪穴5・6・7・8・9・10

器種は不明である。7は刀子の茎、8～10は釘の破片であろう。図化掲載はしていないが、中国産の青磁輪花碗片・白磁碗片も出土している。

時期は出土遺物から、中世である。　（佐々木　嘉和）

⑪　竪穴11（挿図38第20図）

調査区の北端、一部調査区外にかかり、土坑55に切られて検出された。全体形は不明であり、東西方向は5.6mを測る。底面はほぼ平坦であるが、やや軟質である。壁の立ち上がりは急であり、南壁西側壁下には周溝状の浅い掘り込みがある。

出土遺物は土師器甕・坏・高坏、須恵器短頸壷・甕・坏、灰釉陶器碗、陶器碗等あり、出土量は僅少である。平安時代の遺物が多い。

出土遺物等から平安時代後期の竪穴と思われる。　（馬場　保之）

⑫　竪穴12（挿図38）

調査区南端、46・49号住居址の東側で土坑57・58に切られて検出された。上部は水田耕作のため遺存せず、浅い掘り込みを確認したのみである。南東・北西方向1.5mの方形を呈する竪穴で、底面は平坦で軟らかい。

出土遺物はなく、時期不明である。　（馬場　保之）

⑬　竪穴13（挿図38）

調査範囲の中央から、やや南に55号住居址と共に検出された。55号住居址と水田の造成時の切土によりほとんどの部分が壊されている。北側隅部分のみの確認で、平面形は方形と考えられるが、全体の規模は不明である。確認した壁は55号住居址北東壁とほぼ同方向で、調査できた長さは1.2mである。壁高は15cmでほぼ垂直に立ち上がっている。

遺物は、何も出土しなかった。

時期、性格は、調査できた部分もきわめて少ないことも有り、不明である。　（佐合　英治）

⑭　竪穴14（挿図38）

調査区中央やや西寄り、56・57号住居址、竪穴15、溝状址3と重複して検出された。方形を呈すると思われるが、西壁の一部を確認したのみで,規模等詳細は不明である。底面はほぼ平坦で硬い。　（馬場　保之）

出土遺物はなく、時期不明である。　（馬場　保之）

⑮　竪穴15（挿図38）

調査区中央やや西寄り、竪穴14・16、溝状址３、土坑47と重複して検出された。南東・北東・北西壁の一部を確認したにとどまり、全体形・規模等詳細は不明である。

出土遺物はなく、時期不明である。　（馬場　保之）

⑯　竪穴16・17（挿図38第20図）

調査区中央、竪穴15・溝址７と重複して検出された。竪穴16は、南西隅で壁がほぼ直交するものの、北西隅は不整形である。規模は（3.1）×2.5mで、不整隅丸方形を呈すると思われる。竪穴17は南西・北西壁の一部を確認したのみで規模等詳細は不明である。両者とも掘り込は地山の砂礫層に達する。

出土遺物は外面カキメの施される土師器甕片が出土しており、平安時代に比定される。

（馬場　保之）

⑰　竪穴18（挿図39）

調査区中央やや東側、溝址６、土坑33・69に重複して検出された。南東側を水田造成に伴う削平のため欠く。底面は地山の砂礫層に達する。規模等詳細は不明である。

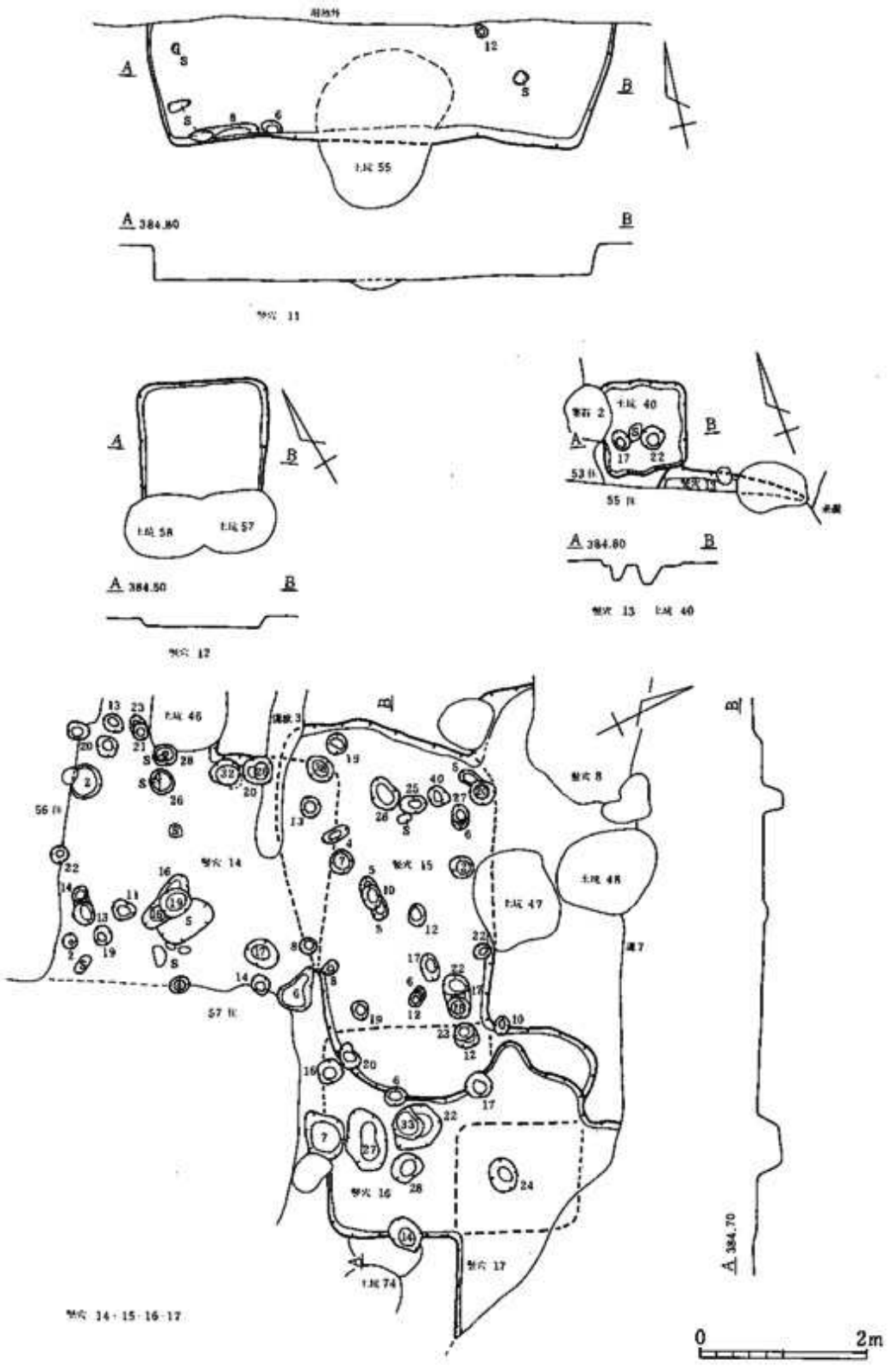
出土遺物はなく、時期不明である。　（馬場　保之）

⑱　竪穴19（挿図39）

調査部分の北東隅に確認した。遺構検出作業中に遺物が集中して出土する部分が認められ、精査した。本址の西壁と考えられる立ち上がりを、長さ1.9m確認した。北側は調査区外に延びている。高さは良好残存部で５cm程である。立ち上がりは緩やかなものであるが、本来の形態を止々めるものであるかは不明である。当初遺物の出土状態から、竪穴住居址と考えたが、床面も、本址に伴う穴などの施設も把握できなかったため、竪穴とした。

遺物には、土師器甕などがあるが、図化等できるものはない。

出土した遺物は、古墳時代に位置づくものであるが、時期を確実に把握できるものとはいえず、詳細時期は不明である。　（佐合　英治）

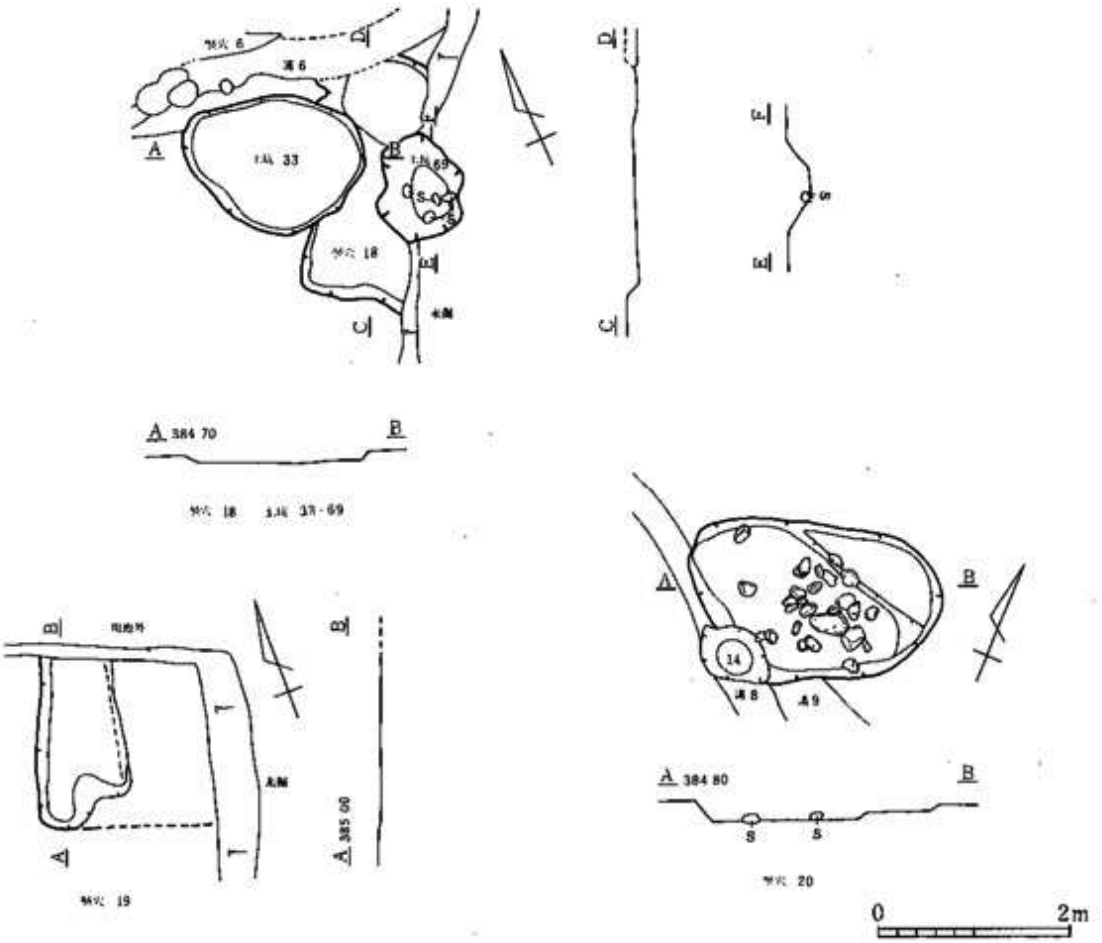



**挿図38　竪穴11・12・13・14・15・16・17, 土坑40**

⑲ 竪穴20（挿図39）

61号住居址南角の覆土上で検出した。掘上りでは、61号住居址、溝8及び溝9を切っている。2.6×1.7mの楕円形であり、底部は東西方向に2段にわかれており、深さは深い西側で22cm、浅い東側で12cmであった。このいずれの底部も平坦である。また、南端には直径約60cm深さ14cmの穴がある。壁は、西から南にかけては溝によりその上部が多少削られているものの、比較的急角度に立ち上がっている。それに対し、北側は比較的緩やかな壁がわずか残っているのみである。

覆土には40〜10cm程度の礫が混入していた。これらの礫は竪穴の中央付近に集中していた。しかし、覆土中からの遺物の出土はなく、時期・性格は不明である。　　（吉川　豊）




挿図39　竪穴18・19・20，土坑33・69

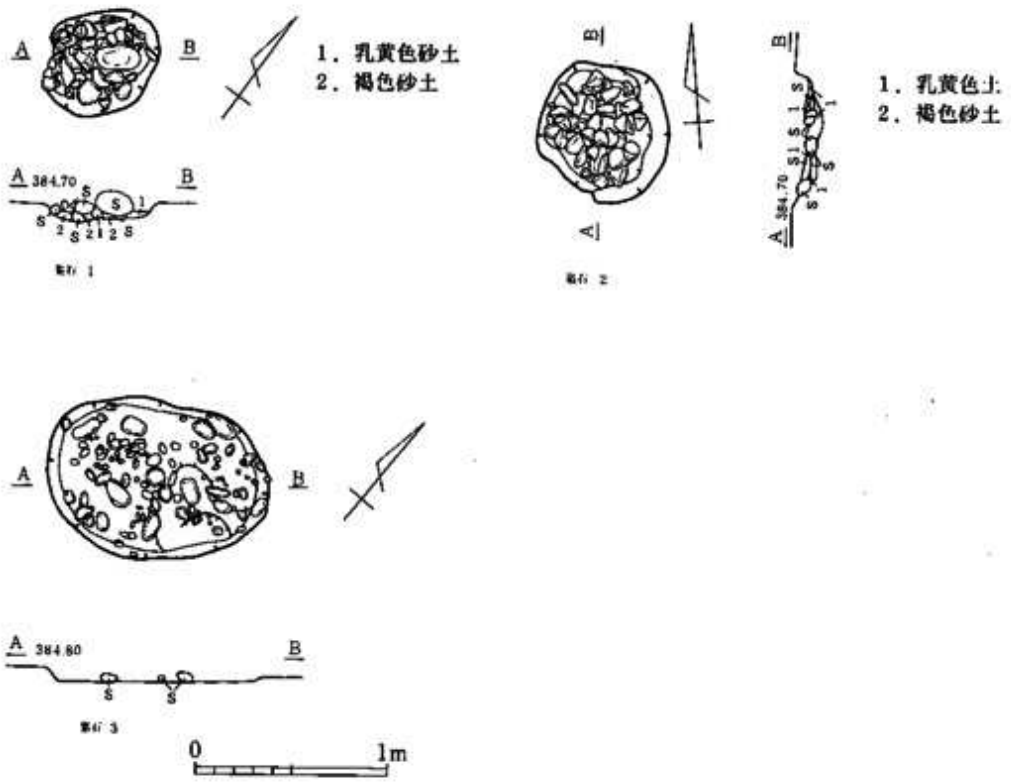
⑳ 竪穴21（挿図36）

調査区のほぼ中央で、竪穴４を切り、竪穴５・土坑36と重複して検出した。2.8m×1 1mの隅丸長方形を呈する、遺存する東・西壁はだらだらと掘り凹む。底面は硬いものの、平坦ではない。出土遺物はなく、時期不明である。（馬場　保之）

## 6）　集石

### ①　集石１（挿図40）

調査区中央やや南西側、53～55号住居址を切って検出された。径10～50cm程度の礫がびっしりと坑内につまった状態で検出された。焼土・炭等はなく、礫にも火を受けた痕跡は認められない。出土遺物は須恵器坏１片のみであり、時期・性格等不明である。（馬場　保之）




挿図40　集石1・2・3

② 集石2（挿図40第20図）

集石1の東側、53号住居址・土坑40を切って検出された。規模は1.3×1.4mで集石1とほぼ同規模である。径20～30cmの礫が主である。

出土遺物は土師器甕、弥生土器壷がある。

集石1と同様、時期不明である。（馬場　保之）

③ 集石3（挿図40）

調査区中央やや南側、55号住居址の北側で検出された。2.3×1.6mの坑内に径10～30cm程度の礫が散在している。焼土・炭等はない。

出土遺物はなく、時期・性格等不明である。（馬場　保之）

## 7）土坑

① 土坑27（挿図41）

調査区の南西、47号住居址と重複して検出された。80×120cmの不整楕円形を呈し、深さ22cmを測る。北西側の壁はゆるやかな立ち上がりを示す。

出土遺物は土師器甕・坏、須恵器甕、青磁碗の4片である。土師器甕は外面カキメが施される。

時期不明である。（馬場　保之）

② 土坑28（挿図41）

52号住居址の覆土上で検出した。1.3×0.9mの楕円形の土坑である。底部は平坦であるが、南東から北西に向かってやや傾斜しており、最深部は北西壁直下であるが深さが10cmとごく浅く、52号住居址の床面までは達していない。南角と南西の壁直下には比較的深い穴がある。壁は南側では残りが悪いが他の部分では比較的急角度に立ち上がっている。

覆土中からはタタキ目の残る須恵器甕の破片、カキメのある長胴甕の破片及び土師器甕の破片が出土している。平安時代の遺構であるが、性格については不明である。（吉川　豊）

③ 土坑29（挿図41）

54号住居址の北壁のほぼ中央で検出した1.2×0.9mの楕円形の土坑である。底部は中央にやや窪み深さは20cmを測る。壁は比較的緩やかに立ち上がっている。

覆土中には20～10cmの礫が数個含まれていた。遺物としては、須恵器坏の破片の他はごく小破片であり、その量も少いため、時期・性格は不明である。　（吉川　豊）

④　土坑30（挿図41）

調査区西側やや中央寄りに、57号住居址と重複して検出された。径約110cmの不整円形を呈し、深さ12cmを測る。底面は平坦であり、坑内に径10～20cmの礫が入る

出土遺物は弥生土器甕底部、土師器甕・高台坏計6片であり、時期不明である。（馬場　保之）

⑤　土坑31（挿図41）

調査区ほぼ中央、竪穴4、土坑32・35・65～68に近接して検出された。100×140cmの不整楕円形を呈し、深さ18cmを測る。全体的にゆるやかに掘り込まれており、東半に礫が集中する。

出土遺物は須恵器甕、青磁碗の2片のみであり、時期は不明である。　（馬場　保之）

⑥　土坑32（挿図41）

調査区ほぼ中央、土坑66と重複して検出された。110×120cmの不整円形を呈し、深さ28cmを測る。ややゆるやかな掘り込みであり、坑内に入っている礫の大半は底面より浮いた状態で検出された。規模等土坑31に類似する。

出土遺物は土師器甕、須恵器蓋・坏、天目碗の7片であり、規模時期は不明である。

（馬場　保之）

⑦　土坑33（挿図39）

調査区やや東側、竪穴6・18と重複して検出された。140×190cmの不整形の土坑で、深さ13cmを測る。壁の立ち上がりは全体的にゆるやかで、底部は中央付近が低い。

出土遺物はなく、時期不明である。　（馬場　保之）

⑧　土坑34（挿図36第20図）

調査区のほぼ中央、59号住居址・竪穴4・土坑35と重複して検出された。120×130cmの不整形を呈し、深さ14cmを測る。だらだらとした掘り込みで、竪穴4の底部レベルとほぼ揃う。

出土遺物は刷毛目調整の施された土師器甕、硬砂岩製の敲打器等僅少であり、時期不明である。

（馬場　保之）

⑨ 土坑35（挿図36第20図）

調査区ほぼ中央、59号住居址・竪穴4・土坑34と重複して検出された。(110)×(170)cmの不整楕円形を呈する土坑で、壁はゆるやかな立ち上がりを示す。

出土遺物は土師器甕、須恵器蓋・坏、灰釉陶器碗、白磁碗、擂鉢、甕等の陶器があり、出土量は僅少である。

出土遺物から平安時代ないし中世の土坑と考えられるが、詳細時期は不明である。

（馬場　保之）

⑩ 土坑36（挿図36）

調査区ほぼ中央、竪穴5・21と重複して検出された。壁はゆるやかな立ち上がりを成し、底部は平坦である。

出土遺物は須恵器甕・坏・瓶、灰釉陶器皿、白磁碗、天目碗・擂鉢の平安時代後期～中世のもので僅少である。遺物の大半は重複遺構からの混入と考えられる。

本址の所属時期は不明である。（馬場　保之）

⑪ 土坑37（挿図41）

調査区中央西端、51号住居址、土坑70～72に囲まれて検出された。120×170cmの不整形を呈する土坑で、内部はさらに一段凹む。北壁側はだらだらと立ち上がる。

出土遺物はいずれも小片の土師器甕・須恵器・陶器9片であり、時期不明である。

（馬場　保之）

⑫ 土坑38（挿図41）

調査区ほぼ中央、57号住居址を切り、土坑39・73と重複して検出された。径約160cmの不整円形を呈し、深さ約12cmを測る。底面はほぼ平坦である。

出土遺物は陶器製燈明皿1片のみであり、時期不明である。（馬場　保之）

⑬ 土坑39（挿図41）

調査区ほぼ中央、57号住居址を切り土坑38と重複して検出された。径約140cmの不整円形を呈する土坑で、深さ4cmと検出面から底面までは浅い。

出土遺物はなく、時期不明である。（馬場　保之）

⑭ 土坑40（挿図38第31図）

53号55号住居址の北東に近接して確認した。集石２に西側の一部が切られている。平面形はほぼ正方形で、規模は１×1.1mを測り、南北方向にやや長い。確認できた壁高は２～７cmである。壁面は良好残存部では、ほぼ垂直に立ち上がっている。底部は平坦で、小穴が確認されたが本址に付属する穴であるかの把握はできなかった。

遺物には、須恵器細片と、鉄器として刀子（第31図14）がある。

時期は、古墳時代以降と把握できるだけである。（佐合　英治）

⑮ 土坑41（挿図41）

調査区中央北西寄り、72号住居址を切り、土坑45と重複して検出された。110×180cmの不整長方形を呈する土坑で、深さ10cmを測る。坑内の隅５カ所に柱穴が掘り込まれており、その配置から本址に伴なうものと考えられる。

出土遺物は土師器甕、碗・擂鉢・鉢等の陶器片、計８片であり、本址の時期は中世と思われる。（馬場　保之）

⑯ 土坑42（挿図41）

調査区中央北西寄り、72号住居址を切り、土坑43と重複して検出された。110×110cmの不整形を呈する土坑で、深さ34cmを測る。壁の立ち上がりの状態はややゆるやかであり、底面は平坦である。

出土遺物は土師器甕・高坏の６片であり、甕は内外刷毛目調整が施される。

古墳時代前期に属すると思われる。（馬場　保之）

⑰ 土坑43（挿図41）

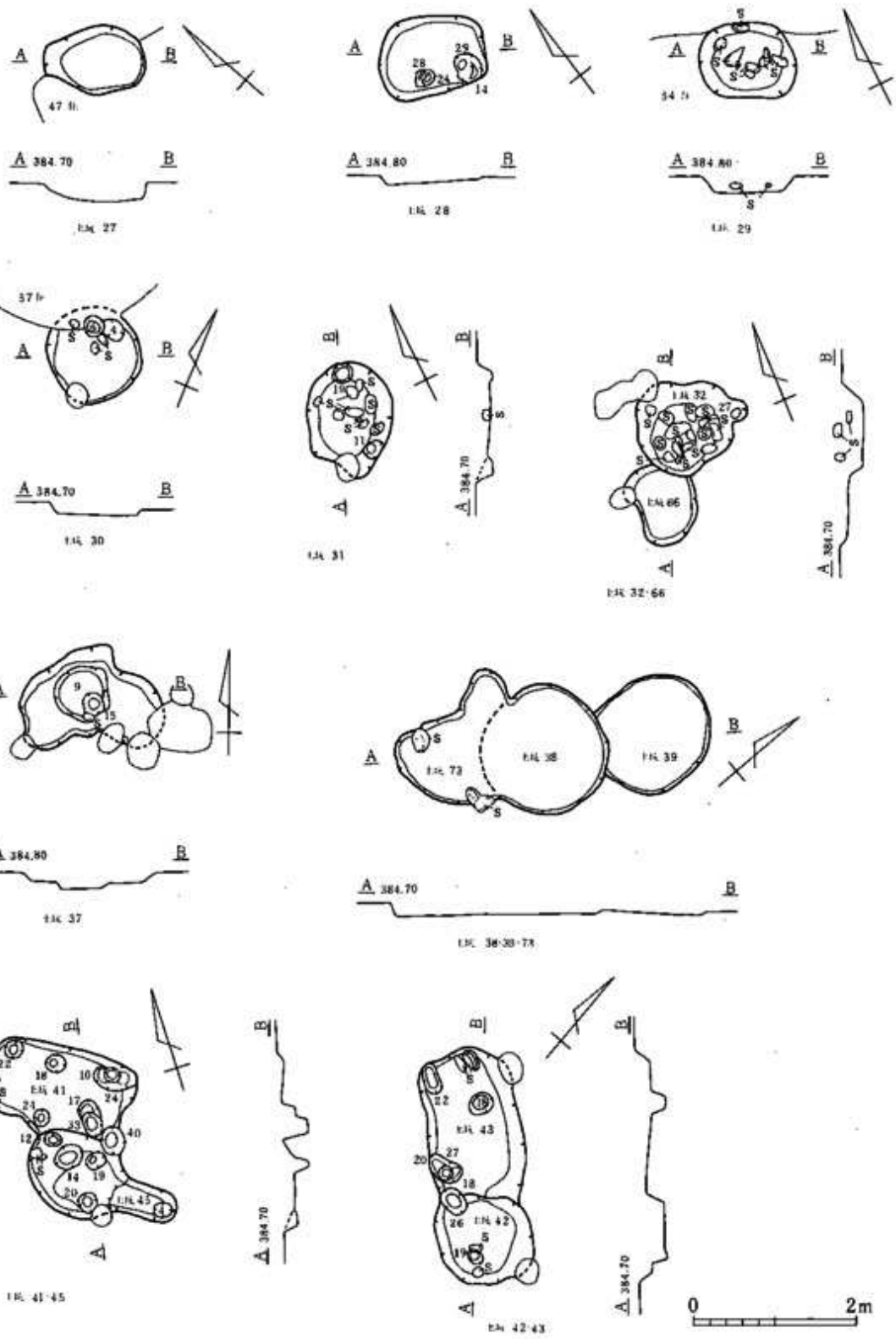
調査区中央北西寄り、72号住居址を切り、土坑42と重複して検出された。120×(200)cmの不整長方形を呈し、深さ19cmを測る。北壁側はゆるやかに立ち上がる。

出土遺物はなく、時期不明である。（馬場　保之）

⑱ 土坑44（挿図42）

調査区中央北西寄り、72号住居址を切り、土坑46と重複して検出された。重複遺構のため規模は不明である。不整形を呈する。

出土遺物は土師器甕・陶器の計７片であり、時期不明である。（馬場　保之）




**挿図41　土坑27・28・29・30・31・32・66・37・38・39・73・41・45・42・43**

⑲　土坑45（挿図41）

調査区中央北西寄り、72号住居址を切り、土坑41と重複して検出された。100×190cmの柄鏡形を呈する土坑であるが、南東側は一段高くなっており、複数遺構の重複も考えられる。

出土遺物は土師器甕、青磁碗、陶器鉢の計10片であるが、本址の時期を特定することは困難である。

（馬場　保之）

⑳　土坑46（挿図42第21図）

調査区中央北西寄り、72号住居址を切り、土坑44と重複して検出された。90×190cmの不整楕円形を呈し、深さ18cmを測る。だらだらと掘り凹められており、底面はほぼ平坦である。

出土遺物は土師器壷・甕、須恵器甕等僅少であり、時期不明である。　（馬場　保之）

㉑　土坑47（挿図42）

調査区中央北西寄り、竪穴15、土坑48と重複して検出された。110×120cmの不整形を呈する土坑で、深さ10cmと南側がやや低い。

出土遺物は土師器甕、須恵器坏、青磁碗計５片であり、古墳時代～中世の遺物が混在し時期不明である。

（馬場　保之）

㉒　土坑48（挿図42）

調査区中央北西寄り、溝址７・土坑47と重複して検出された。100×120cmの不整形を呈し、深さ16cmを測る。壁はゆるやかな立ち上がりを示し、底面は北東側にやや低くなる。

出土遺物はなく、時期不明である。　（馬場　保之）

㉓　土坑49（挿図42）

調査区中央やや北東寄り、60号住居址、溝址７・９に隣接して検出された。120×140cmの不整形を呈し、深さ22cmを測る。底面は南側に低く、地山の砂礫層に達する。

出土遺物は土師器甕・坏、灰釉陶器皿、陶器壷・甕等僅少であり、本址の時期は不明である。

（馬場　保之）

㉔　土坑50（挿図42）

調査区中央やや北寄り、溝址9と重複して検出された。110×140cmの不整形を呈する土坑で深さ32cmを測る。底面は北西へ低くなり、壁はゆるやかに立ち上がる。

出土遺物は長胴形を呈し内外ハケナデの施される土師器甕1片のみで、本址の所属時期は不明である。

（馬場　保之）

㉕　土坑51（挿図42）

調査区中央東側Fトレンチで、溝址10と重複して検出された。北西側はトレンチ外にかかり、確認されていないが、調査された部分の規模は180cmを測る。平面形は不明である。

出土遺物は土師器甕、須恵器短頸壷、灰釉陶器皿、陶器碗の4片であり、所属時期は不明である。

（馬場　保之）

㉖　土坑52（挿図42）

調査区中央東側Fトレンチで、溝址10と重複して検出された。70×(90)cm不整楕円形を呈する土坑で、深さ8cmを測る。壁はゆるやかに立ち上がる。

出土遺物は土師器甕2片のみであり、時期不明である。（馬場　保之）

㉗　土坑53（挿図42第22図）

調査区の北西側、61・62・64号住居址の中間に検出された。140×140cmの不整形を呈する土坑で、深さ32cmを測る。底面は北東側がやや低くなる。

出土遺物は土師器甕・坏、須恵器坏、灰釉陶器碗等があり、出土量は僅少である。

時期は出土遺物から平安時代と思われる。（馬場　保之）

㉘　土坑54（挿図42）

調査区の北西側、62号住居址と溝址7の間で検出された。西端は土層観察用トレンチにかかるが、規模のわかるところでは160cmを測る、全体的にだらだらと掘り回められており、底部が二段構造になることから北側は別の柱穴の可能性がある。

出土遺物は土師器甕7片であり、なかに外面カキメの施されるものがある。

時期は不明である。（馬場　保之）

㉙　土坑55（挿図42）

調査区中の北端、竪穴11を切って検出された。不整形を呈する土坑で、坑内に多数の礫が入る。底部は二段構造になっており、最深部で53cmを測る。

出土遺物はなく、時期不明である。　（馬場　保之）

㉚　土坑56（挿図42）

69号住居址の北角を切って検出したが、住居址を先行して調査したため、土坑の南側は確認できなかった。規模は1.9×1.6mの楕円形と推定される。底部の北半分に深さ8cmで1.0×1.4mの楕円形の落ち込みをもつ。南半分の底部はその落ち込みに向かってやや傾斜している。深さは10cmとごく浅い。壁は落ち込みのある北側をのぞけば緩やかである。

覆土からは灰釉陶器片及び土師器片が出土している。出土遺物からみれば平安時代の遺構である。

（吉川　豊）

㉛　土坑57（挿図42）

調査区南端で、竪穴12を切り、土坑58と重複して検出された。70×100cmの不整楕円形を呈し、深さ12cmを測る。底部は土坑58よりやや低く、平坦である。

出土遺物は土師器甕、灰釉陶器皿の計4片であり、詳細時期は不明である。　（馬場　保之）

㉜　土坑58（挿図42）

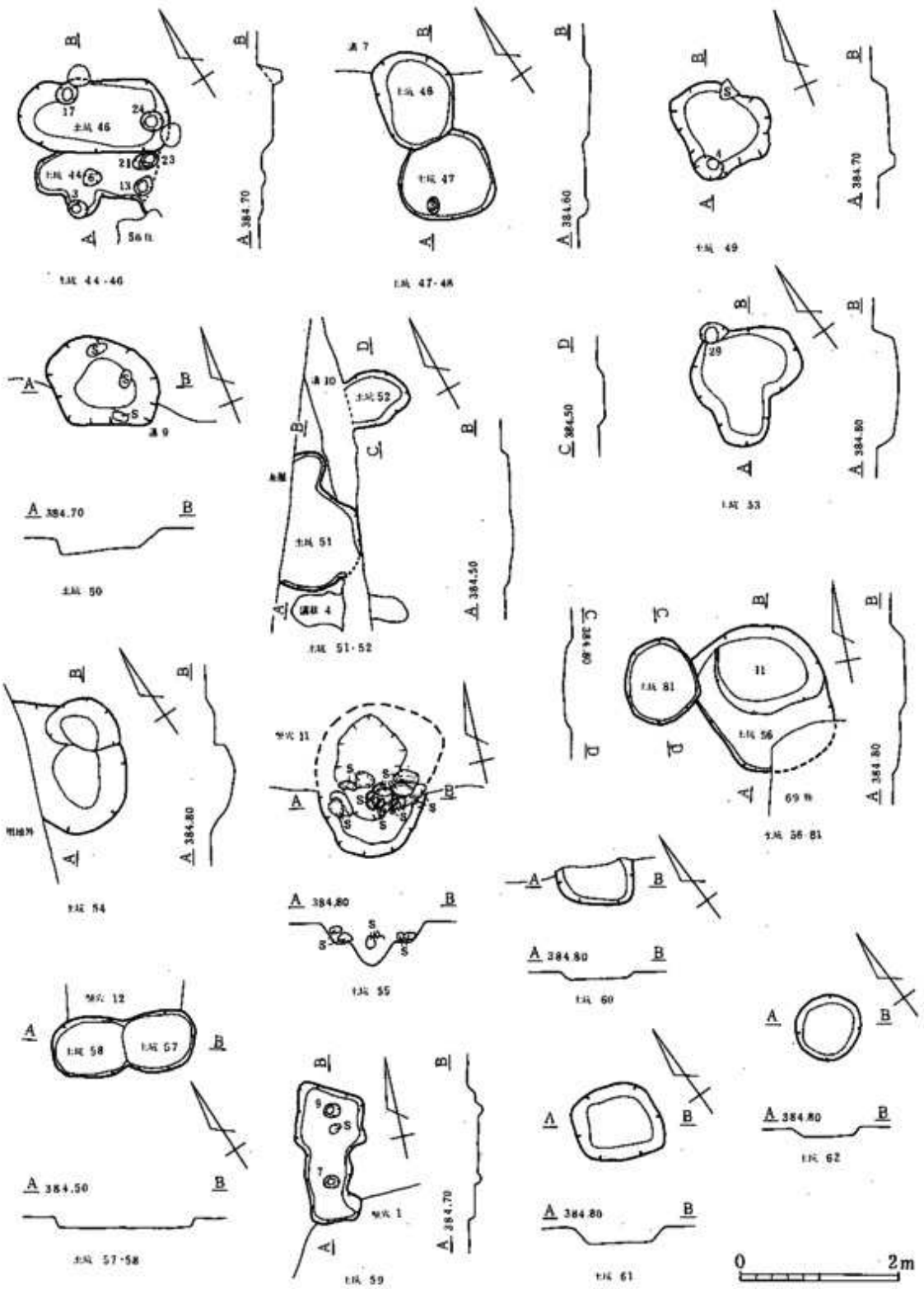
調査区南端で、竪穴12を切り、土坑57と重複して検出された。土坑57とほぼ同規模であり、形状・埋土等共通する。

出土遺物は土師器甕1片のみであり、時期不明である。　（馬場　保之）

㉝　土坑59（挿図42）

調査区の南西端、竪穴1と重複して検出された。80×180cmの不整形を呈する土坑で、埋土・底面の状態等で複数遺構の重複する状況は読み取れない。

出土遺物はなく、時期は不明である。　（馬場　保之）




**挿図42　土坑44・46・47・48・49・50・51・52・53・54・55・56・81・57・58・57・58・59・60・61・62**

㉔ 土坑60（挿図42）

48号住居址の東側で検出した土坑である。溝址４に北半分を切られているため、調査した部分は1.0×0.5ｍの半楕円形である。底部は平坦で深さは10cmとごく浅い。

覆土からの遺物の出土はなく、時期・性格ともに不明である。（吉川　豊）

㉕ 土坑61（挿図42）

溝址４の南側で48号住居址の東で検出した、1.5×1.0ｍの不整方形の土坑である。深さは18cmで底部は平坦である。壁は比較的緩やかである。

覆土からの遺物の出土はなく、時期・性格ともに不明である。（吉川　豊）

㉖ 土坑62（挿図42）

48号住居址の東、溝址４の北側で検出した直径0.8ｍの土坑である。深さは12cmと比較的浅く、底は平坦である。壁は北側に比べ南側がいくぶん急角度に立ち上がっている。

覆土からの遺物の出土はなく、時期・性格ともに不明である。（吉川　豊）

㉗ 土坑63（挿図８）

55号と58号住居址が切りあう部分に検出した。水田造成時の切り土部分にかかっており、穴とも切り合うため、平面形は歪んでいる。確認できた規模は径１ｍ、深さ29cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。底部には凹凸があり、複数の穴が切り合っていた可能性がある。

遺物には、土師器甕の破片があるが、図化はできない。

出土した遺物は、古墳時代に位置づくものであるが、住居址と重複する部分の為、本土坑の時期決定の材料にはならず、時期、性格は不明である。（佐合　英治）

㉘ 土坑64（挿図43）

54号住居址内で検出した。東及び西側は住居址に付随するとみられる穴と切り合い、規模は推定で、1.2×0.9ｍの不定形の土坑である。底はほぼ平坦で、深さは５cmと非常に浅い。壁が残っているのは北側のみであり、ごく緩やかである。

覆土からは須恵器片と灰釉陶器片（第21図５）が出土している。遺物から見れば平安時代の遺構と考えられるが、54号住居址に付随するものの可能性もある。（吉川　豊）

㊴ 土坑65（挿図43）

調査区ほぼ中央、土坑31・35・66に近接して検出された。80×100cmの不整形を呈する土坑で、深さ13cmを測る。北側に径20～30cmの礫が集中しており、ほぼ同一レベルに位置する。底面は南側がやや低い。

出土遺物はなく、時期不明である。（馬場　保之）

㊵ 土坑66（挿図41）

調査区ほぼ中央、土坑32と重複して検出された。70×100cmの不整形を呈する土坑で、深さ10cmを測る。北壁側がややゆるやかな立ち上がりを示し、底面は平坦である。

出土遺物は土師器甕1片のみであり、時期不明である。（馬場　保之）

㊶ 土坑67（挿図43）

調査区ほぼ中央、竪穴5・6、土坑31～33・68に近接して検出された。110×150cmの不整形を呈し、底部レベルが一様でなく、複数遺構の重複が考えられる。

出土遺物は土師器甕・坏の4片であり、詳細時期は不明である。（馬場　保之）

㊷ 土坑68（挿図43）

調査区ほぼ中央、竪穴5と重複して検出された。90×110cmの不整方形を呈し、深さ12cmを測る。西壁側はゆるやかに立ち上がる。底面は南側が低くなり、ほぼこれに接した状態で径10～30cmの礫が入る。

出土遺物は外面カキメの施される土師器甕1片のみであり、時期不明である。

（馬場　保之）

㊸ 土坑69（挿図39）

調査区ほぼ中央、竪穴18と重複して検出された。水田造成に伴ない東側は大きく削平される。90×110cmの不整形を呈する。だらだらと掘り回められており、坑内に径15cm程度の礫が入る。

出土遺物はなく、時期不明である。（馬場　保之）

㊹ 土坑70（挿図43第21図）

調査区中央西側、52・56号住居址、竪穴4、土坑37の中間に検出された。90×110cmの不整形

を呈する土坑で、西側が一段低く掘り込まれる。

出土遺物は土師器甕、須恵器坏の4片である。土師器甕は刷毛目調整が施される。

本址の時期は不明である。　（馬場　保之）

㊺ 土坑71（挿図43第21図）

調査区中央西側、56号住居址・竪穴7の南西隣に検出された。90×120cm、深さ20cmを測り、不整形を呈する。底面は北西側がやや低くなる。

出土遺物は灰釉陶器碗、陶器壺の2点のみであり、時期不明である。　（馬場　保之）

㊻ 土坑72（挿図43第21図）

調査区西側中央、56号住居址・土坑45に近接して検出された。120×130cmの不整形を呈し、深さ24cmを測る。底面は南側がやや低い。

出土遺物は須恵器甕の1点であり、時期不明である。　（馬場　保之）

㊼ 土坑73（挿図41）

調査区ほぼ中央、土坑38と重複して検出された。重複のため規模・平面形とも不明である。底面は西側が低くなる。

出土遺物はなく、時期不明である。　（馬場　保之）

㊽ 土坑74（挿図43）

調査区ほぼ中央、57号住居址・竪穴16に近接し、土坑75と重複して検出された。80×100cmの不整楕円形を呈し、深さ18cmを測る。南側壁はゆるやかに立ち上がる、

出土遺物は土師器甕・坏、須恵器甕・坏・長頸瓶、灰釉陶器碗、陶器甕等僅少であり、時期不明である。　（馬場　保之）

㊾ 土坑75（挿図43）

調査区ほぼ中央、溝址7・土坑74と重複して検出された。重複関係のため、規模・平面形等不明である。底面は地山の砂礫層に達し、南側に低くなる。

出土遺物はなく、時期不明である。　（馬場　保之）

⑤⓪ 土坑76（挿図43）

調査区ほぼ中央、竪穴15・16と重複する、90×110cmの不整楕円形を呈し、深さ10cmを測る。底面はほぼ平坦である。

出土遺物はなく、時期不明である。（馬場　保之）

⑤① 土坑77（挿図43）

調査区西側ほぼ中央、72号住居址を切って検出された。100×110cmの不整形を呈し、深さ20cmを測る。壁の立ち上がりはゆるやかで、底面は中央が凹む。

出土遺物は土師器甕の2片であり、時期不明である。（馬場　保之）

⑤② 土坑78（挿図43）

調査区西側ほぼ中央、72号住居址を切って検出された。100×110cmの不整円形を呈し、北側は一段深く凹む。

出土遺物は土師器甕・坏、須恵器坏、灰釉陶器碗、不明土製品の8片がある。

平安時代後期に位置づくものと思われる。（馬場　保之）

⑤③ 土坑79（挿図43第21図）

調査区中央北寄り、60・61号住居址の中間で検出された。100×110cmの不整円形を呈し、深さ22cmを測る。だらだらと掘り凹められており、底面は東側が低い。

出土遺物は土師器・壷・甕・坏・高坏、須恵器坏、陶器碗等があり、出土量は少ない。古墳時代後期の遺物が多いが、本址の詳細時期は不明である。（馬場　保之）

⑤④ 土坑80（挿図43）

調査区中央北寄り、60・61号住居址の間で検出された。径90cmの不整円形を呈し、土坑79と同様、だらだらと掘り凹む。

出土遺物はなく、時期不明である。（馬場　保之）

⑤⑤ 土坑81（挿図42）

土坑56の西壁を切って検出した、直径1.0mの円形の土坑である。底部は中央にやや窪んでお

り最深部は10cmとごく浅い。壁は比較的緩やかに立ち上がっている。

覆土からの遺物の出土はなく、時期・性格ともに不明である。　（吉川　豊）

㊽ 土坑82（挿図43）

土坑81の北隣で検出した直径1.0mの円形の土坑である。そこはほぼ平坦であり、深さは14cmを測る。北壁側の壁直下には小さい穴がある。壁は北から西にかけて比較的急角度に立ち上がるが、それ以外は緩やかである。

覆土からの遺物の出土はなく、時期・性格ともに不明である。　（吉川　豊）

㊼ 土坑83（挿図43）

69号住居址の北側、土坑56の北東側に位置する1.4×0.9mの不整楕円形の土坑である。西側は別の穴と切り合っているが新旧関係は不明である。底は中央に向かってやや窪んでおり、深さは12cmを測るが、東側が多少高くなっており2段に見える。壁はほぼ垂直に立ち上がる西側をのぞいては比較的緩やかである。

覆土からの遺物の出土はなく、時期・性格ともに不明である。　（吉川　豊）

㊾ 土坑84（挿図5）

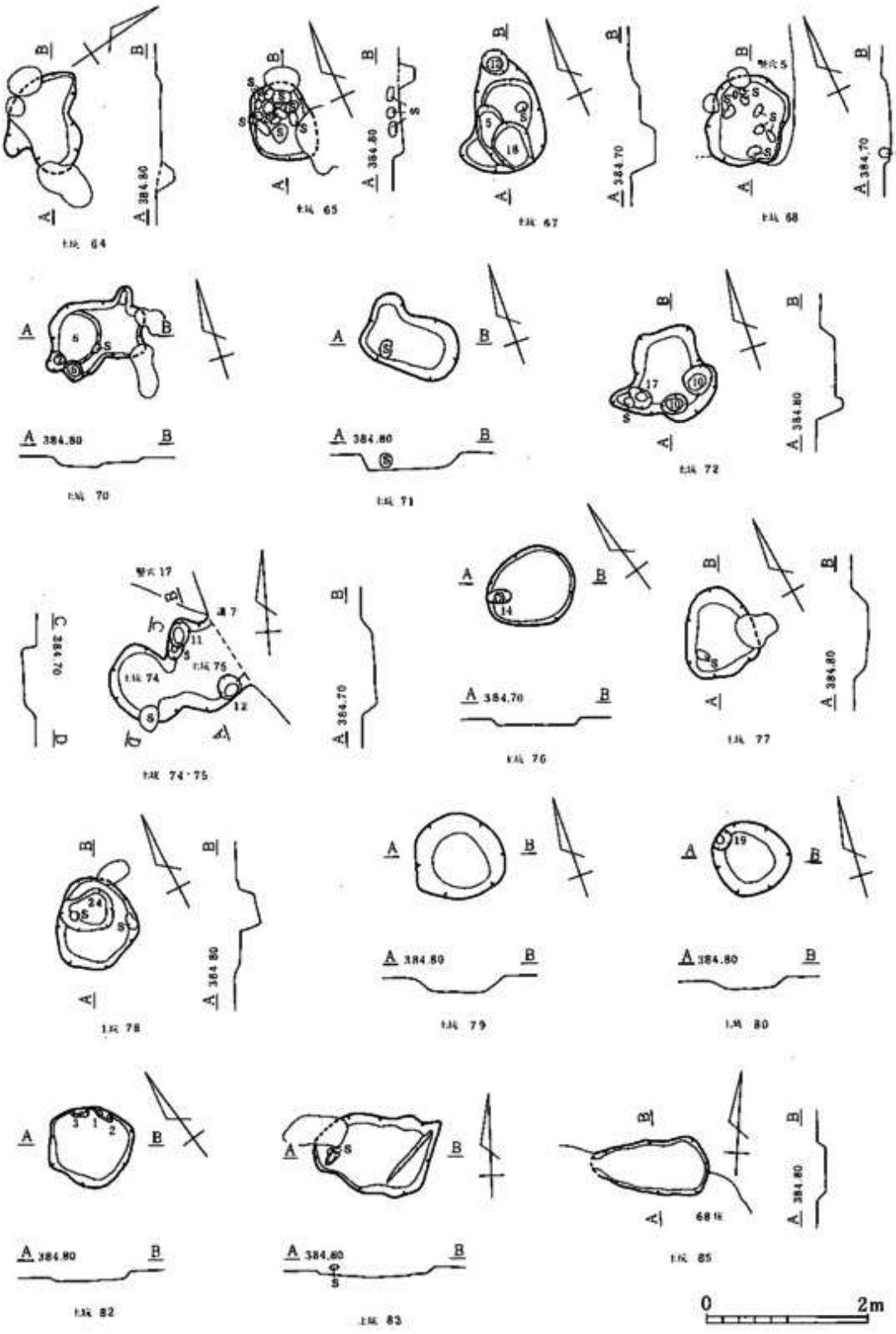
68号住居址の南角で67号住居址を切り、溝址11及び13に切られて検出した。切り合いが複雑であり、土坑の規模はわからないが、調査できた部分は1.6×0.9m不整方形である。土坑の中央を溝址13が通り、底部を2分している。深さは10cmと浅い。壁は比較的急角度である。

覆土からの遺物の出土はなく、時期・性格ともに不明である。　（吉川　豊）

㊾ 土坑85（挿図43）

68号住居址の北壁を切って検出した。1.4×0.6mの不整楕円形の土坑である。底部はほぼ平坦であり、深さは10cmを測る。西側は68号住居址の周溝とつながっている。壁は比較的急角度に立ち上がっている。

覆土からの遺物の出土はなく、時期・性格ともに不明である。　（吉川　豊）




**挿図43　土坑64・65・67・68・70・71・72・74・75・76・77・78・79・80・82・83・85**

⑳　土坑86（挿図８第21図）

58号住居址と溝状址３が切り合う部分に検出した。58号住居址との切り合い関係は不明であるが、溝状址３には上部を切られている。平面形は南北に長い楕円形で、規模は1.2×１ｍを測る。深さは最深部で24cmである。壁面には凹凸があり、比較的緩やかに立ち上がっている。覆土は黒色土で、焼土が混入している。58号住居址に付属する穴とも考えられるが、住居址の壁より外に張りだしているため、土坑とした。

遺物には、土師器甕（第21図10）、壷（11）がある。甕は口縁部の破片で、外面はハケをヘラミガキにより消している。胎土中に小石粒が混入、石粒を含んでいる。焼成は良好で、薄い茶色を呈している。壷はいわゆる小型丸底土器である。口縁部が体部より大きく、ハの字状に開くものである。焼成は良好、色調は薄い茶色である。胎土中には小石粒が混入している。

時期は、遺物から古墳時代前期に位置付く。　（佐合　英治）

㉑　土坑87（挿図34）

Dトレンチ溝址14の西側に検出した土坑である。青灰色砂質土の基盤に、黒灰色粘質土が入っていた。規模は2.3×0.8m深さ20cmで、長軸方向はN79°Wを測る。

遺物の出土が無く時期は不明であるが、中近世の墓壙と推測した。　（佐々木嘉和）

## ８）その他の遺構

①　柱穴址（付図２　第21図・22・31図）

本遺跡内には、大小さまざまな穴が検出された。これら穴のほとんどは、古墳時代前期住居址が検出される面の上層の褐色土面で把握された。調査範囲内では北側にいくほど穴の数が増加する傾向がある。確認した穴の規模は15cmから１ｍを測るものまである。深さは検出面から４cm～47cmを測るものまでさまざまである。平面形は円形、楕円形、方形などがあり、50cmをこえる穴に方形を呈するものが認められる。59号住居址、竪穴４の東側には大きな穴が比較的集中している。掘方内に多量の石が混入するものも複数検出された。掘立柱建物址の存在が考えられるが規則的な配置は把握できなかった。これに対し、72号住居址の周辺では規格制が認められる。確認した穴の大半は直径20～30cm程の小形の穴である。２本ないし３本の切り合いがあり、同位置で何度も造り替えを行なっている。詳細は不明であるが、平行及びこれに直行する列が数列認められる。確実なものに南北方向に平行する３列と、この南端に直行する東西方向の１列がある。さらに、穴の数はまばらではあるが空間部を区画する列の存在も考えられる。想定規模11.5×９ｍの南北に長い総柱の建物址の可能性がある。しかし、柱間は狭いと考えられ、深さにもば

らつきがあり、北側の一辺も把握できなかった事から、柵址など区画施設の可能性もある。

穴の遺物には、弥生時代壺（第21図12）、土師器甕（13・14）、高坏（15）、平安時代甕、（第22図1～13）、須恵器甕（14～20）、坏（21）、常滑（22）、天目瓶（23）、砥石（24）、鉄製品（第31図16）などがある。全体として平安時代の遺物が大半を占めるが、直接付属するものかは不明である。第21図13の甕と15の高坏は同一の穴から出土している。60号住居址の南に検出された穴である。この竪穴南西壁は確実に把握されておらず、遺物の時期を考えるとこの住居址に付属する穴である可能性がある。出土状態から、穴に直接属するものとして第22図21の坏と23の瓶がある、前者は竪穴2と土坑59の中間に確認した穴から出土した。須恵器高台付の坏で完成品である。ロクロ痕を顕著に残し、底部はケズリにより仕上げられている。胎土中は小石粒、石粒が認められる。焼成は普通、灰色を呈している。後者は51号住居址と72号住居址のほぼ中間の穴からの出土である。仏花瓶の頸部で、内外面とも黒色の鉄釉が付されている。焼成は普通である。

時期は、検出される層位、覆土、周囲の遺構の状態から、大型のものが平安時代以前に、小型のものが中世に位置づく可能性が高いと考えられる。（佐合　英治）

### 9）遺構外遺物（挿図23・24・25・26・27・28・29・30・32）

#### 縄文時代

本時期の土器は少ない。みな摩滅しており詳細時期不明のものもあるが、中期に位置付く土器片（第23図1～6）がある。土器の施文には、沈線、隆帯刺突、縄文等が見られる、焼成はうすい橙色を呈する5がやや不良のほかは、普通で茶色ないし暗い茶色である。胎土中にはみな小石粒が混入しており、1・3・4には雲母も認められる。石器としては、黒曜石製の石鏃（第30図6・7）、裂器と思われるもの（8～11）がある。遺構が伴わないため打製石器として本時期のものは不明であるが、大型の石斧三点（第27図1～3）や剥片石器（第28図10～14・第29図1～6）の中には、本時期のものが含まれている可能性がある。

#### 弥生時代

弥生時代の土器は、中期（7～10）と後期（第23図11～22）に属するものがある。中期土器は同一個体と思われる条線施文のもので、口縁部のキザミは竹管の腹を押し当てたものである。胎土中には小石粒が混入し、やや大きめの石粒も含んでいる。色調は茶色である。

後期土器には壺と甕がある。11～14は壺で、刺突によるキザミ、沈線、波状文が見られる。焼成は11・13が普通で、あとのものは良好である。胎土中には小石粒、石粒、雲母、赤粒を含んでいるが、11には赤粒、12には石粒、13には雲母が見られない。色調は14がうすい橙を呈しているほかは、うすい茶色である。15～17は甕で波状文と斜走短線、波状紋を二段に施文するものとが

ある。どれもうすい茶色を呈し、胎土中には雲母、小石粒を含んでいる。焼成は16が普通、残り二点は良好である。底部は全体形が不明の為、詳細時期がはっきりしないものがある。18～20は壷、21・22は甕と考えられる。壷の焼成はすべて普通で、色調は茶色ないし薄い茶色である。腕土中に小石粒を含んでおり、葉脈痕のある18にはやや大きめの石粒、19には雲母も認められる。21の胎土中には小石粒が見られる。焼成はやや不良で、茶色を呈している。22には網代痕が見られる。胎土中には小石粒、石粒が混入している。焼成は普通で、うすい茶色を呈している。

石器には、打製石斧（27図1～11・28図1～4）、半磨製石斧（5～7）、有肩扁状形石器（8・9）横刃型石器（第28図10～14・第29図1～6）、打製石包丁（7～12）、大型の磨製石鏃（30図15）がある。有肩扁状形石器には、ロー状光沢が刃部中央に見られる。石包丁には抉りを入れるものと、そうでないものがあり、後者のなかにもこれを意図してか、両サイドを敲打するものがある。

### 古墳時代

土師器壷、甕、高坏など出土量は比較的多いが、図化できるものは少ない。図化した甕（第24図1～5）、高坏（6）、てずくね（第30図3）は前期に位置づく土器と考えられる。第24図5は甕の台部である。台付き甕は遺構に伴うものにも完成品はなく、破片数点が出土したのみである。焼成はどれも普通で、胎土中には小石粒を含んでいる。色調は胎土中にやや多く小石粒が混入する第24図3が橙色のほかは、うすい茶色を呈している。また、てずくねには赤粒が認められる。

須恵器として本期のものに、長頸壷（第25図1）、𤭯（2）、甕（3）があるが、長頸壷の頸部は後出的なものかもしれない。長頸壷の焼成は普通で、灰色を呈している。胎土中には小石粒がわずか認められる。𤭯の焼成は良好、胎土は精良なものである。色調は明るい灰色である。3の胎土中には小石粒にやや大きめの石粒を含んでいる。白灰色で、焼成は普通である。鉄製品としては刀子（第32図1～4）と思われるものが、本期のものと考えられる。

### 奈良・平安時代

奈良時代に確実に位置づく遺物の出土は無かった。

平安時代のものとして土師器甕（24図7～16）、坏（17～20）、須恵器として甕（第25図4～10）、坏（11～13）、がある。ほかに、灰釉陶器碗（14～18）、緑釉陶器（19）、などがある。

土師器甕は長胴となるもので、内面にもカキメ痕を残すものもある。焼成は普通もしくは良好である。胎土中には小石粒を含み、10を除き雲母を含んでいる。色調はほとんどのものが、うすい茶色であるが、8・10など明るい橙色を呈するものもある。坏はロクロ痕が顕著に認められ、底部はほとんどのものに回転糸切が見られるが、すれが激しい。ほとんどのものが内面黒色処理されている。色調はうすい茶色で、焼成は普通である。胎土中には小石粒、雲母を含んでおり、17には赤粒、19には石粒が認められる。

須恵器甕の内面には同心円文とハケが認められるものがあり、前者は少ない。5・9の胎土は精選されて精良なものである。ほかのものは小石粒を含んでおり、7にはやや大きめの石粒も認められる。焼成はみな良好で、色調は6がやや紫がかるほかは灰色もしくは明るい灰色である。坏には高台の付くもの、付かないもの両者があり、後者の底部には糸切り痕が認められる。高台を持つ坏の体部はほぼ垂直に立ち上がるものが大半を占め、高台の無いものに比べやや大きいものが多い。色調は灰色もしくは、青灰色である。焼成は良好で、胎土中には小石粒を含んでいる。

灰釉陶器には碗と皿があり、破片も含め全体形の知れるものには皿が多い。釉薬はみな淡緑色を呈しており、浸けがけされている。胎土はみな精選されたもので、焼成は良好である。緑釉陶器は摩滅し、内面の釉薬はほとんど剥がれているが、全面に釉薬を施したものである。胎土は軟らかく、白色を呈している。

**中世以降**

中世以降の遺物として土師質の皿（第25図20）、須恵質の壺（21・22）、山茶碗（23・24）、下ろし皿（第26図1～3）、常滑甕（4）、天目茶碗（6～12）、青磁（13）、摺り鉢（14～17）のほか、用途不明の須恵質遺物（5）がある。

土師器甕質の皿の底部は糸切りであるが、胎土がいわゆるカワラケのものとは異なり、きめが細かくきわめて軟質であるため、痕跡をほとんどとどめていない。

須恵質の壺には大小二者がある。前者には肩部と胴最大径となる部分に4～5条の沈線が見られ、白色の自然釉がかかっている。後者の底部は回転糸切り痕が顕著に残っている。両者とも色調は山茶碗のそれに似るが、胎土は密で堅いものである。

山茶碗は糸切り痕を残したまま、高台部を貼りつけているものである。

下ろし皿の胎土には、山茶碗と同様もの1と、須恵器質のもの2・3とがあり、使用面のヘラ整形も異なっている。後者の口縁端部には緑色の釉薬も施されており、2・3は1の下ろし皿より後出のものと考えられる。

常滑は竪穴などの遺構出土のものも含め数点あるのみで、ほかの中世遺物に比べ出土量が少ない。

天目茶碗の釉薬には黒色のもの6～9と、うすい緑色のもの10～12とがある。厚い釉薬は内外面全体に施すものと、外面の底部に近い所には施さないものとが両者に存在する。どちらも底部はヘラケズリにより作り出されている。全体形が把握できるものは少ないが、底部口径から判断して、緑色の釉薬を施したものにはやや大型のものも存在する。

磁器類の出土はきわめて少ない。図化した青磁は碗の底部と考えられる。釉薬は厚く付されており、うすい緑色が灰色がかっている。ヘラによる調整が認められ、高台の端部は面取りされている。

摺り鉢には底部に糸切り痕をそのまま残すものと、ロクロのナデで仕上げるものとがある。ど

れも濃い茶色の鉄釉が内外面共に付されているが、この内17・18はカキメが細く、釉薬に光沢があり、胎土から見ても近世以降のものと思われる。

ほかに、砥石として第29図13・14は本時期のものとなる可能性が高い。

鉄製品として、第32図5～7の釘と、8～13の銭がある。　（佐合　英治）

# Ⅳ ま と め

今回の調査結果、及び昭和49・50年の調査結果と周辺の地形等を総合的に検討すると、天竜川に直接面した清水遺跡の具体的な姿のいくつかを読み取ることができる。

今回の調査結果はもちろんであるが、昭和49・50年の発掘調査結果及び地形的な状況など総合的に判断すると、清水遺跡は天竜川の氾濫原という肥沃な農耕地をその生産基盤とし、主な生業を稲作に求めた大集落址であり、その立地条件故に、水害と背中合わせの農民像を読み取ることのできる遺跡といえる。

また、本集落は弥生時代以降様々な変遷をとげているわけであるが、その主な時代は、当地方に稲作が浸透し、高度な農業技術（土木技術）を享受した古墳時代前期の終り頃であることも大きな特徴といえる。

4世紀末から5世紀という時代は、日本の歴史の中で重要な意味を持つといわれながら、地方における実態の不明な時代である。近畿地方を中心に大型の前方後円墳が造られ、それに葬られた人々が活躍した時代にあたる。また、その前方後円墳を造る風習が、全国に拡散して行く時代でもある。

現在、飯田市内で最も古い古墳は、竜丘の兼清塚古墳といわれているが、この松尾地区内にも前方後円墳ではないが、5世紀の中頃に造られた妙前大塚古墳があり、5世紀において中央の文化を積極的に受け入れた土地であるといえる。

また、具体的な時代等が未解明であるが、上下の段丘を分ける段丘崖の延長である代田山の中腹にある狐塚古墳は、松尾地区内で最も古いと考えられる前方後円墳で、清水遺跡で発見された住居址と同時代に造られた古墳の可能性がある。

松尾地区において、4～5世紀の集落が確認されているのは清水遺跡の他、その西方約500mの中位段丘上にある城遺跡の2箇所であるが、地区内の最下段から中位の段丘上に、同時代の集落が営まれた事実は、先述の狐塚古墳を築造するに十分な経済力の存在を考えることができる。

今回の清水遺跡の調査は、遺跡全体のごく一部を調査したのみで、かつて存在した集落全体の様相を知るよしもないが、かなりの広範囲に展開した大集落の存在を予想するに充分といえる。

平安時代の集落については、昭和49・50年の調査で、かなりの数の竪穴住居址が検出されたのに対し、今回の調査では、わずかに3軒の住居址を確認したのみにとどまった。該期の集落中心部からは、周辺部的な様相が今回の調査地点では読み取ることができる。

中世の諸遺構については、性格等不明ではあるが、竪穴・溝址・柱穴等調査範囲内全体から検出され、出土遺物の内容も多岐にわたっている。

これらの資料については、西方一帯で展開された小笠原一族の去就と、強いかかわりを感ずるものである。また、天竜川対岸の下久堅地区との交通手段である渡舟位置にあたり、その道が戦国期における重要な交通路の1つと位置付けられ、それ以降信州と遠州を結ぶ主要な交易路となっており、単に天竜川を渡るだけの意味で片付けられない重要な位置付けのなされる場所といえる。

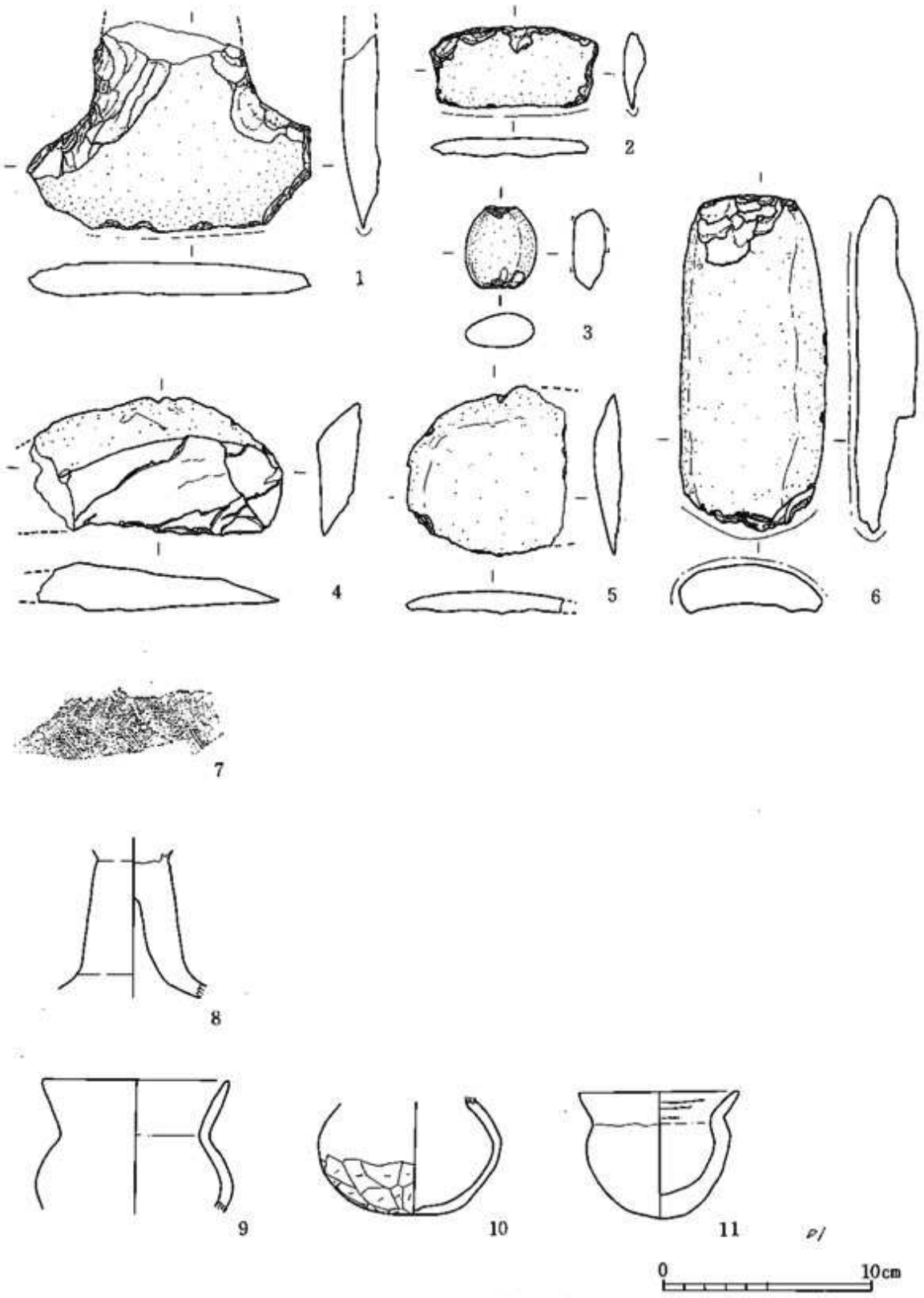
以上、今回の調査結果について概述したが、むしろ調査結果それぞれが示すこととして、市内各所にある様々な遺跡の内でも、当飯田市を、さらには長野県を代表する遺跡の1つとして、当清水遺跡があるといえる。そのことより、遺跡の全体範囲から見て、2回の調査を合わせても、ごく一部を調査したのみであり、未調査の周辺部分にかなり重要な内容が包含されているものと予測される。

近年、この一帯は諸開発が徐々に進行しつつあり、遺跡の正しい姿を復元するためにも、文化財保護の本旨を忘れることなく、地道な努力が、今に生きる我々に課せられていることを、本遺跡の現状から痛感する。　　（小林　正春）

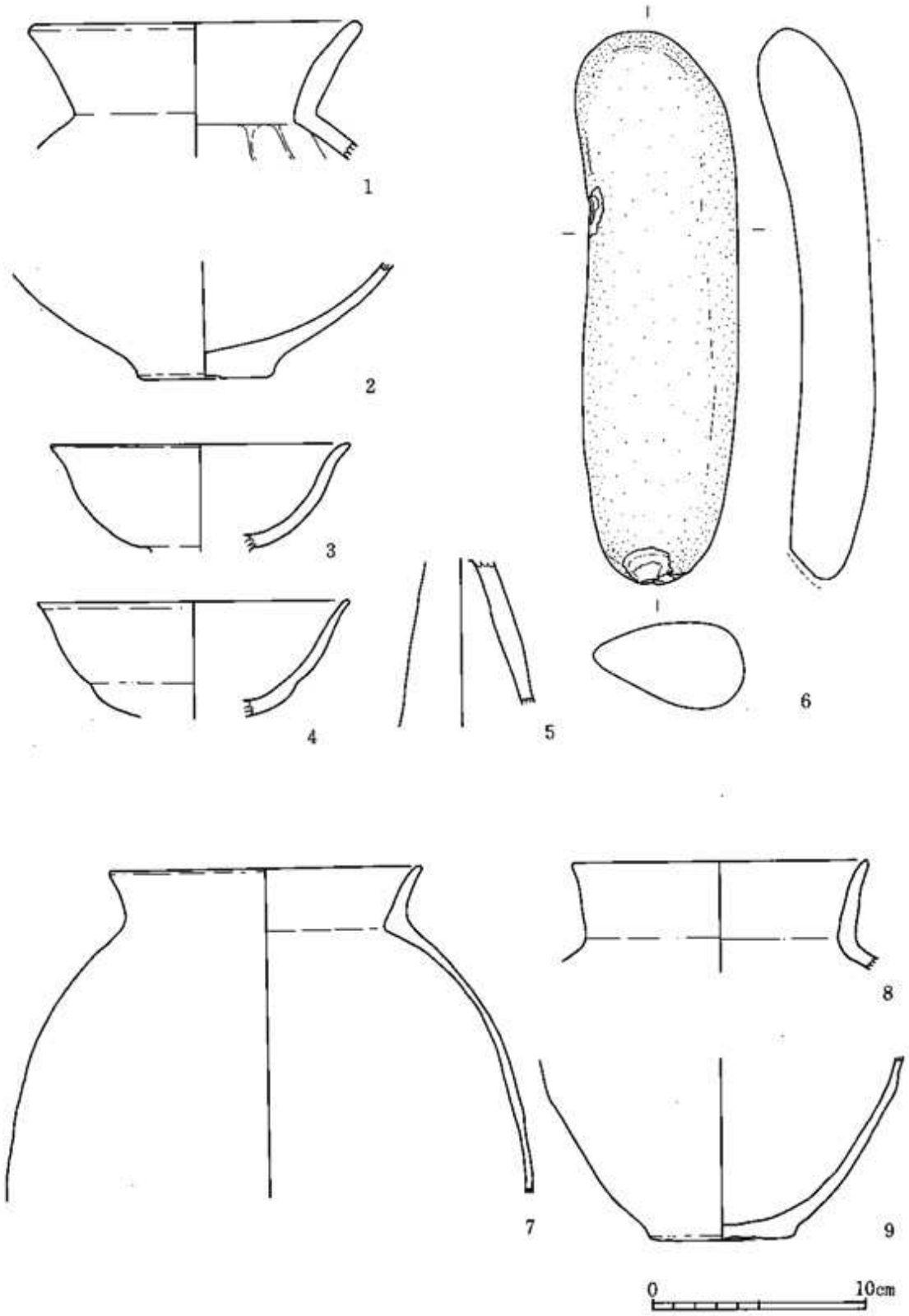
参考文献


市村咸人　1955「下伊那史」第2巻　下伊那史編纂会
市村咸人　1955「下伊那史」第3巻　下伊那史編纂会
飯田市教育委員会　1971「妙前大塚　（3）号古墳」
飯田市教育委員会　1972・1974「南ノ原遺跡」
飯田市教育委員会　1978「毛賀御射山遺跡」
飯田市教育委員会　「八幡町古墳」　1988年調査、整理中
飯田市教育委員会　1976「清水遺跡」
飯田市教育委員会　1991「城遺跡」
神村　透　1967「飯田市寺所遺跡とその他の遺跡」『長野県考古学会誌』4
佐藤甦信　1982「寺所遺跡と寺所式土器」『中部高地の考古学』Ⅱ

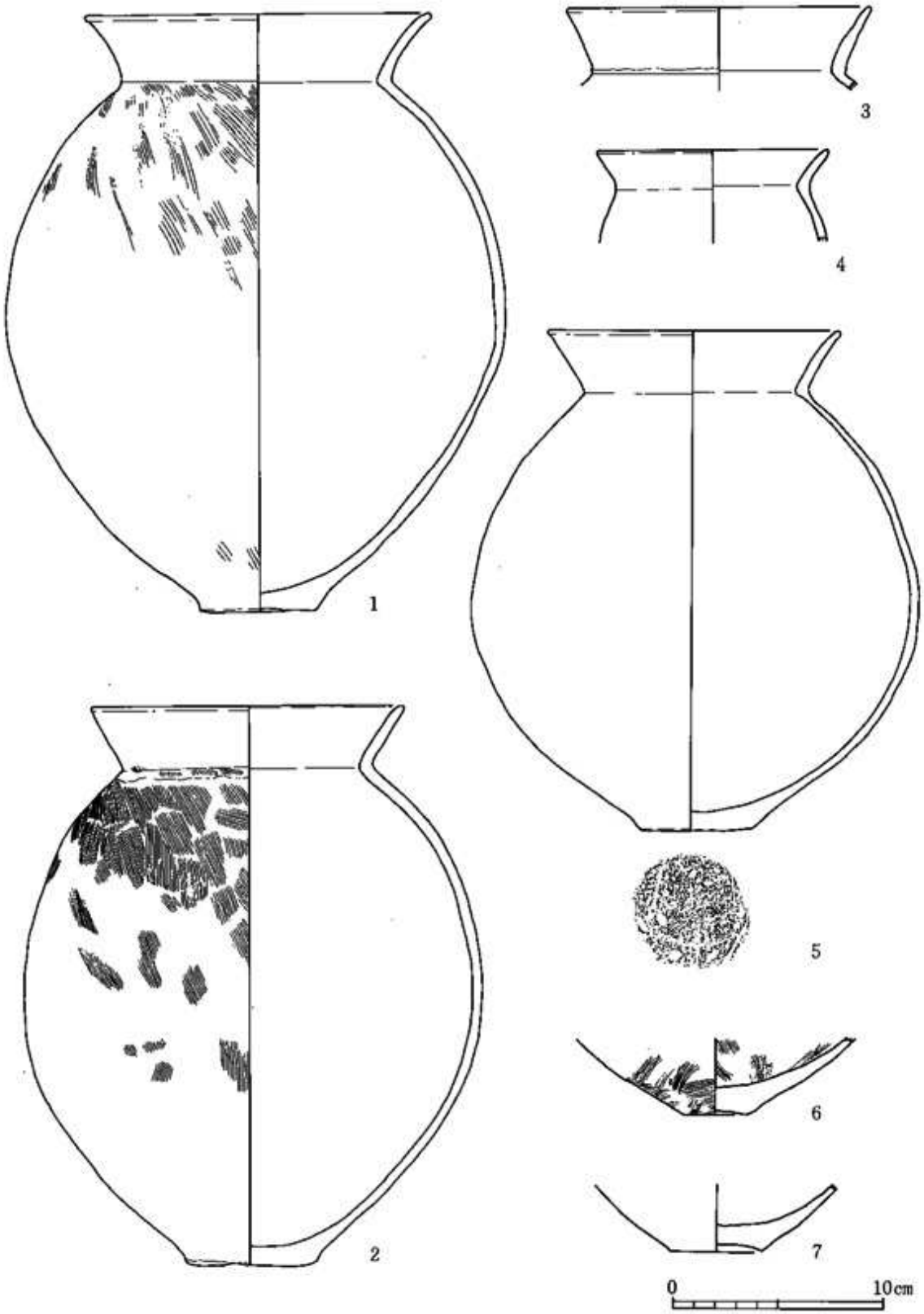
# 図　　版



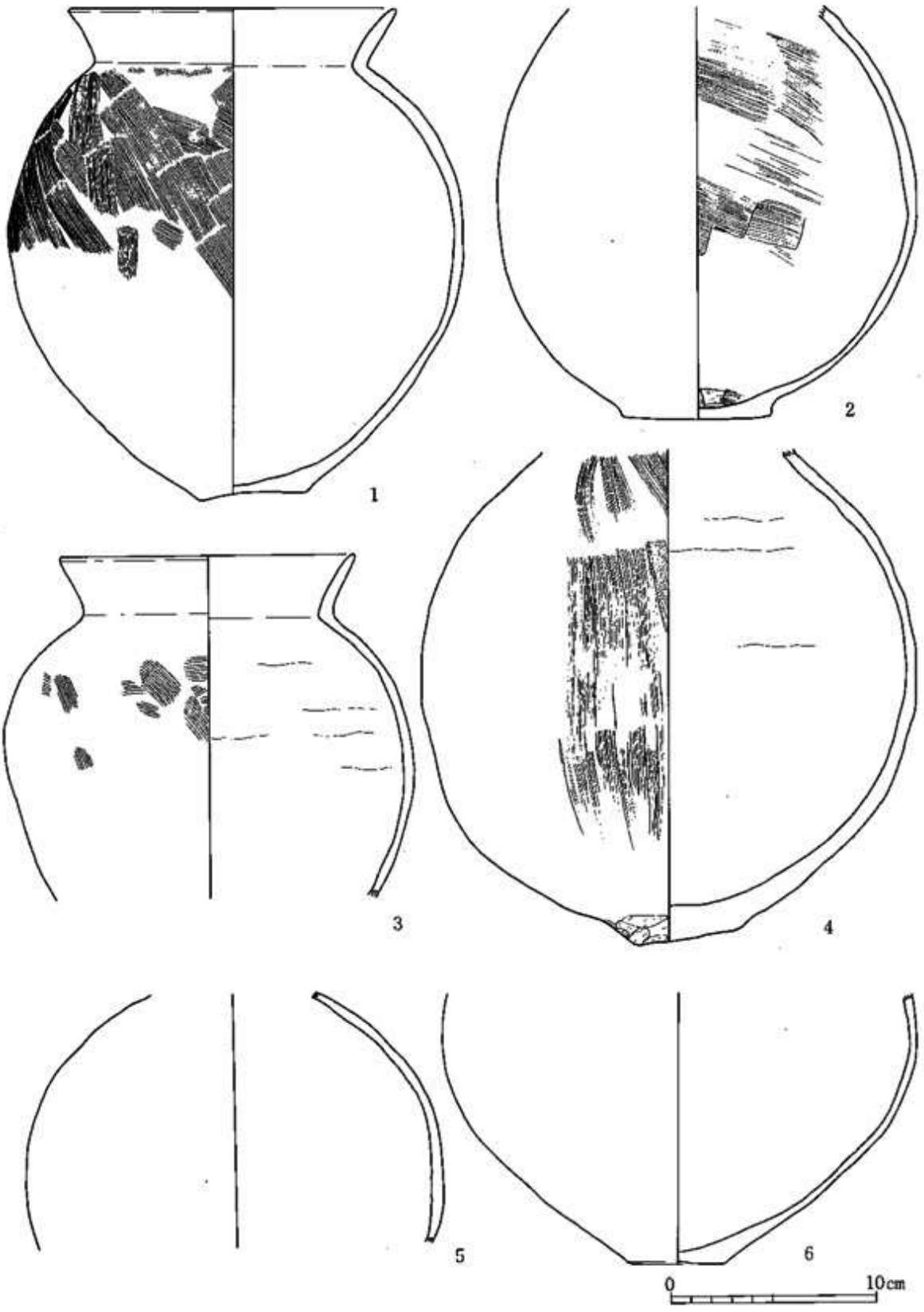

第1図　63(1～6)・67(7)・46(8)・55(9～11)号住居址出土遺物



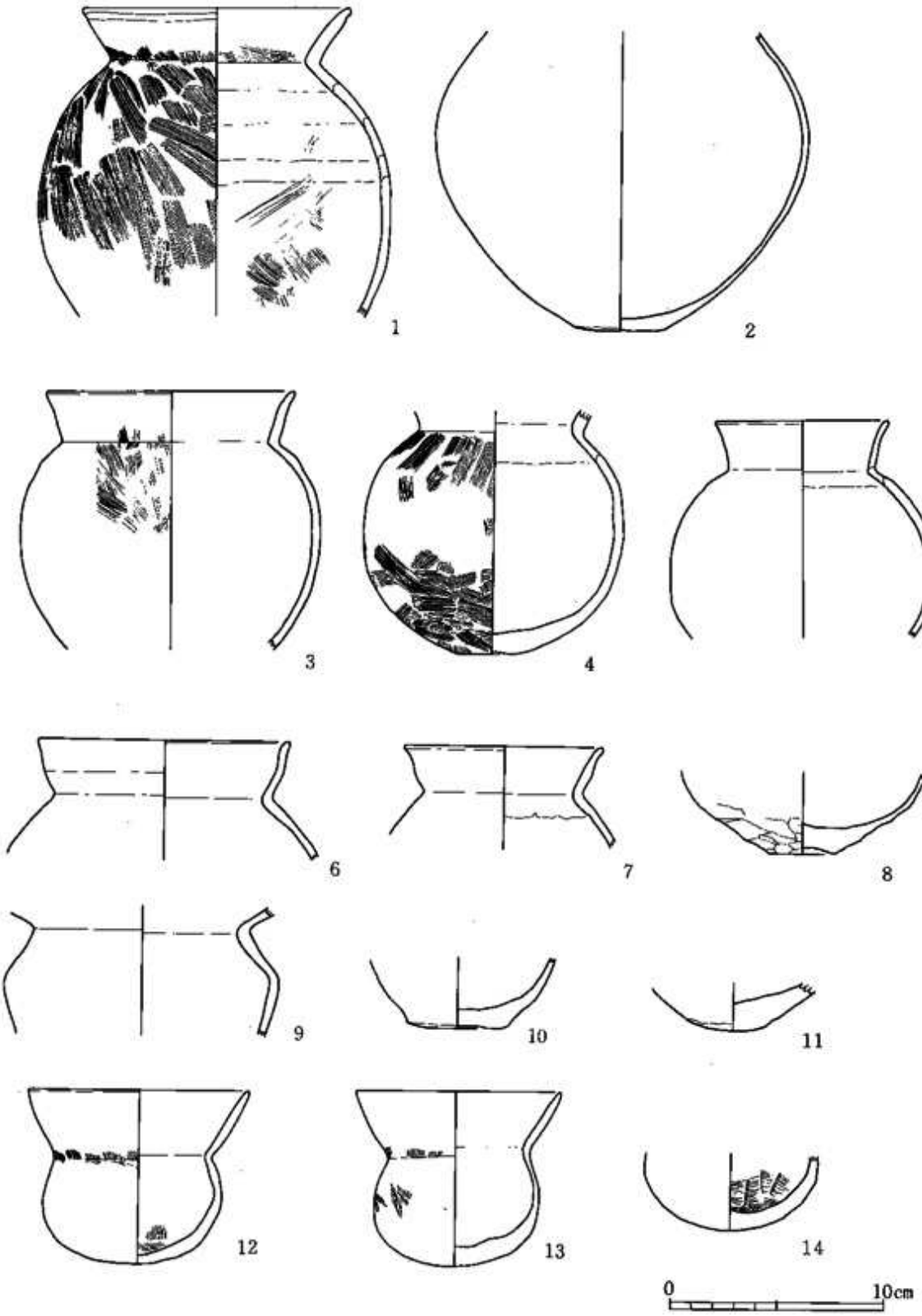

第２図　55(1～6)・59(7～9)号住居址出土遺物



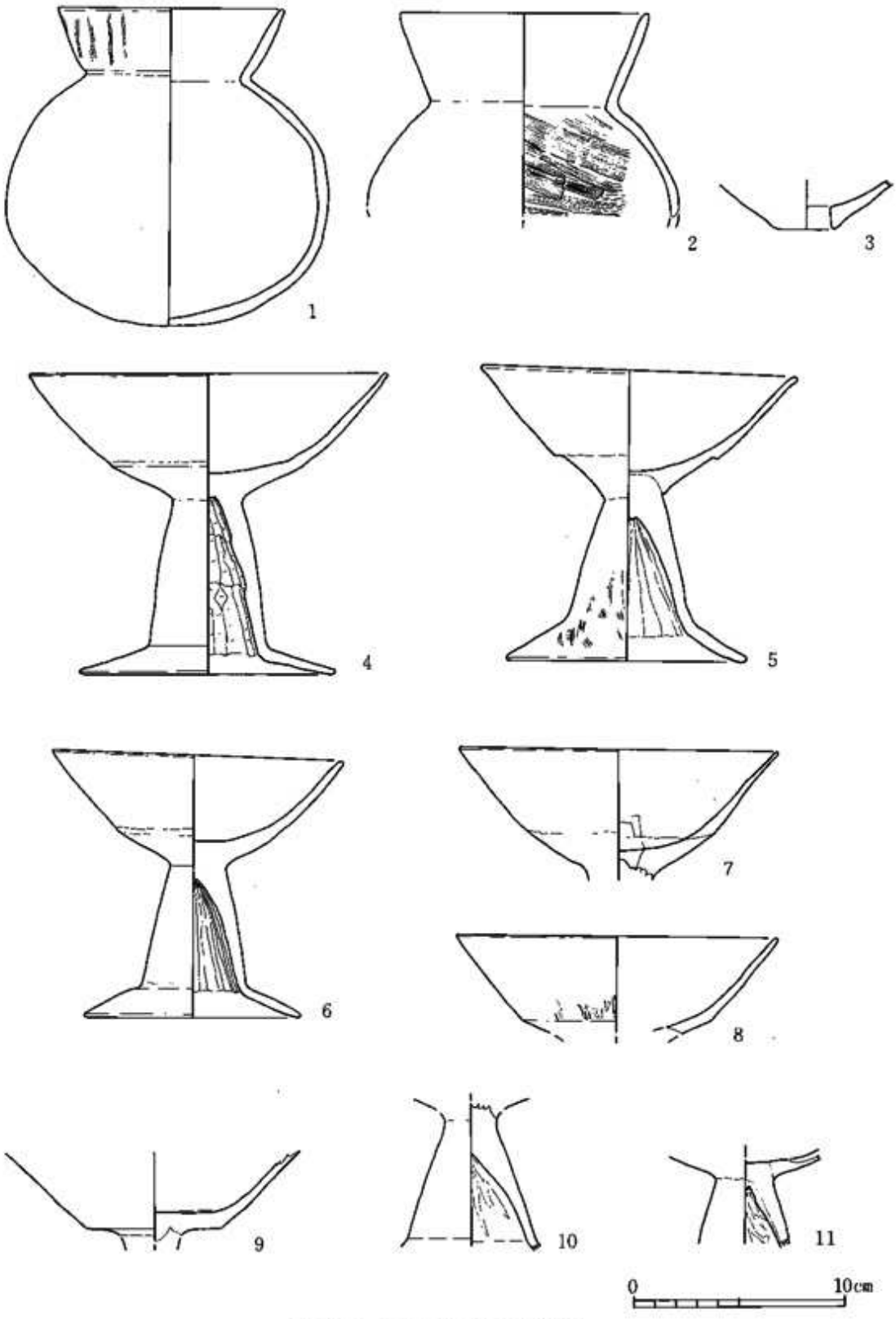

**第3図　59号住居址出土遺物**



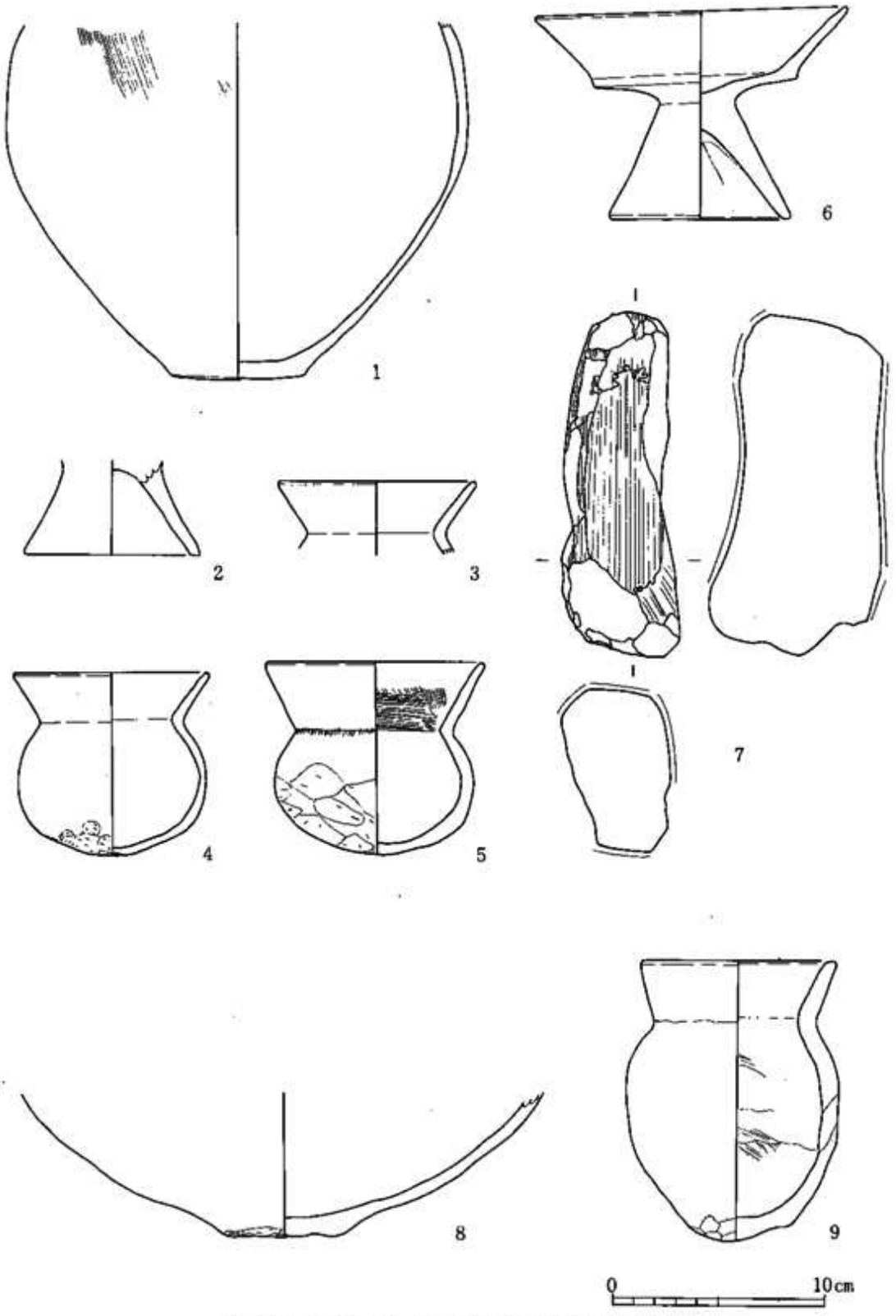

**第4図　59号住居址出土遺物**



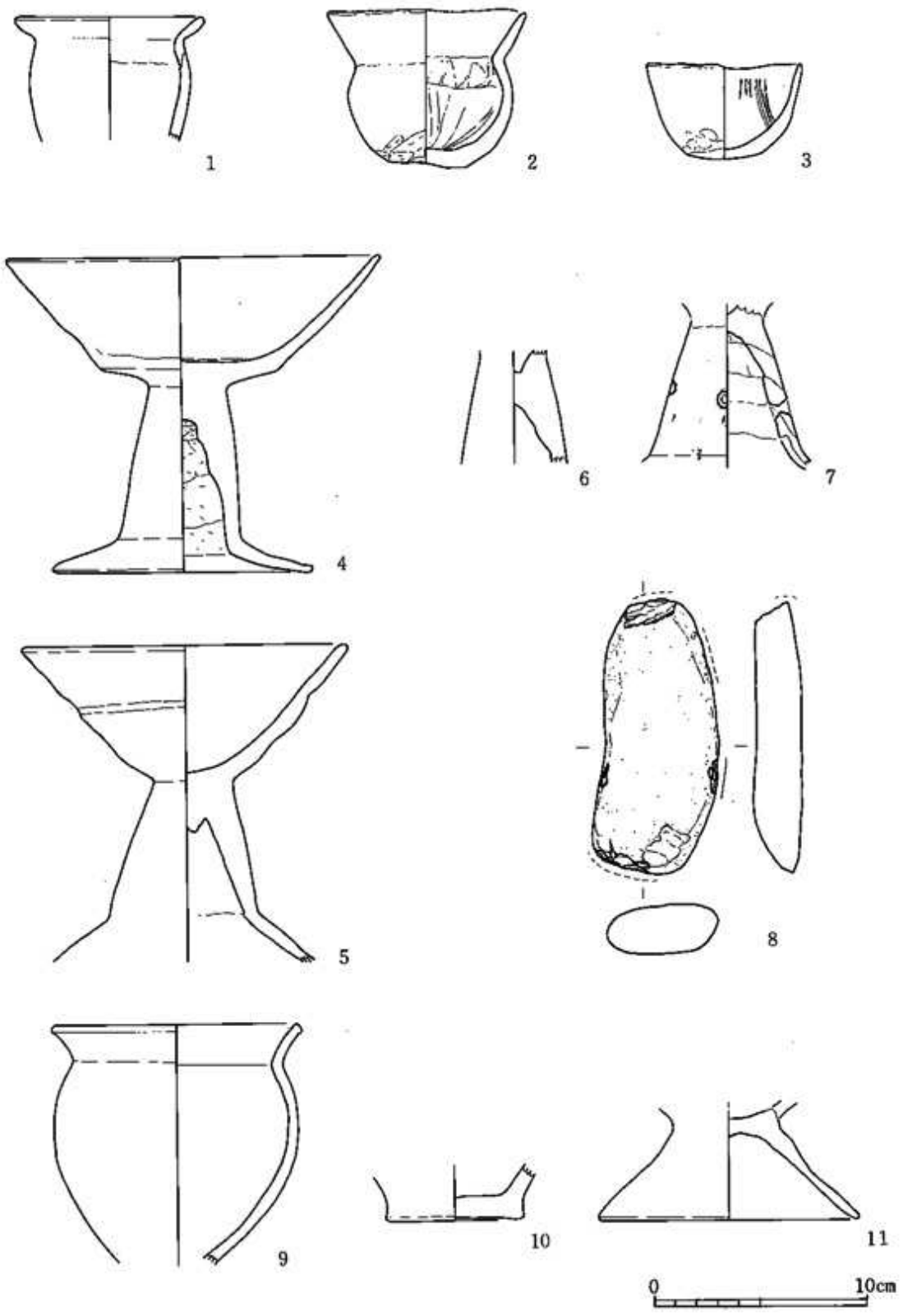

**第5図　59号住居址出土遺物**



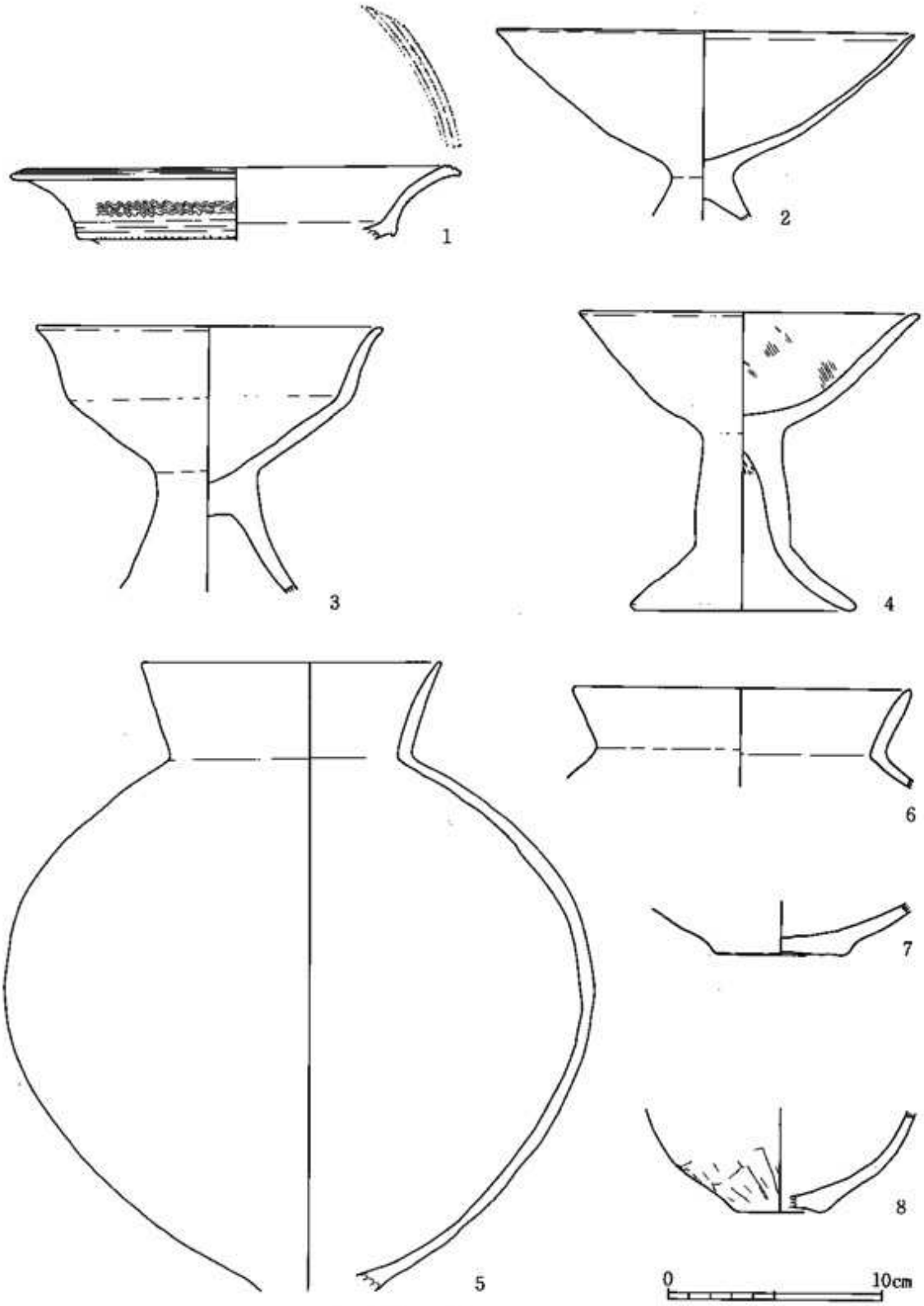

**第6図　59号住居址出土遺物**



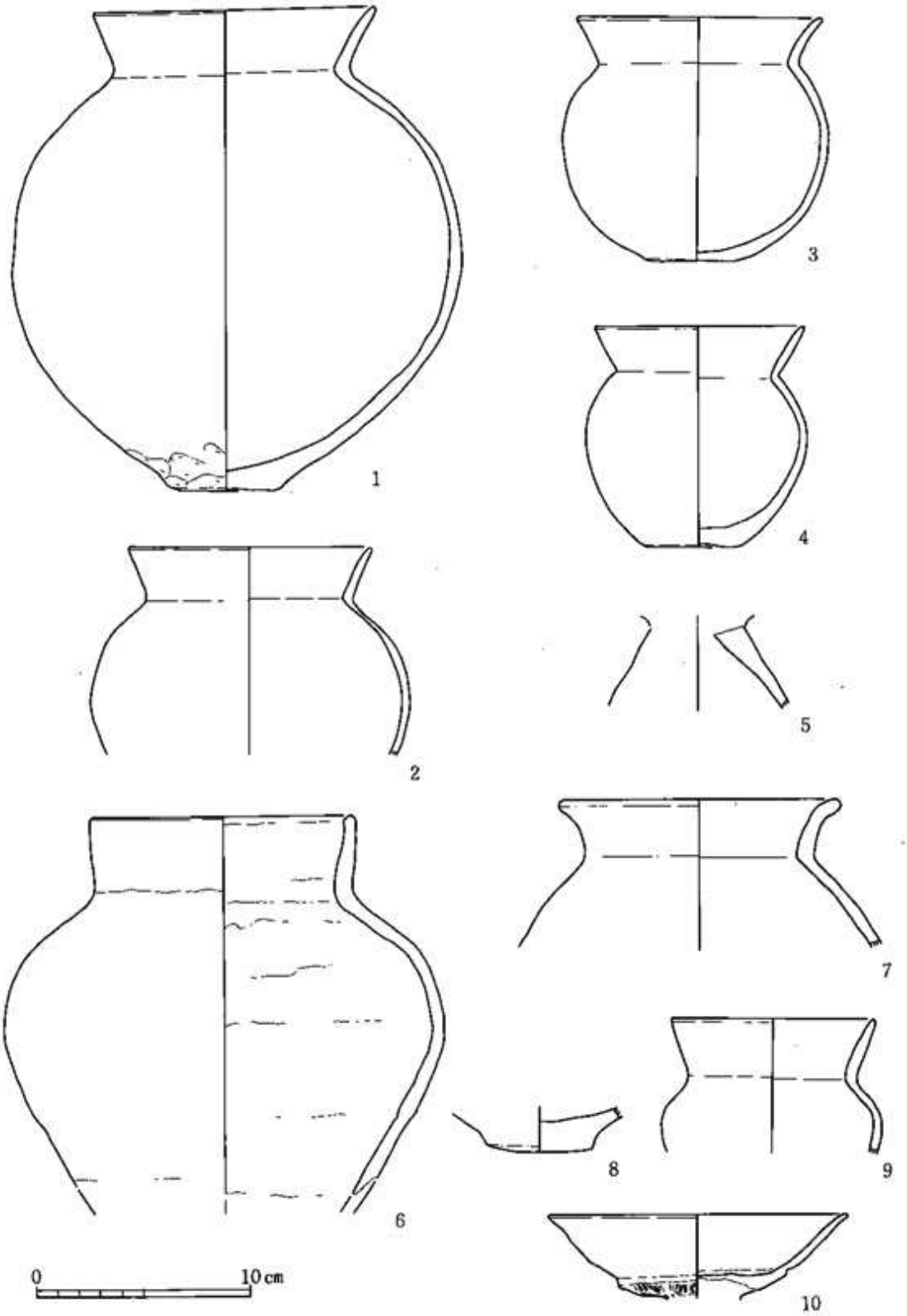

第7図　60(1～7)・61(8・9)号住居址出土遺物



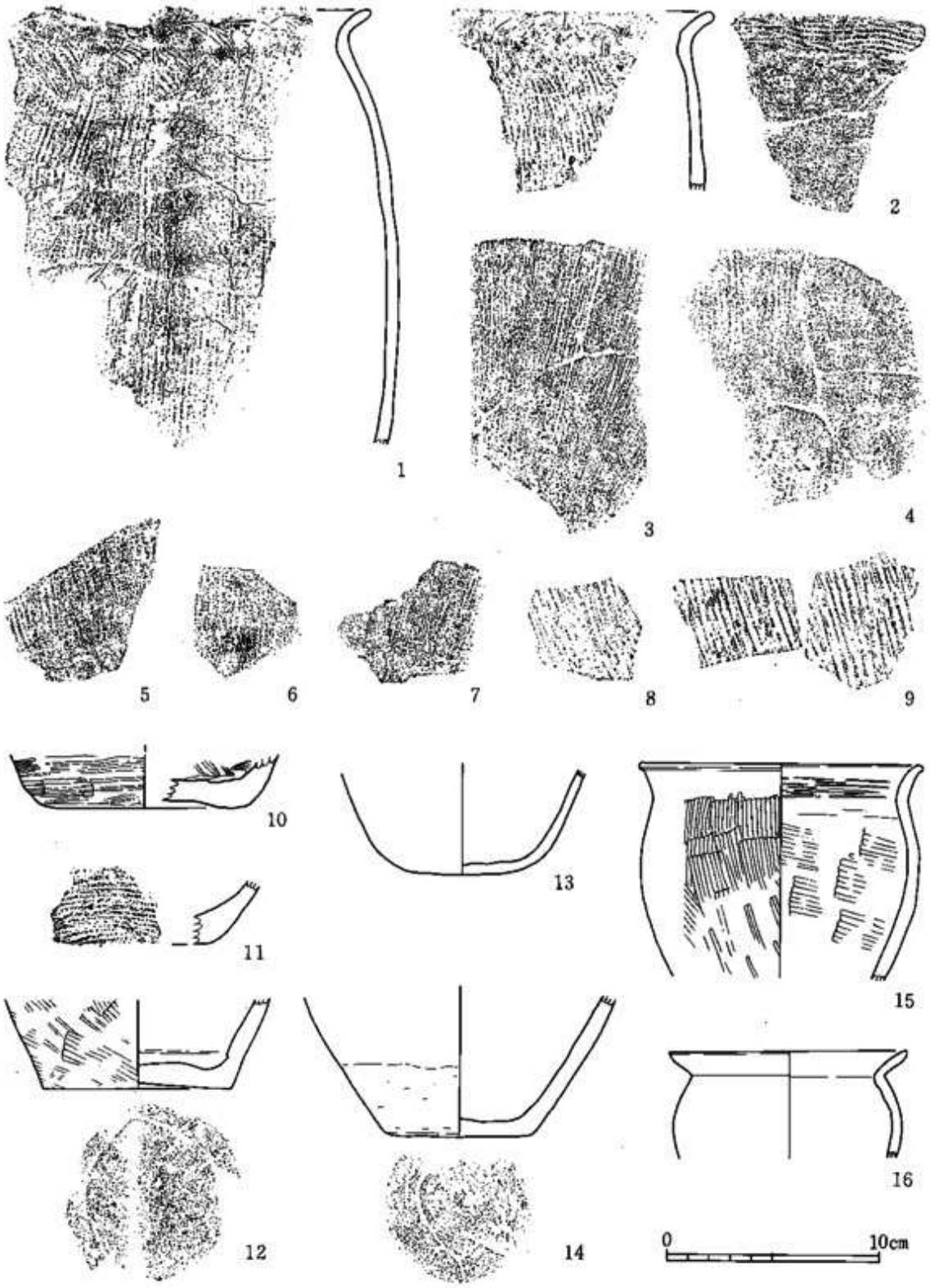

第8図　61(1～8)・62(9～11)号住居址出土遺物



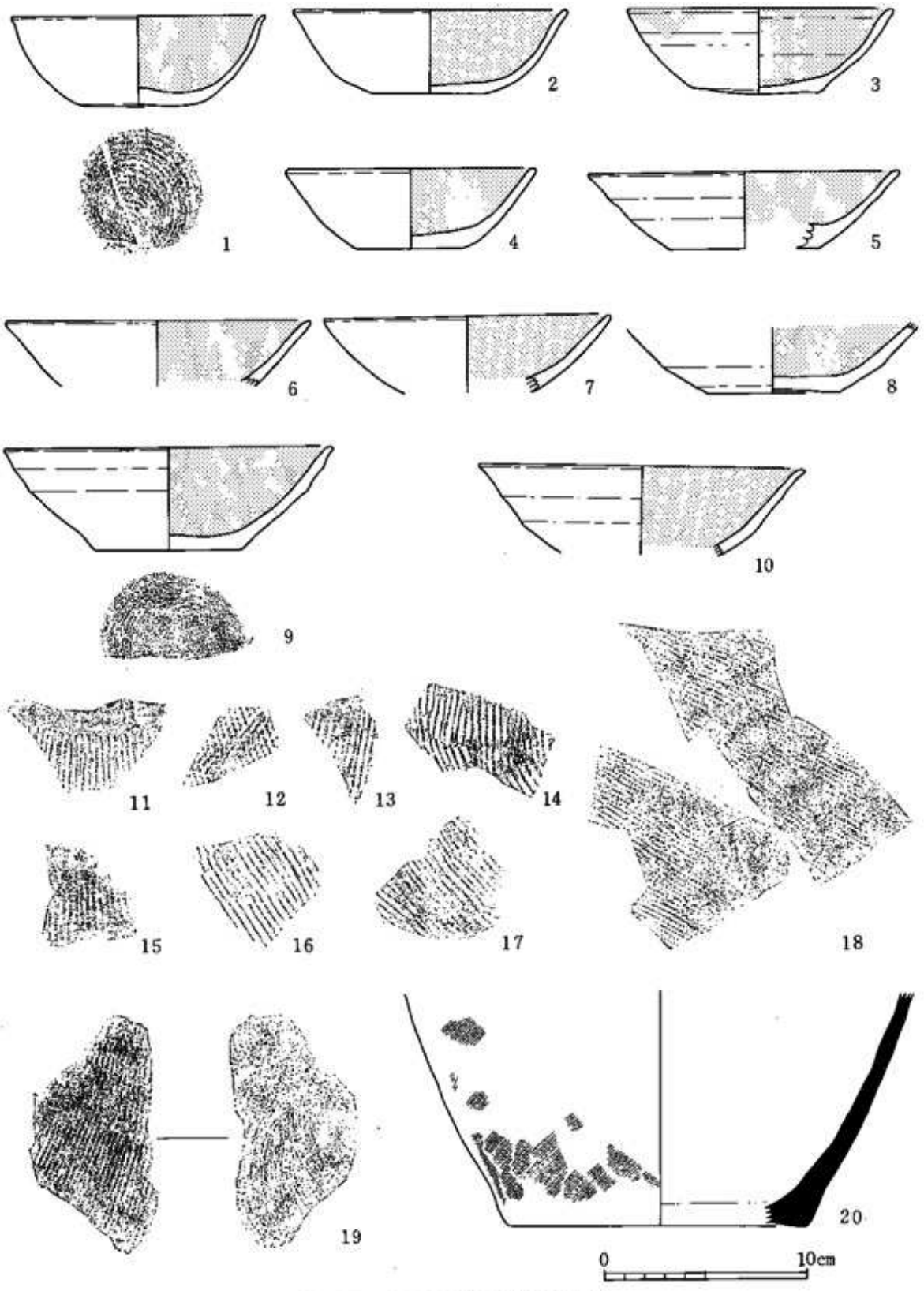

第9図　64(1・2)・65(3)・68(4)・69(5～8)号住居址出土遺物



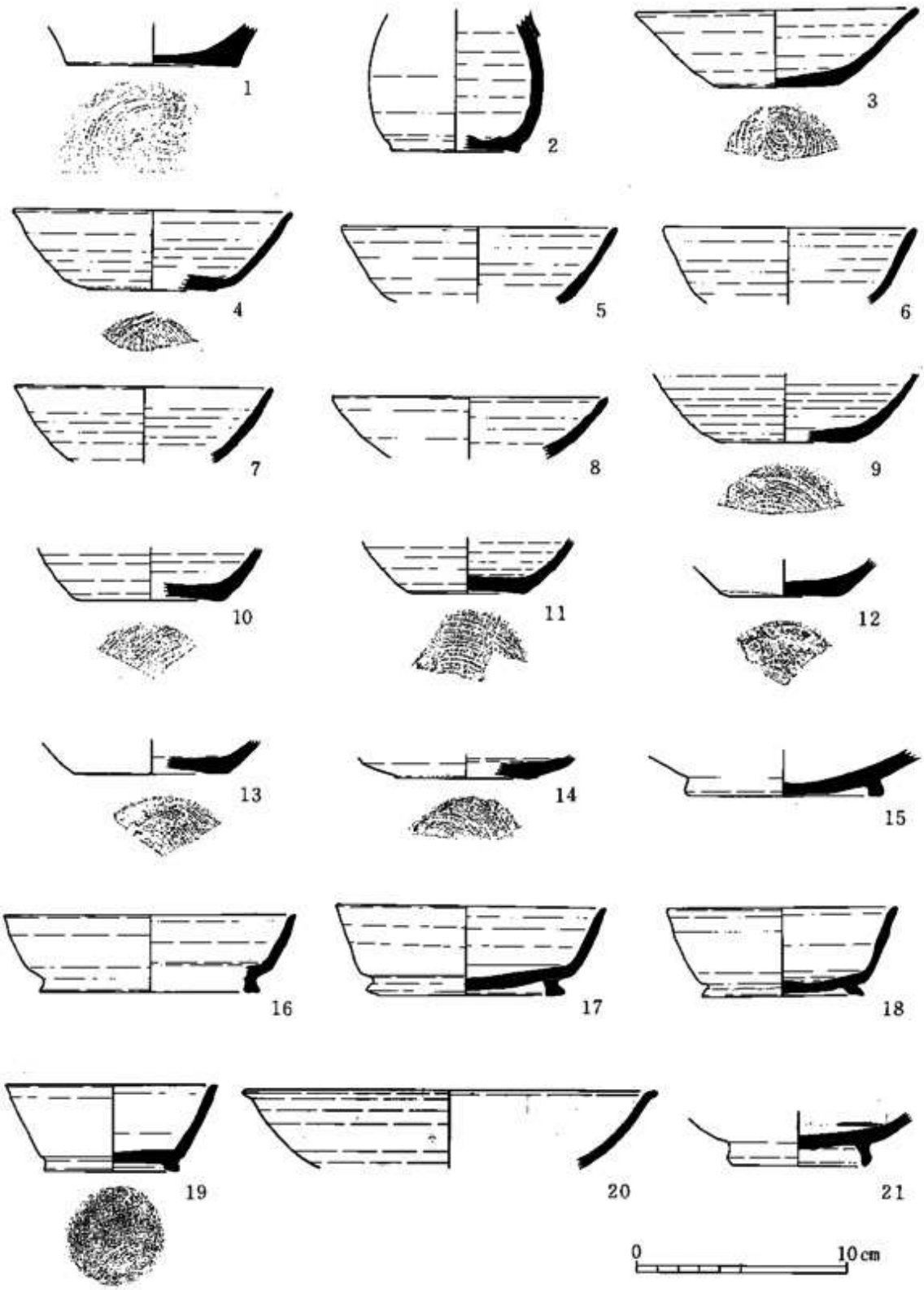

第10図　69(1～5)・72(6～10)号住居址出土遺物



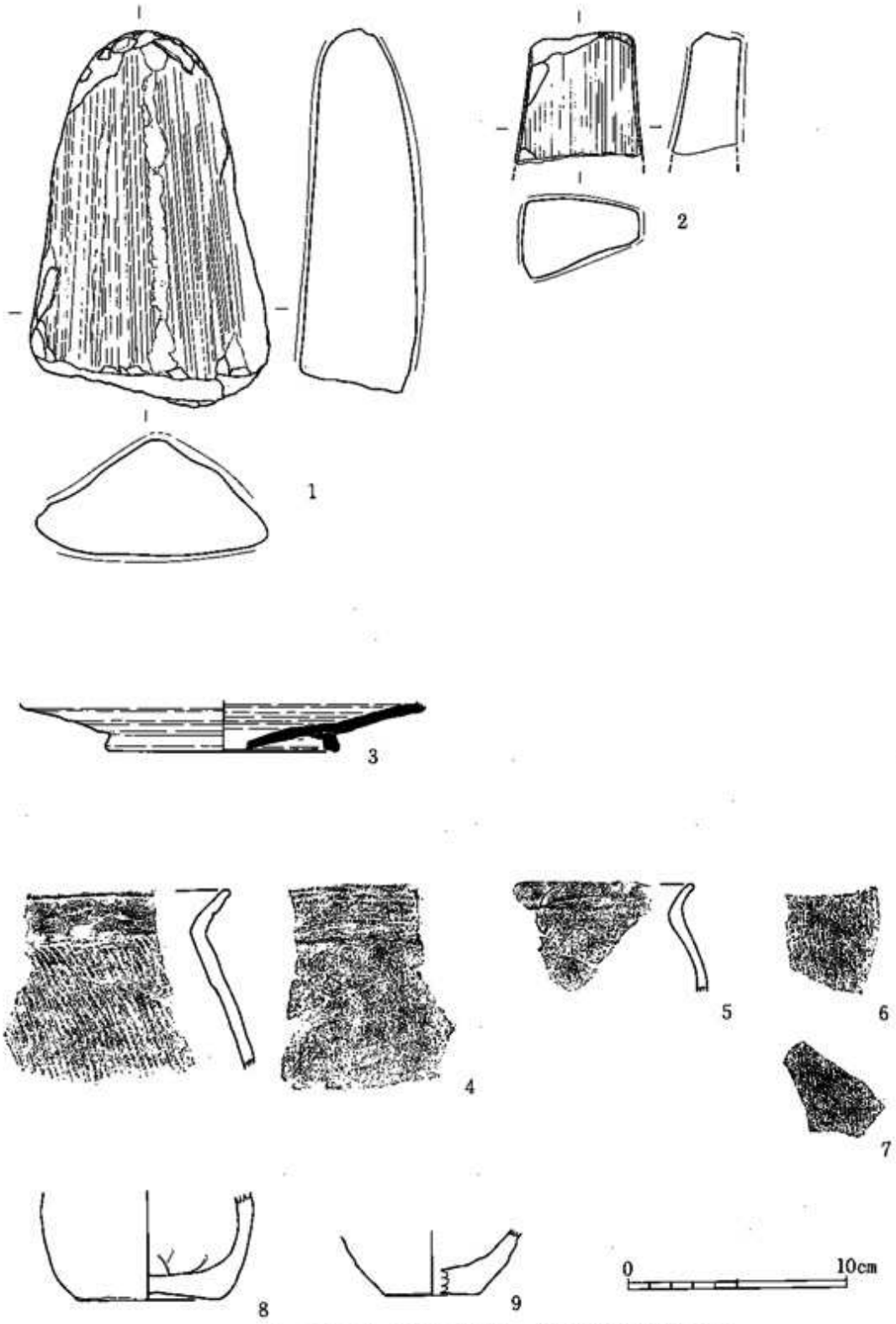

**第11図　44・45号住居址出土遺物**



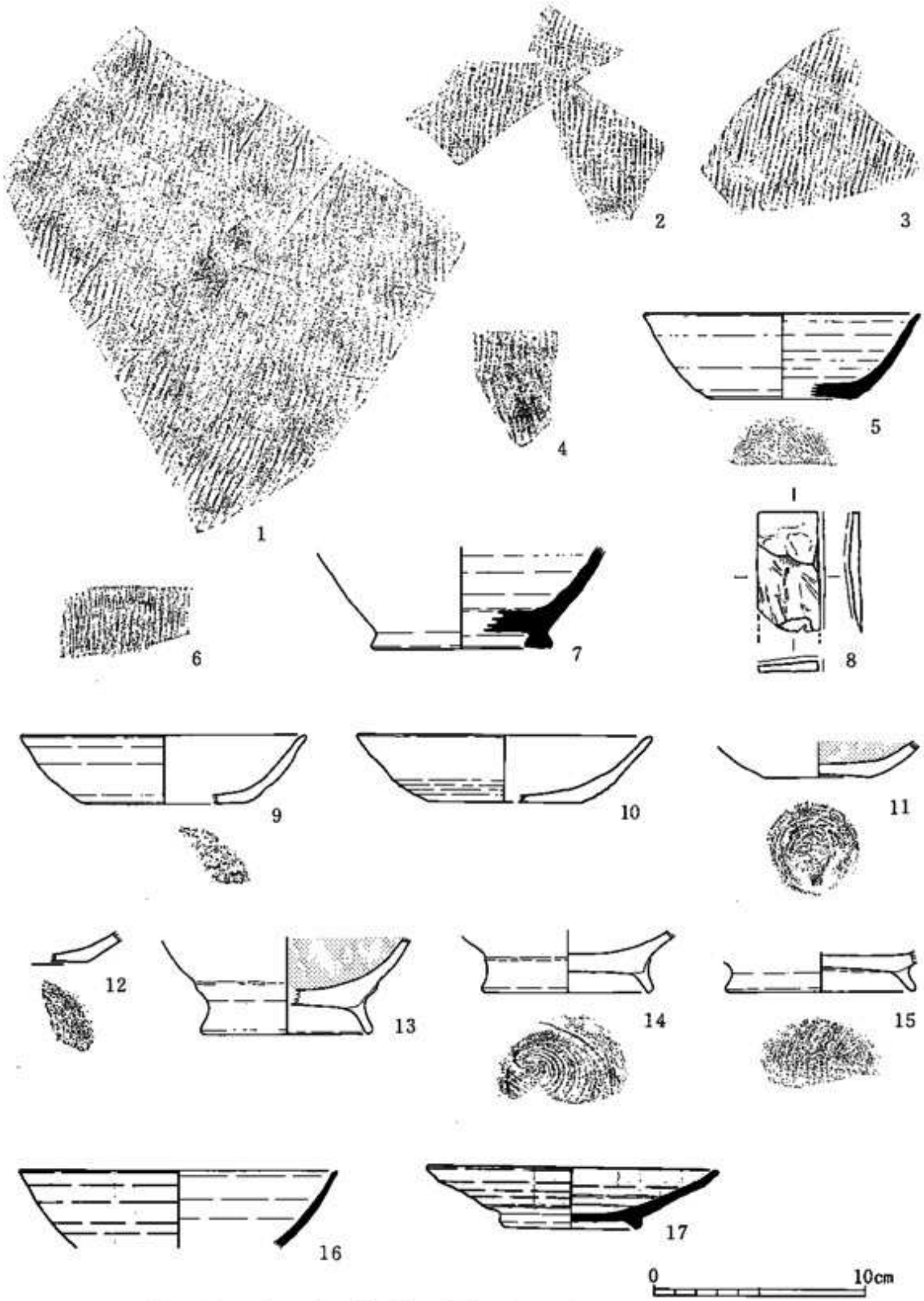

**第12図　44・45号住居址出土遺物**



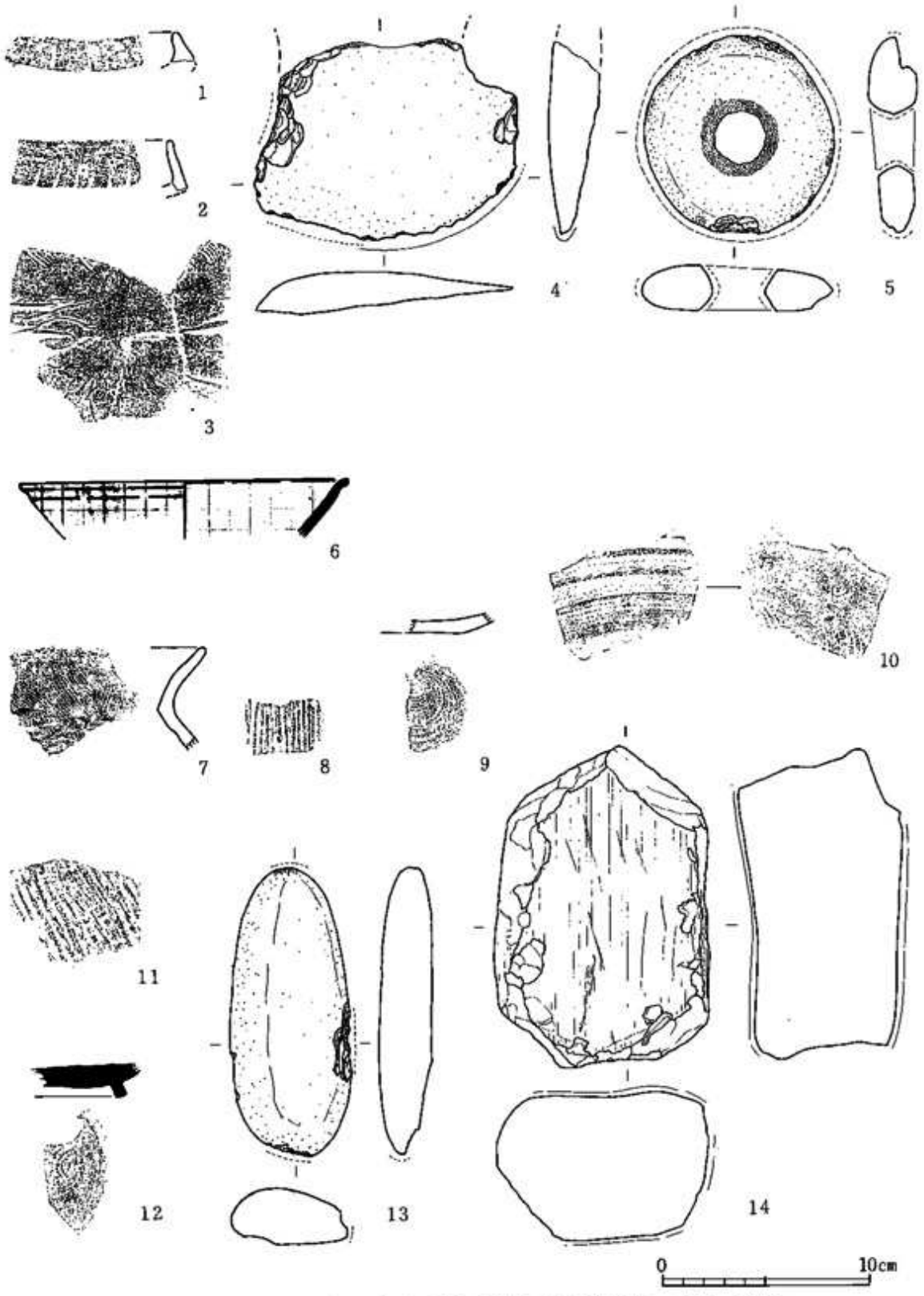

**第13図　44・45号住居址出土遺物**



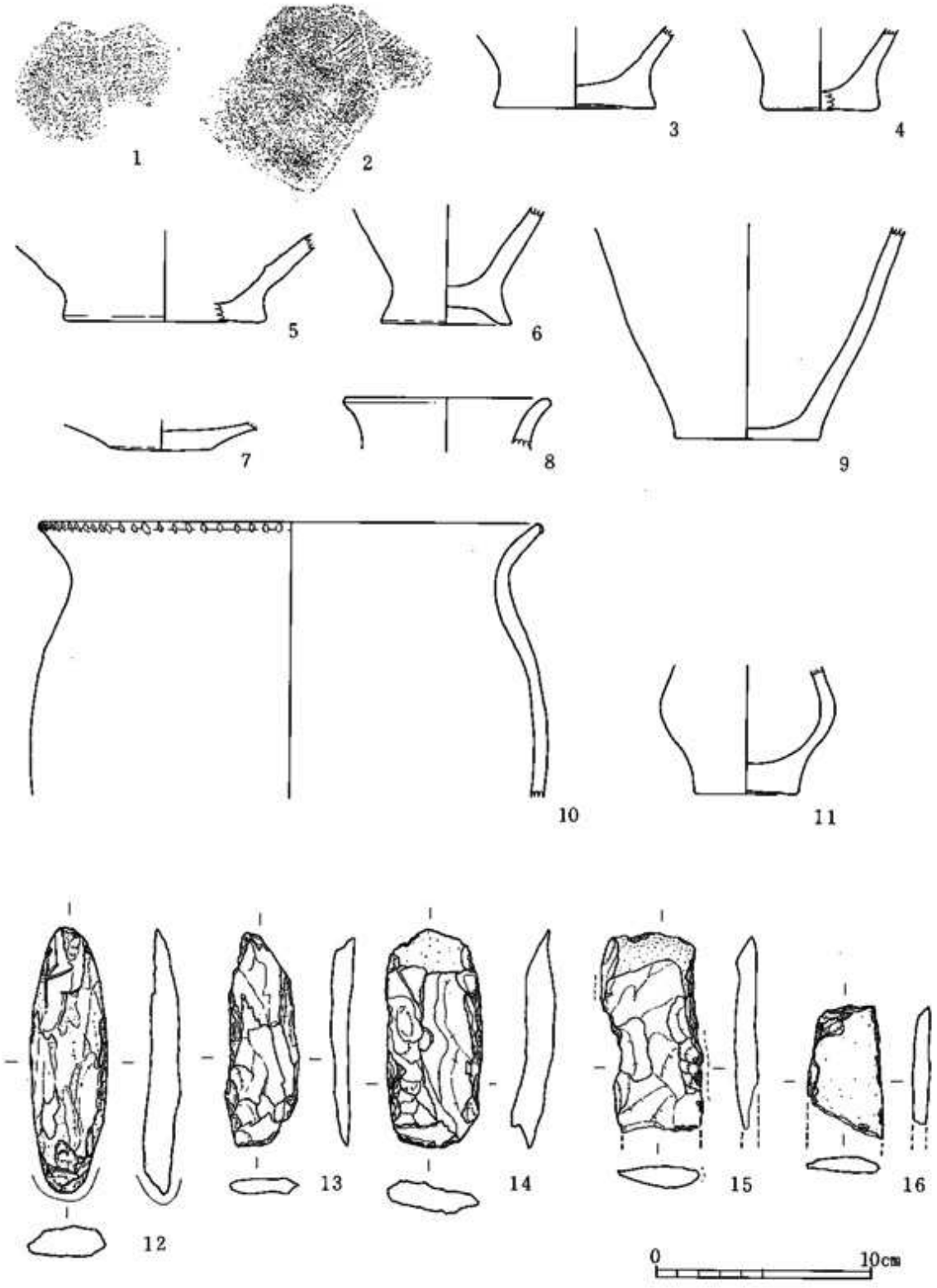

第14図　44・45(1・2)・48(3)・53(4～9)号住居址出土遺物



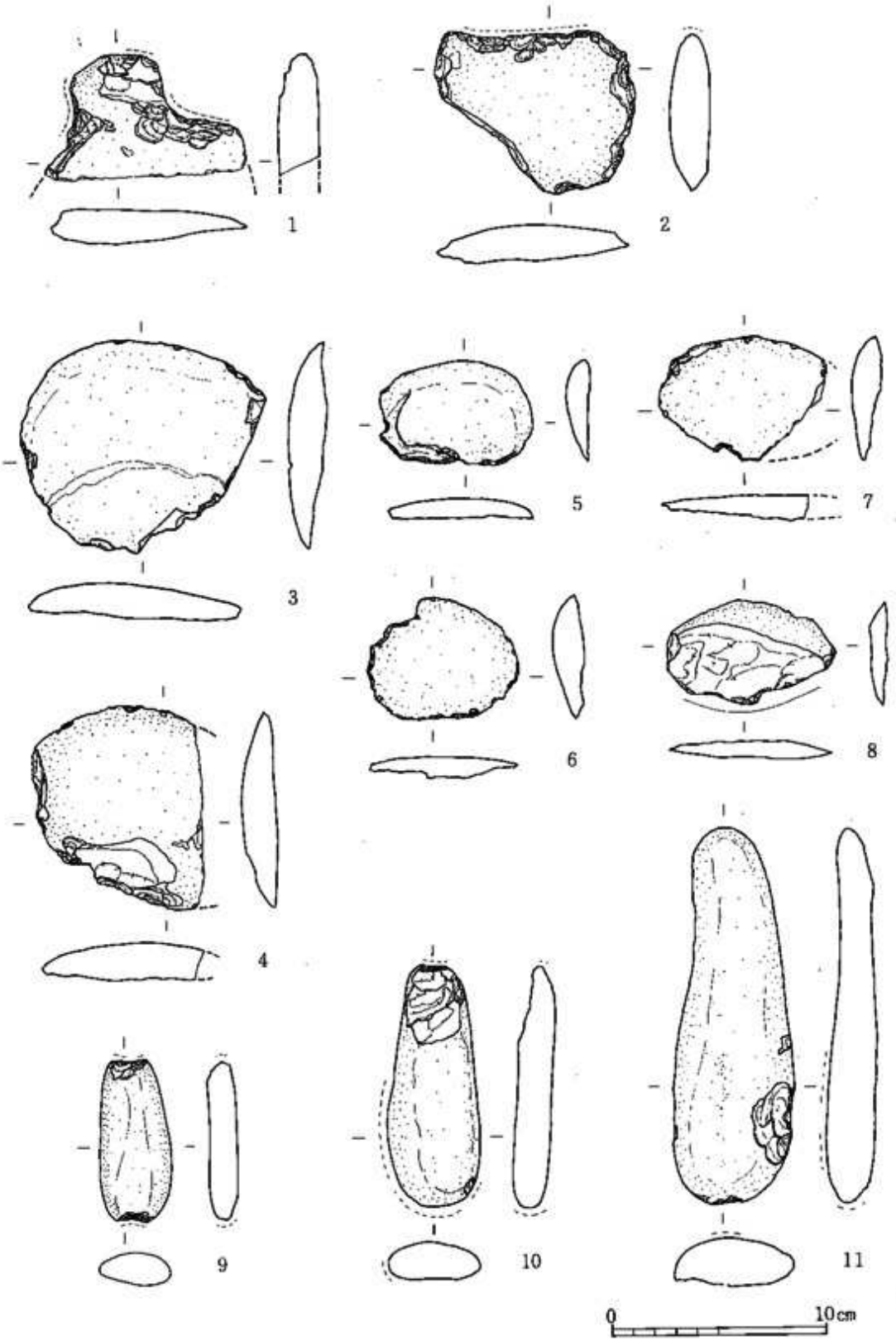

**第15図　53(1～5)・54(6・7)・57(8)・70(9～17)号住居址出土遺物**



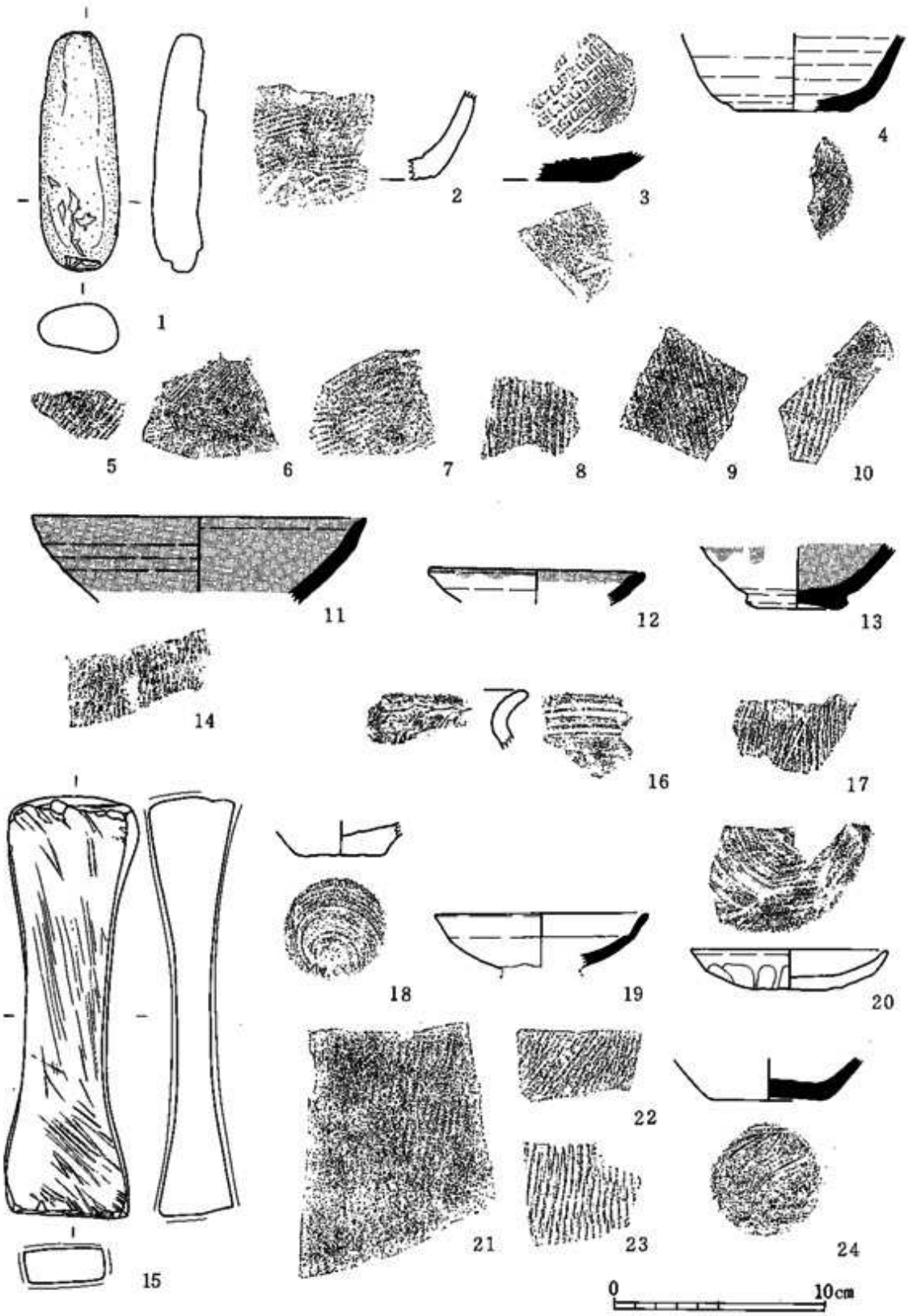

第16図　66号住居址(1～5)、掘立柱建物址5(6)、溝址(7～14)出土遺物



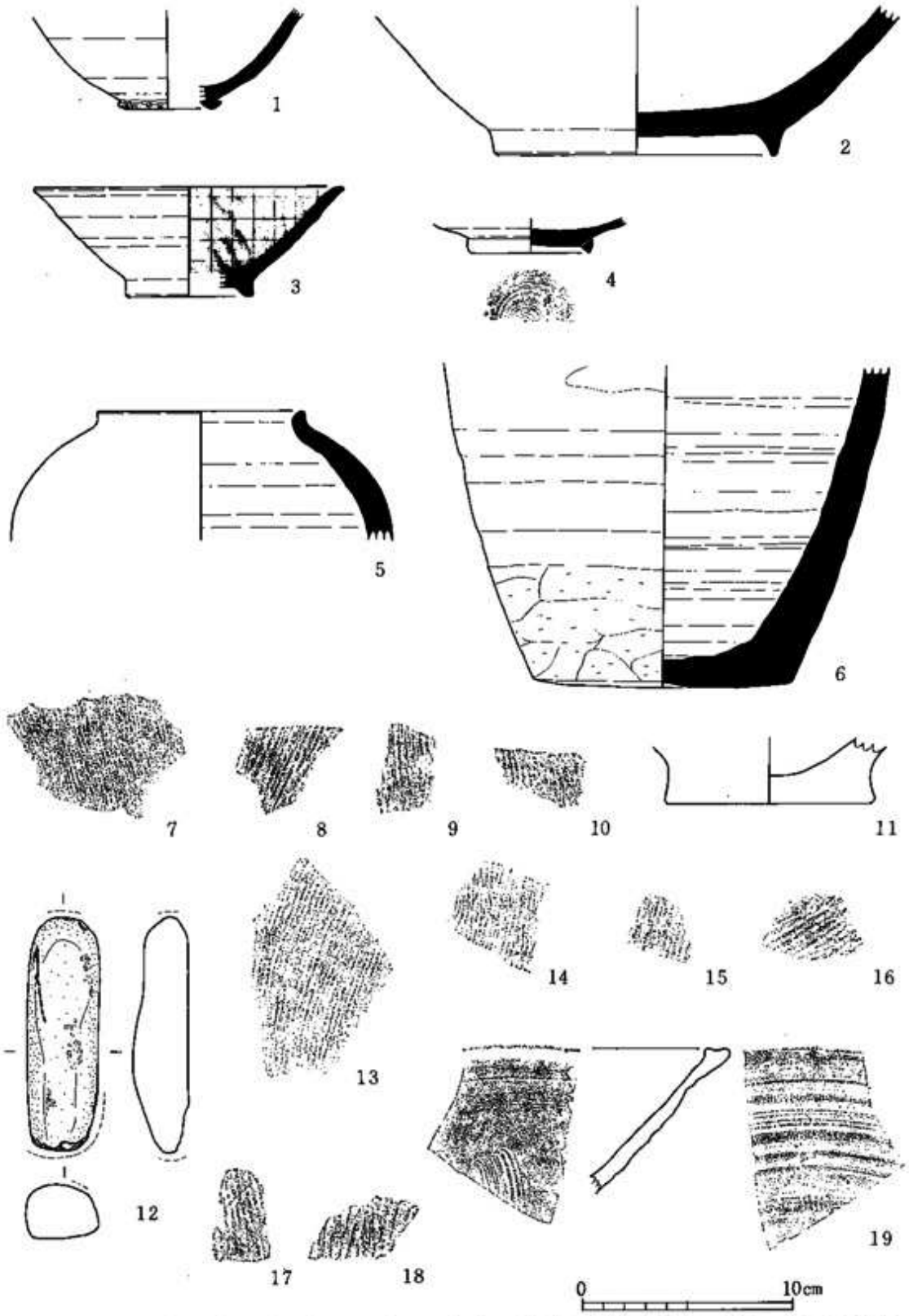

**第17図　溝址14出土遺物**



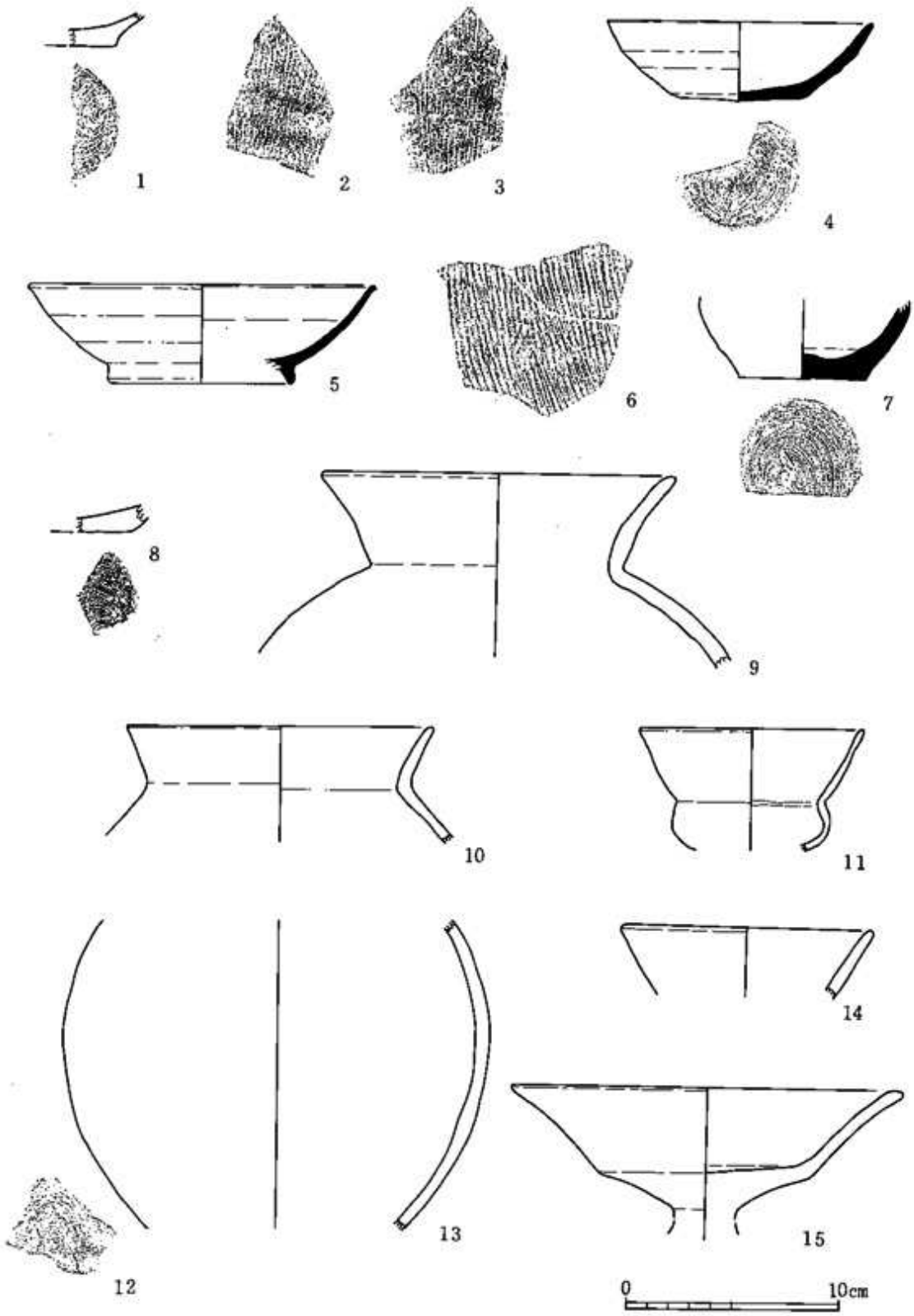

第18図　溝址14出土遺物



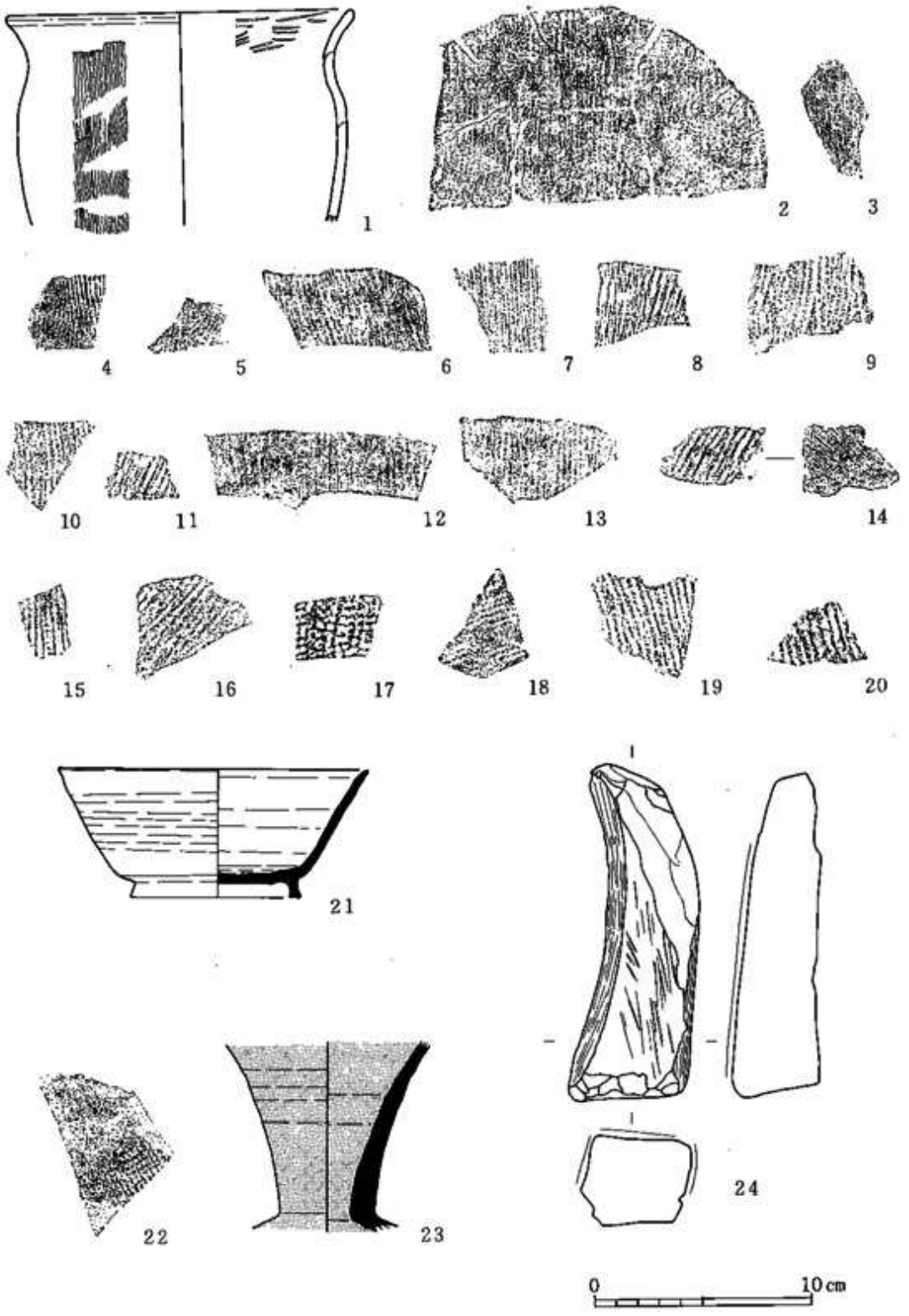

第19図　竪穴1(1)・4(2・3)・5(4)・6(5～7)・7(8～13)・8(14)・9(15)・10(16～23)出土遺物



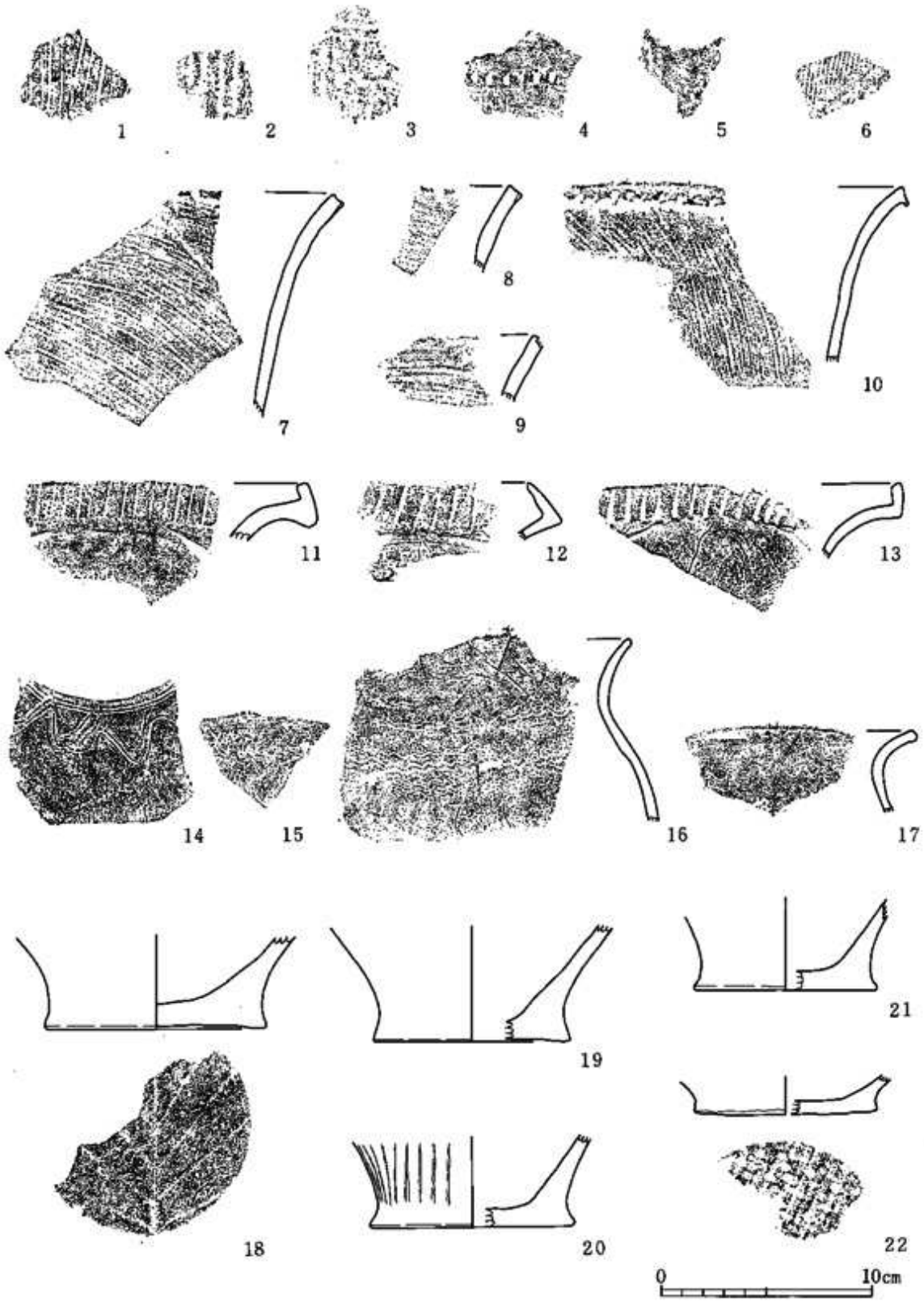

第20図　竪穴10(1～4)・11(5・6)・16・17(7～10)、集石2(11)・土坑34(12)・35(13～19)出土遺物



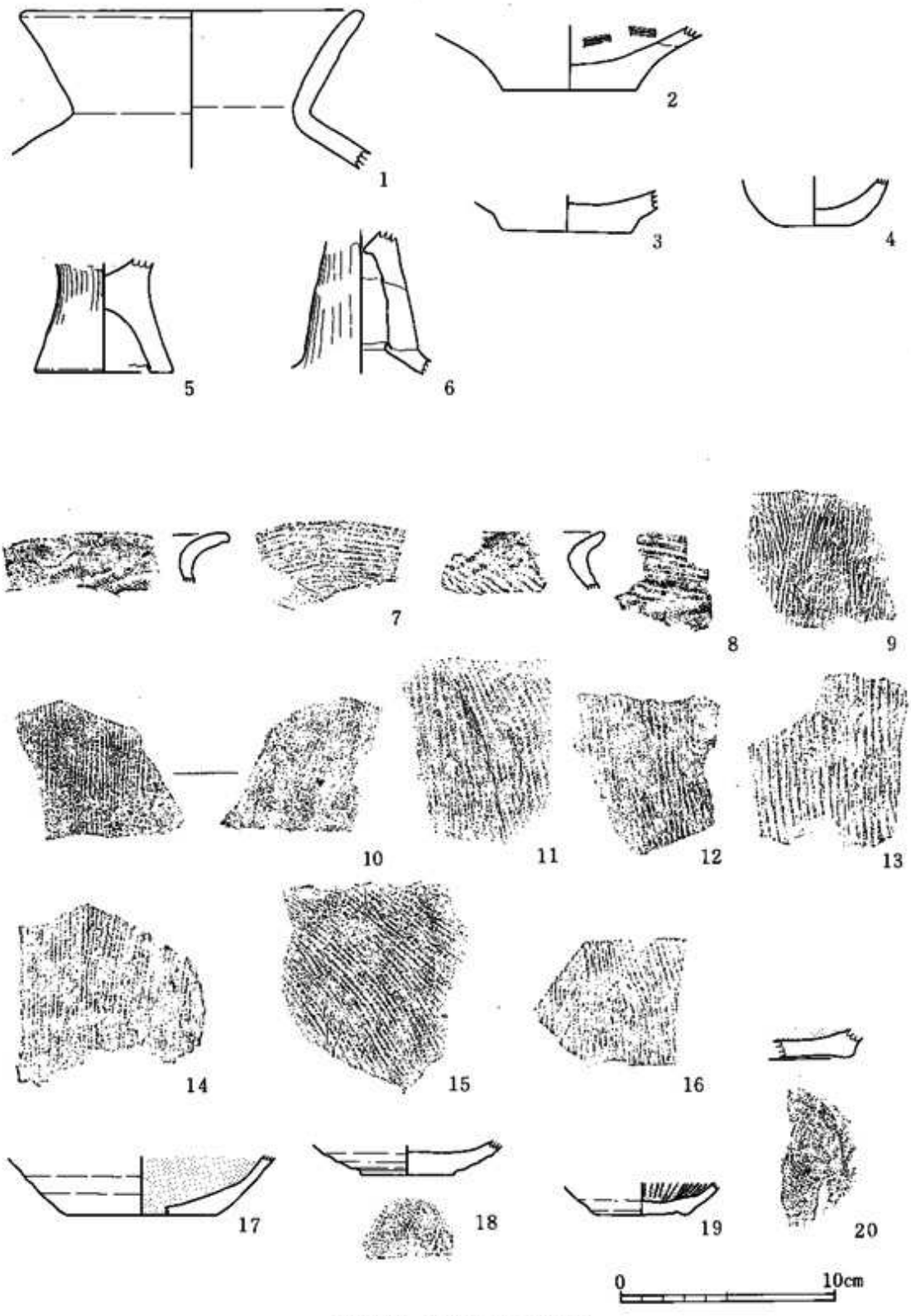

第21図　土坑46(1)・53(2～4)・56(5)・70(6)・71(7)・72(8)・79(9)・86(10・11)、
グリット柱穴址(12～15)出土遺物



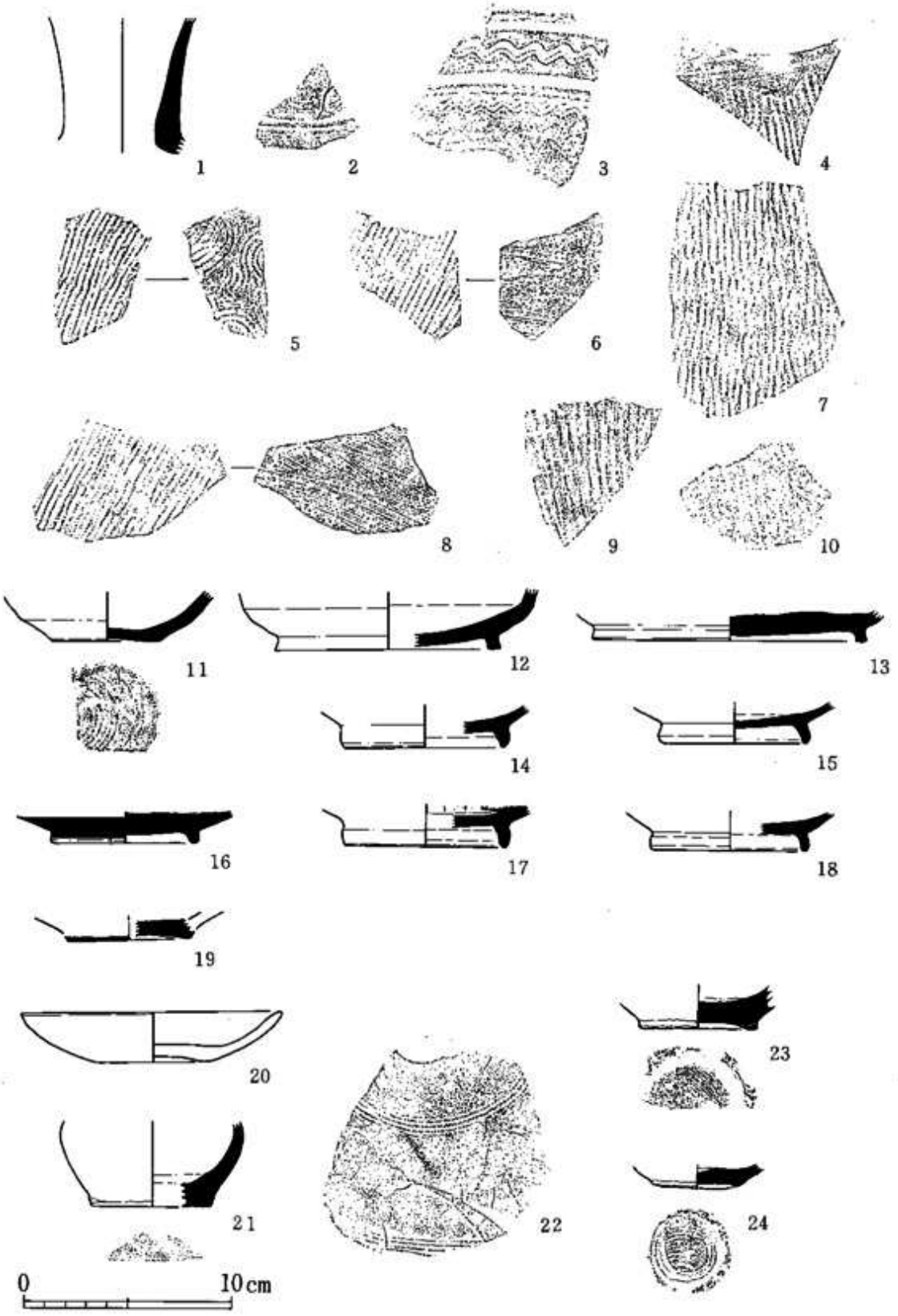

**第22図　グリット柱穴址出土遺物**



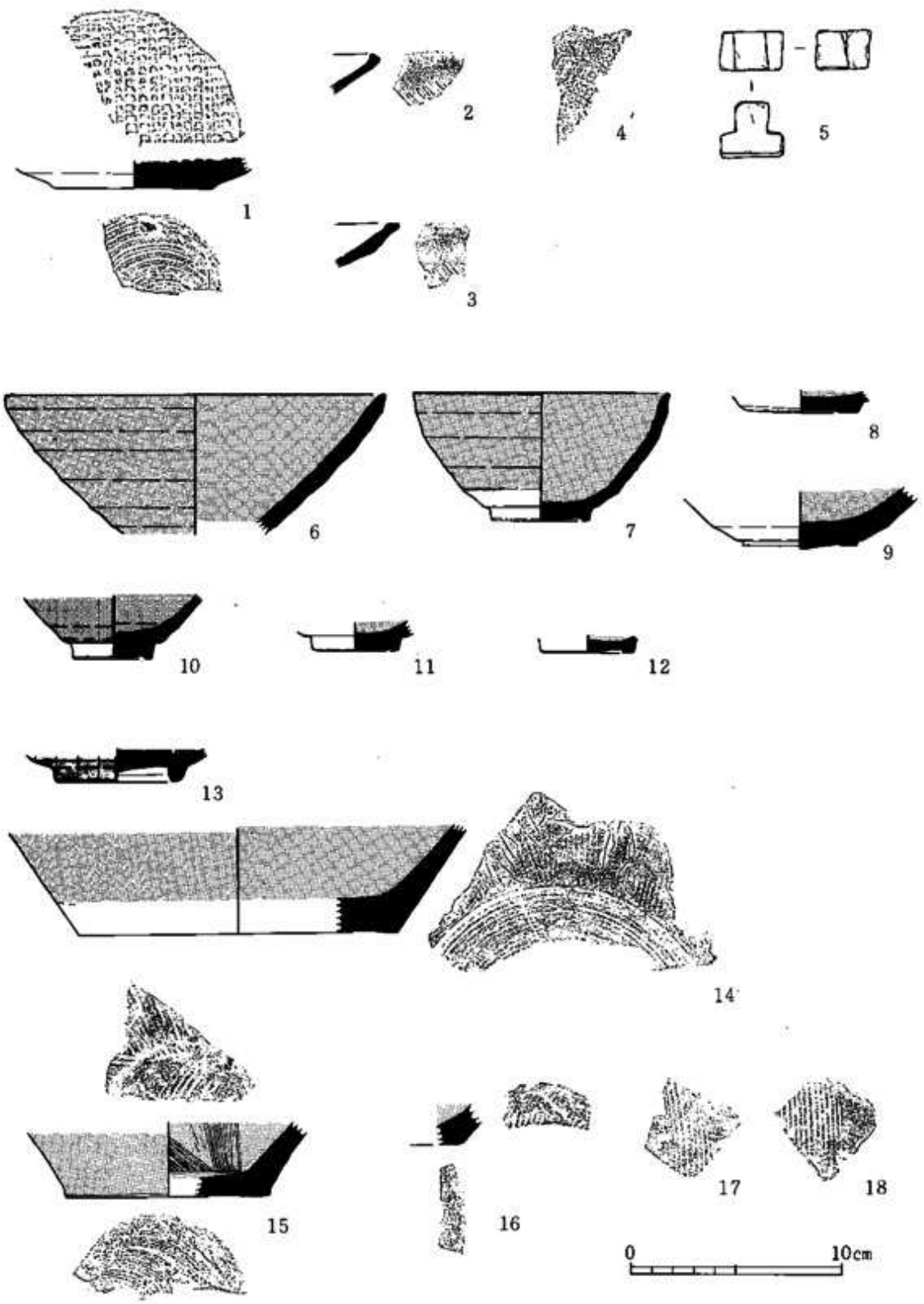

**第23図　遺構外出土遺物**



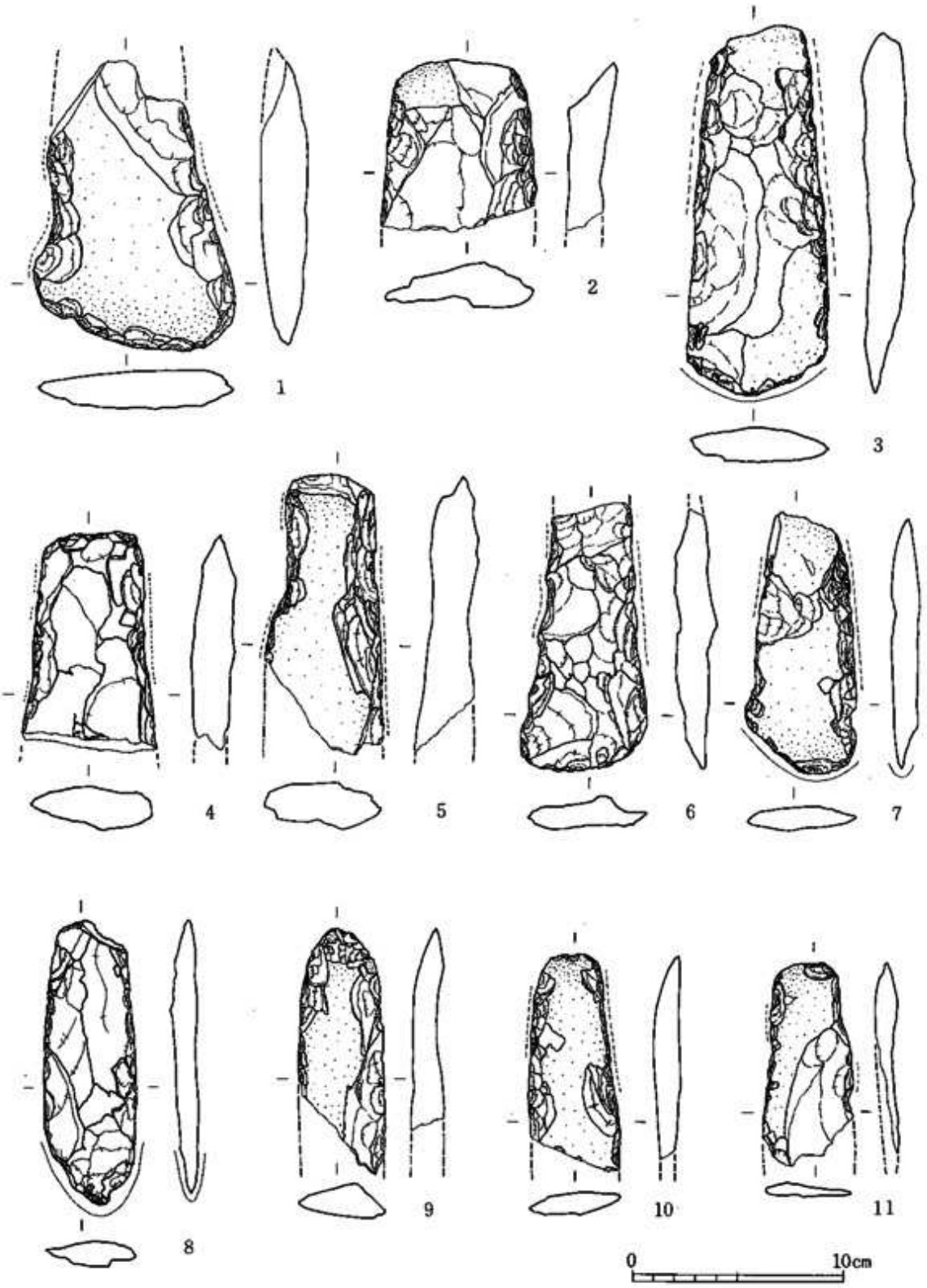

**第24図　遺構外出土遺物**



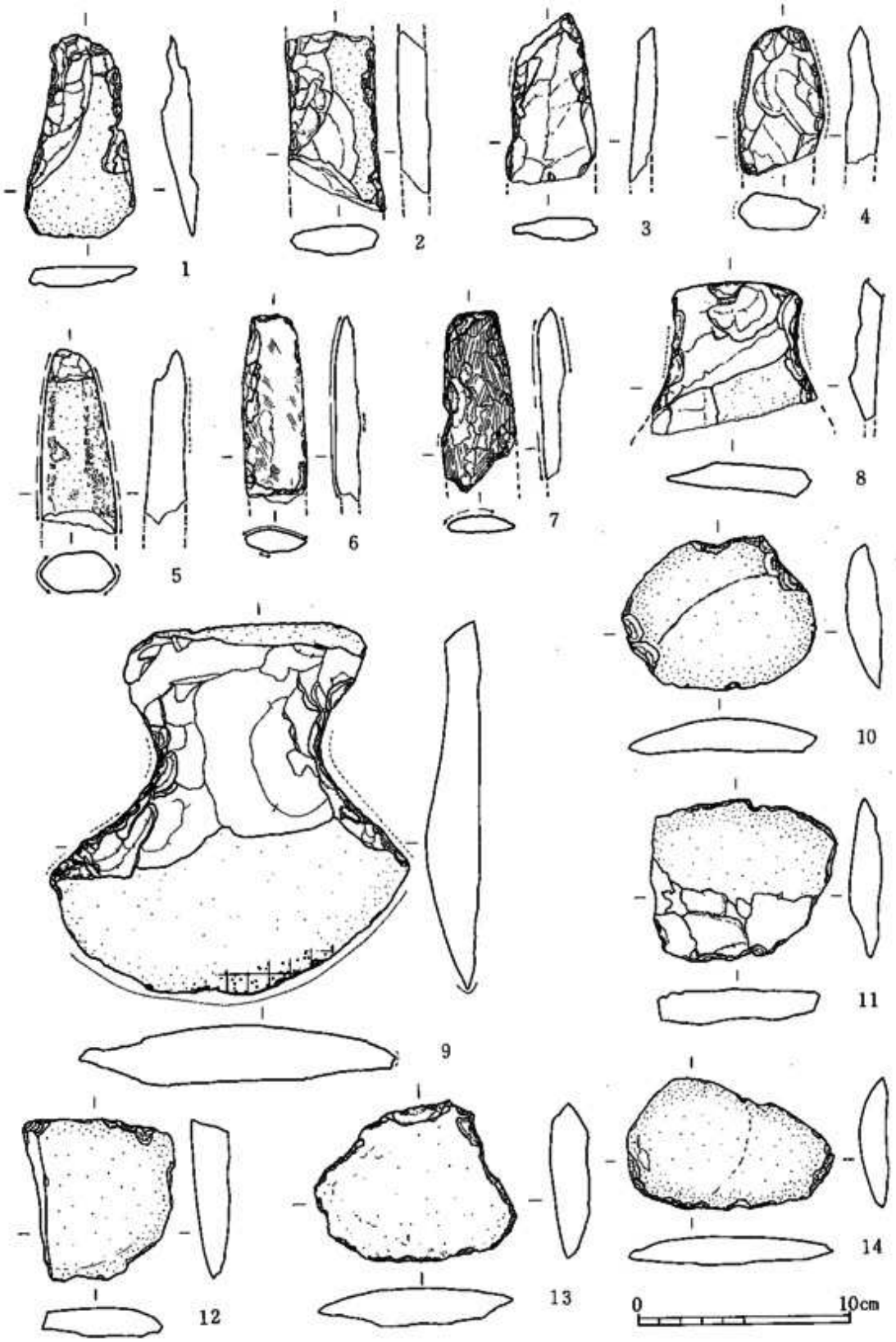

**第25図　遺構外出土遺物**



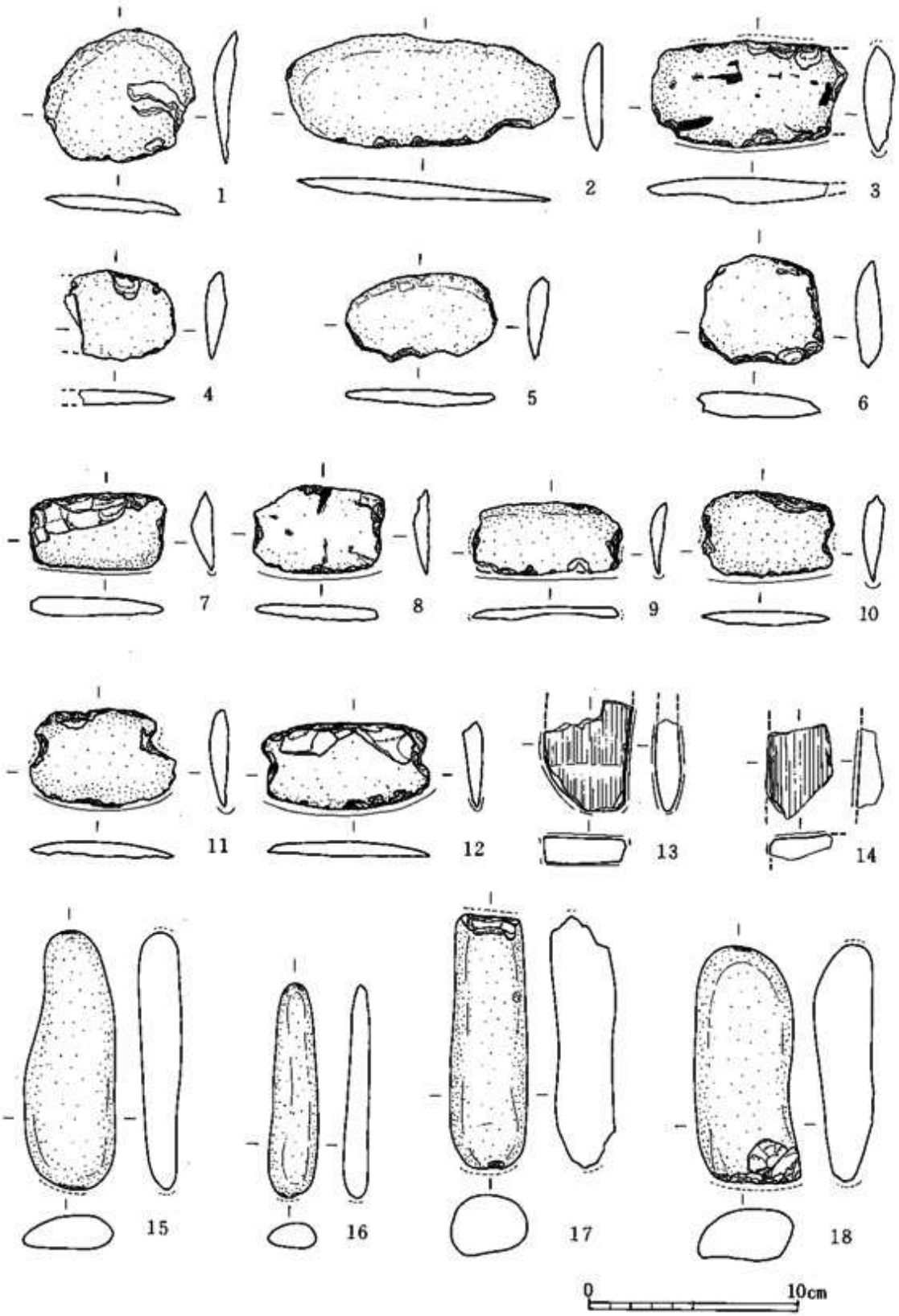

**第26図　遺構外出土遺物**



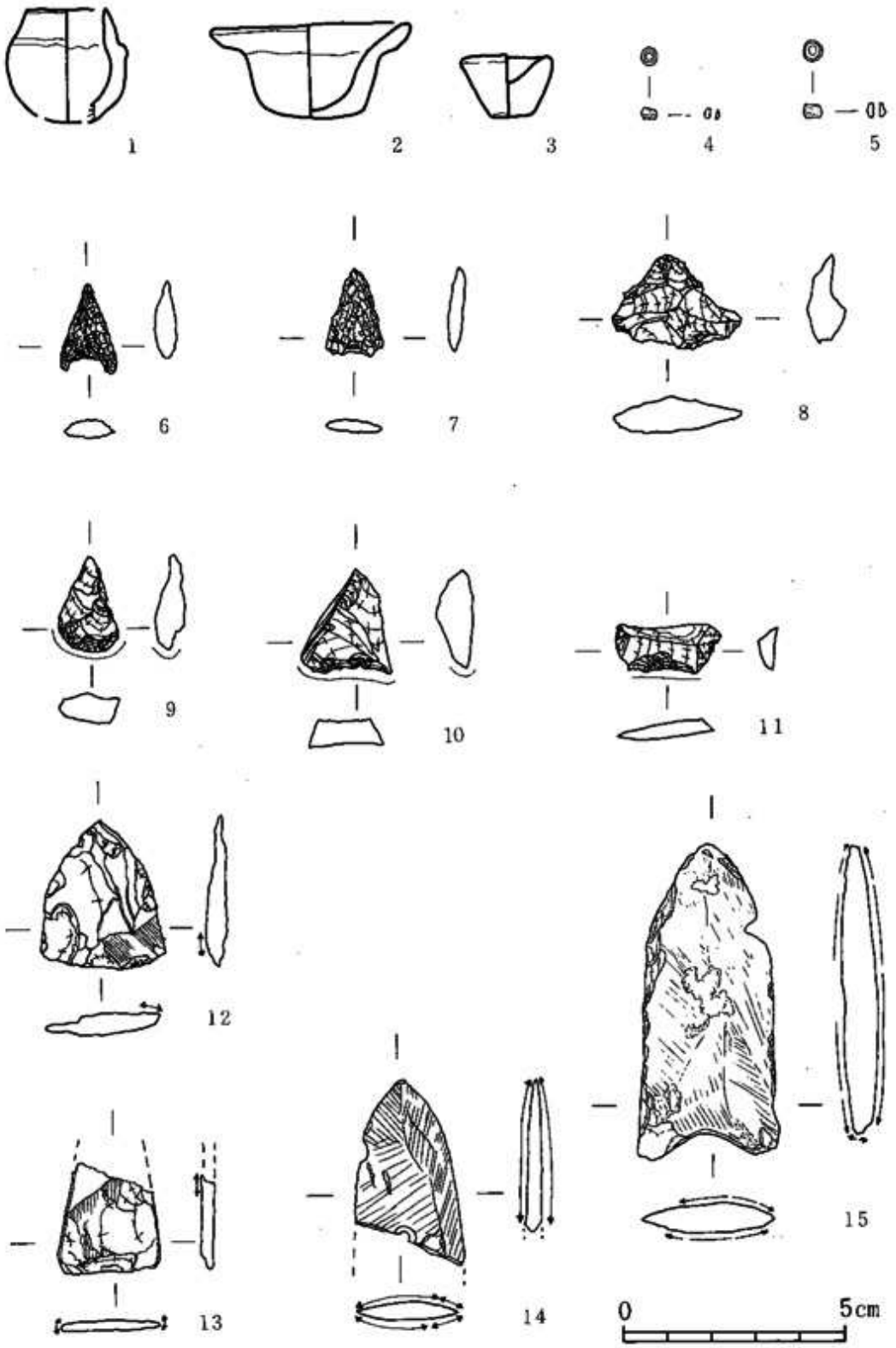

**第27図　遺構外出土石器**



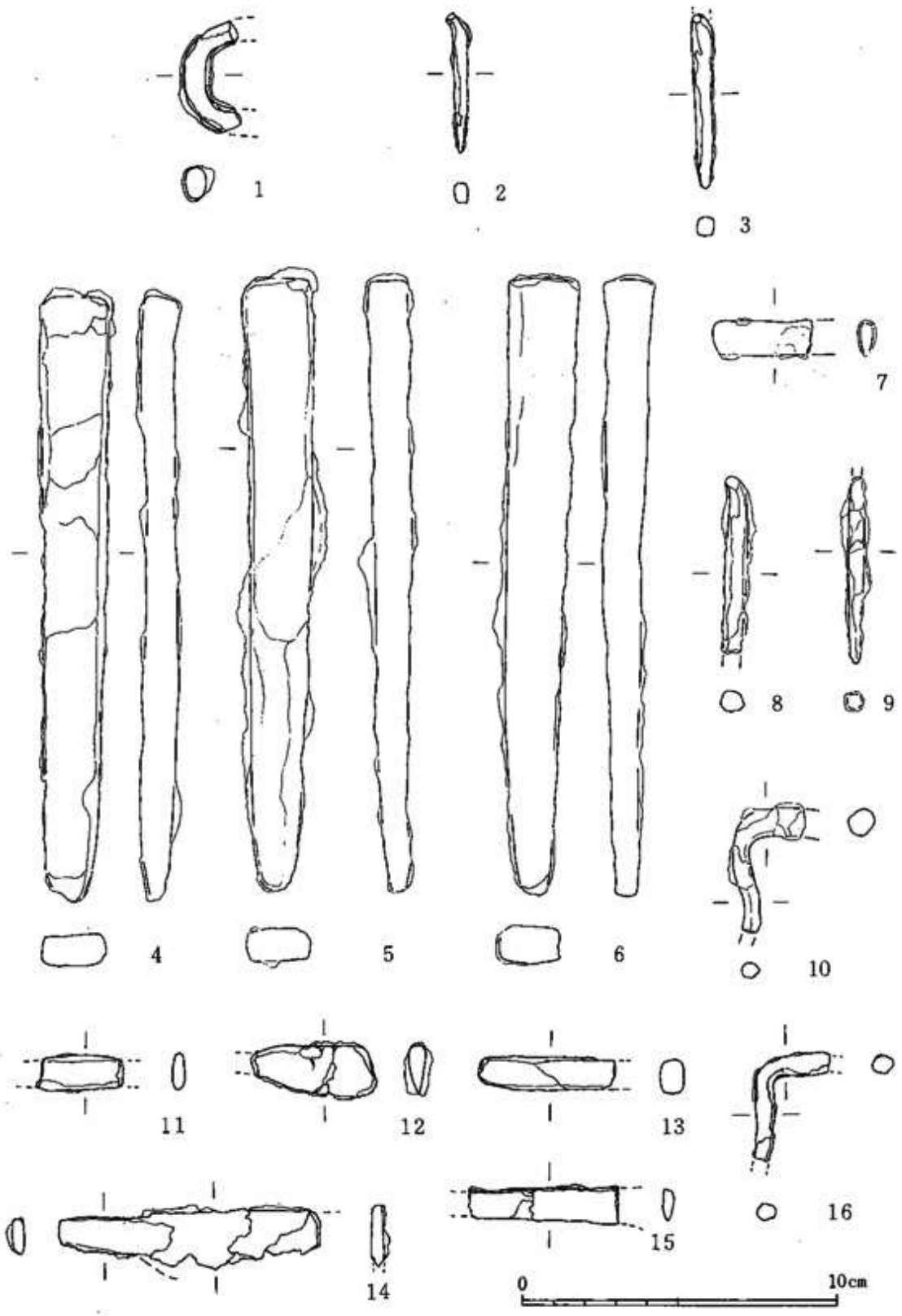

**第28図　遺構外出土石器**



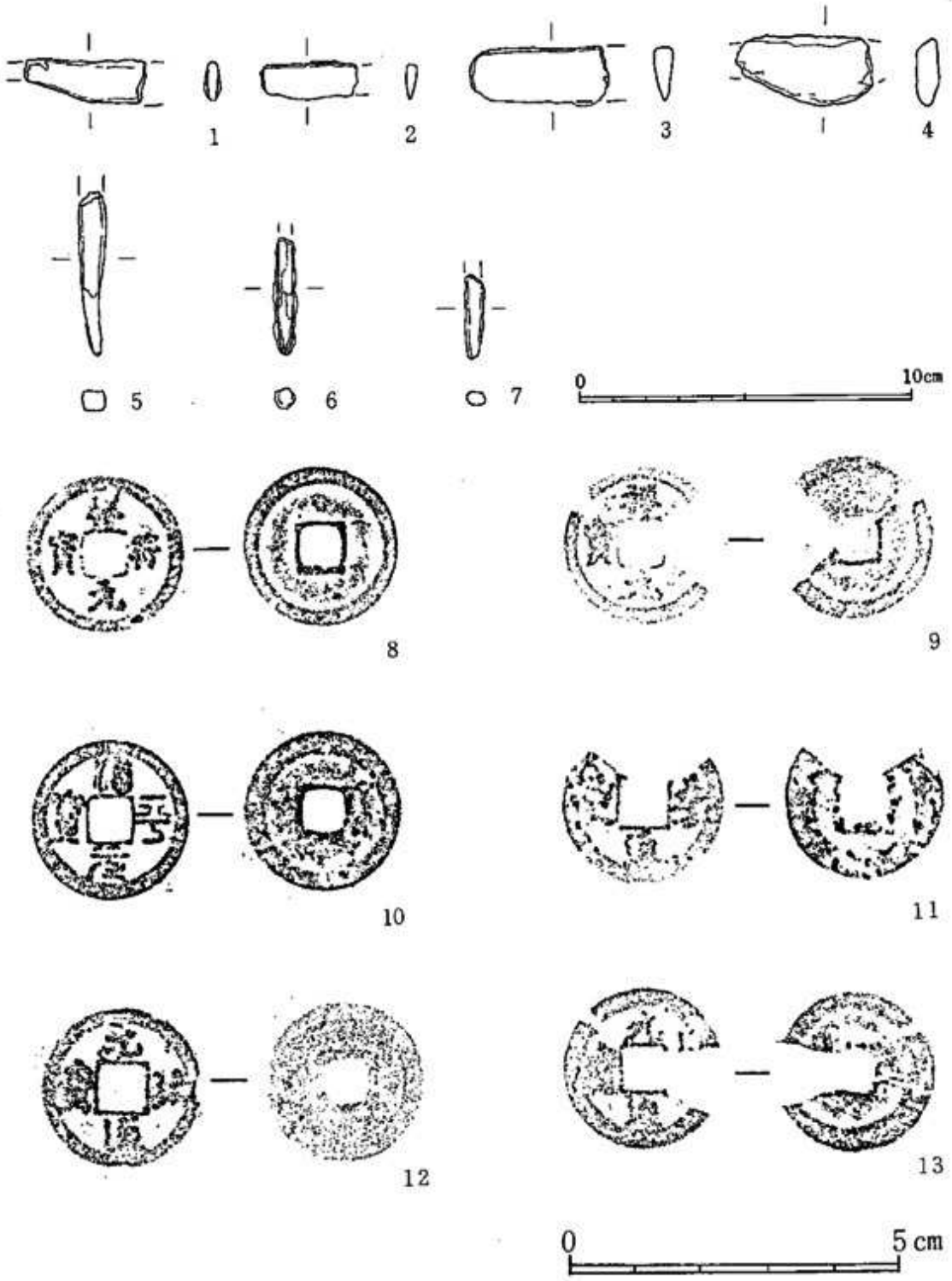

**第29図　遺構外出土石器**




第30図　67(1・14)・69(2)・72(4・5)・63(12・13)号住居址、遺構外(3・6～11・15)出土遺物




第31図　56号住居址(1)、溝址7(2・3)、竪穴10(4～10)・11(11・12)、
土坑36(13)・40(14)・49((15)、グリット柱穴址出土鉄器(16)

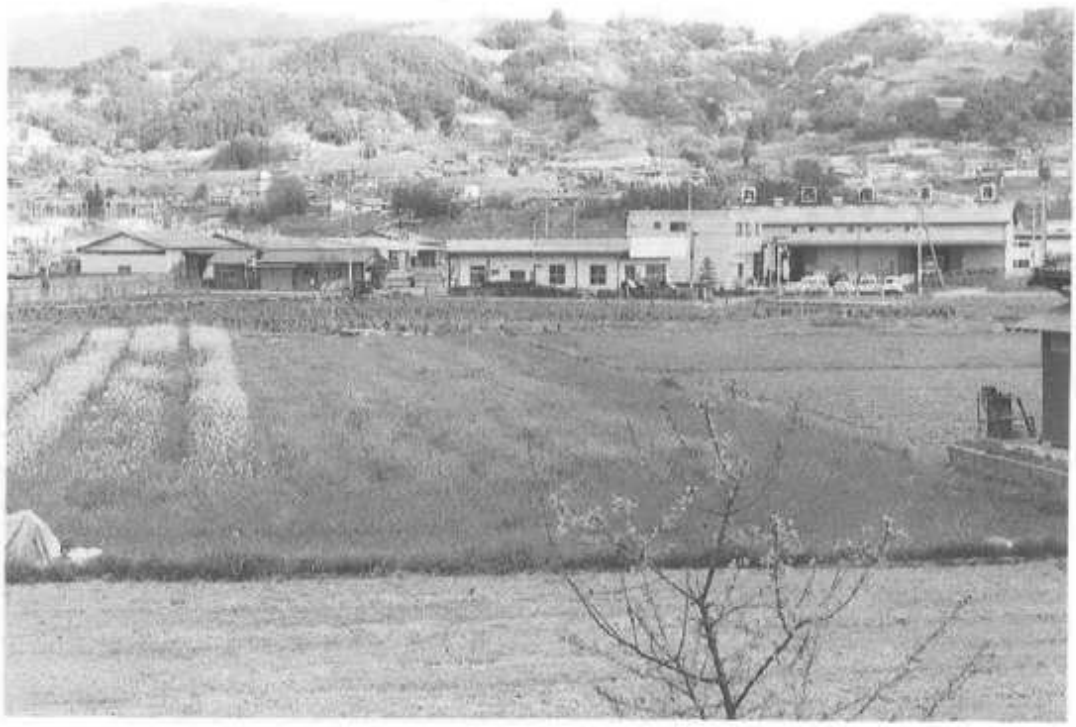



**第32図　遺構外出土鉄器、銭**

# 写真図版

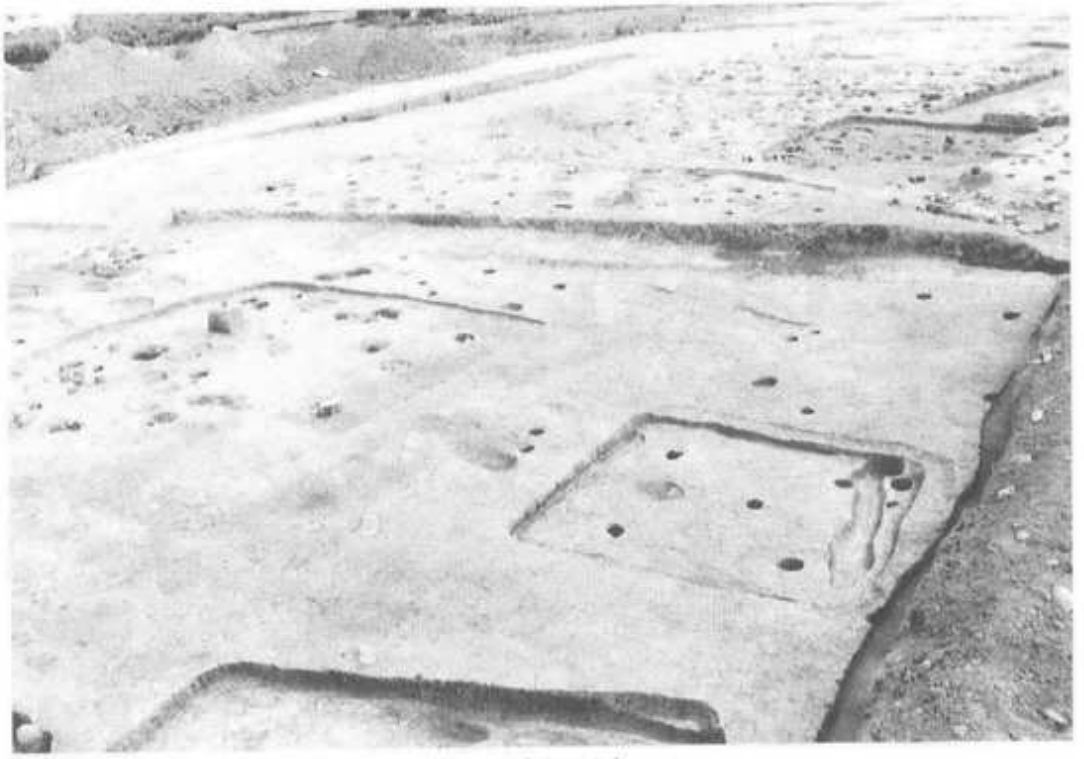
図版 1

調査地調査前(北から)



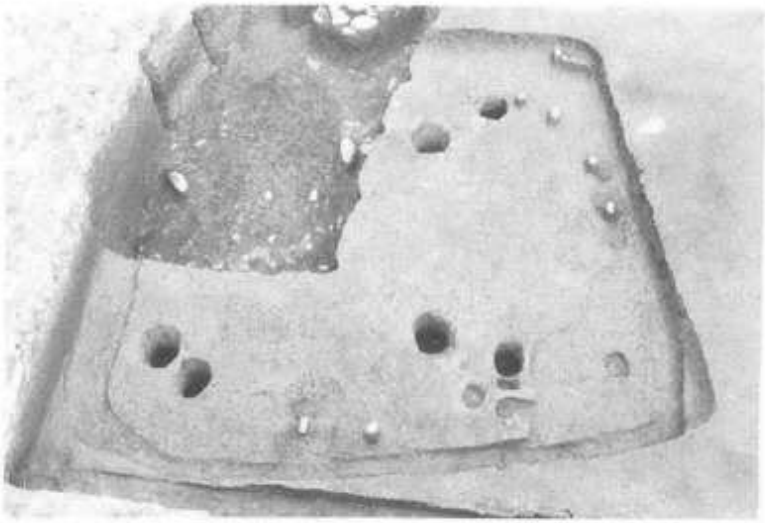
同上(西から)

調査地全景(南から)

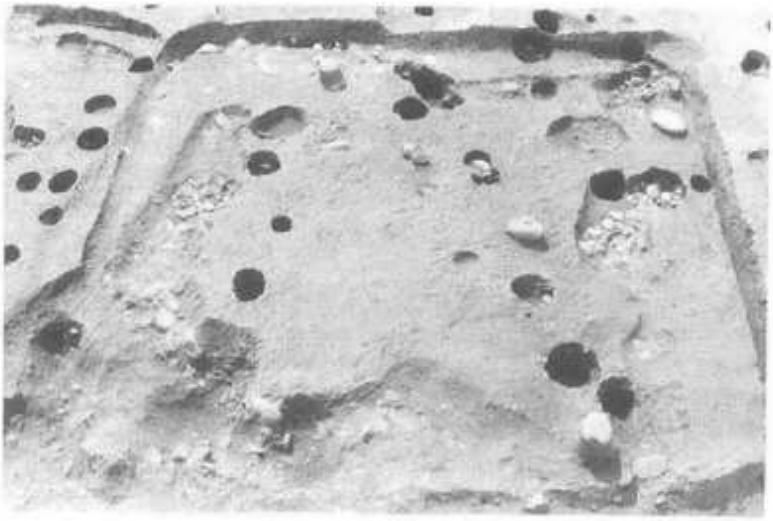


同上(北から)

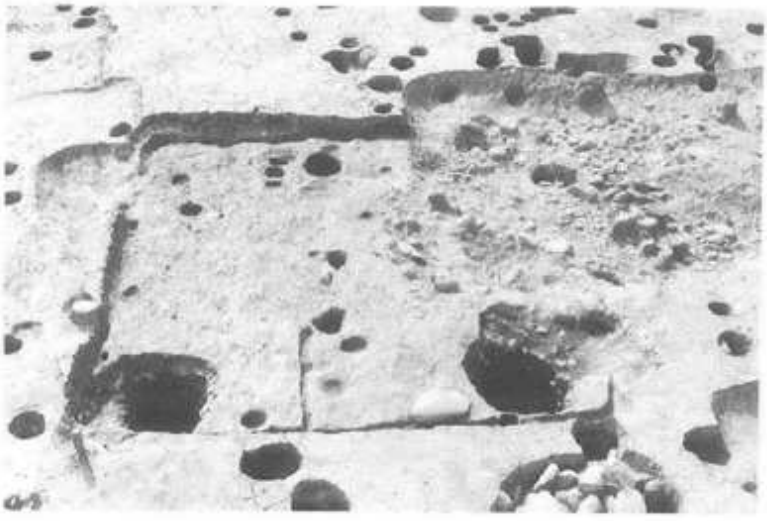
図版 3



63号住居址



55号住居址

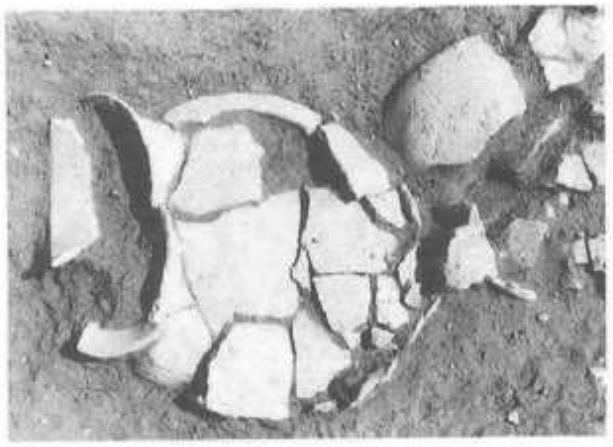


59号住居址

59号住居址
遺物出土状態

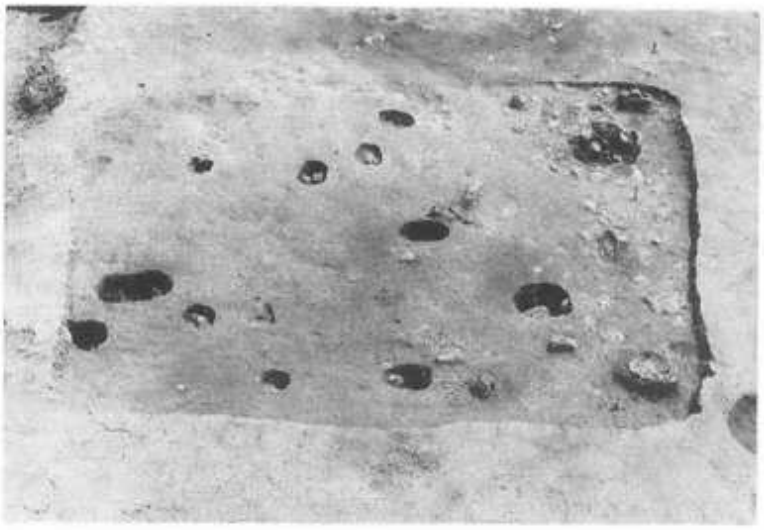
同上

同上

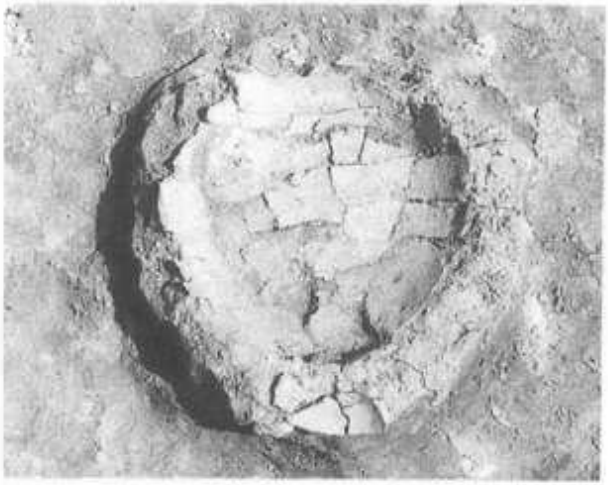


同上

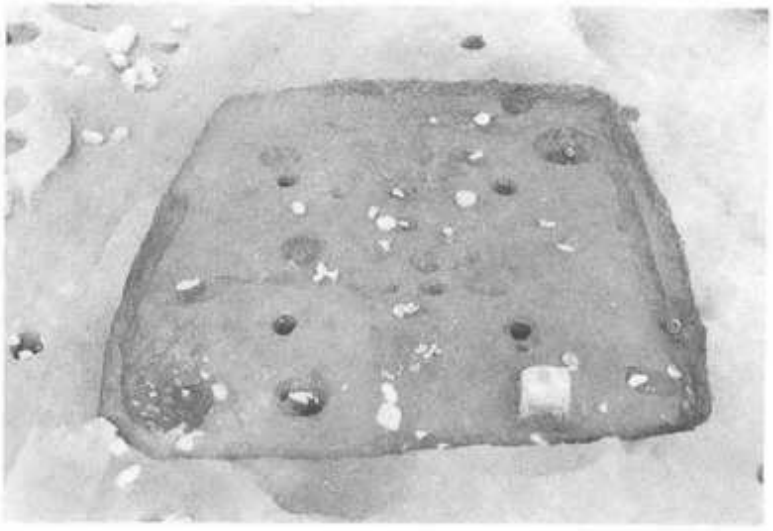
図版 5



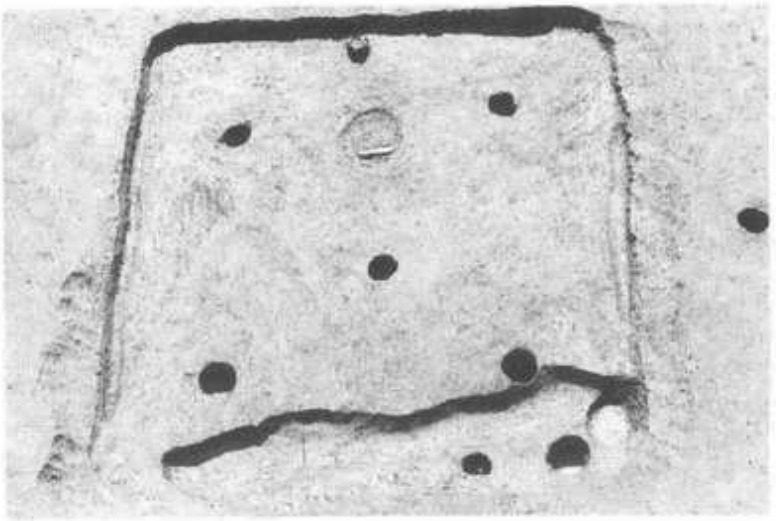
60号住居址



同上遺物出土状態

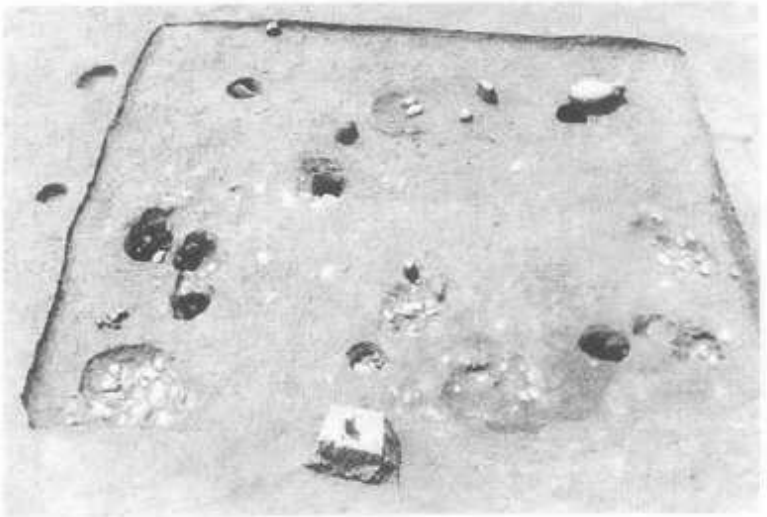


61号住居址



62号住居址

同上 炉址



64号住居址

図版 7

65号住居址

同上 炉址

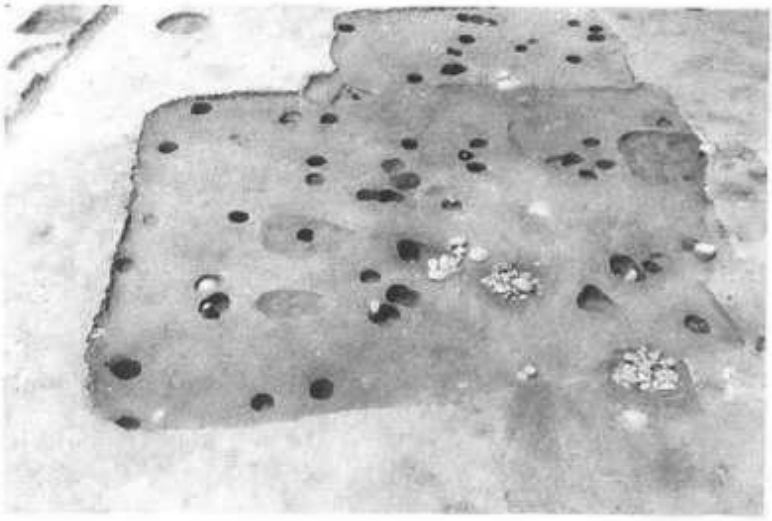
68号住居址
編物石出土状態

72号住居址

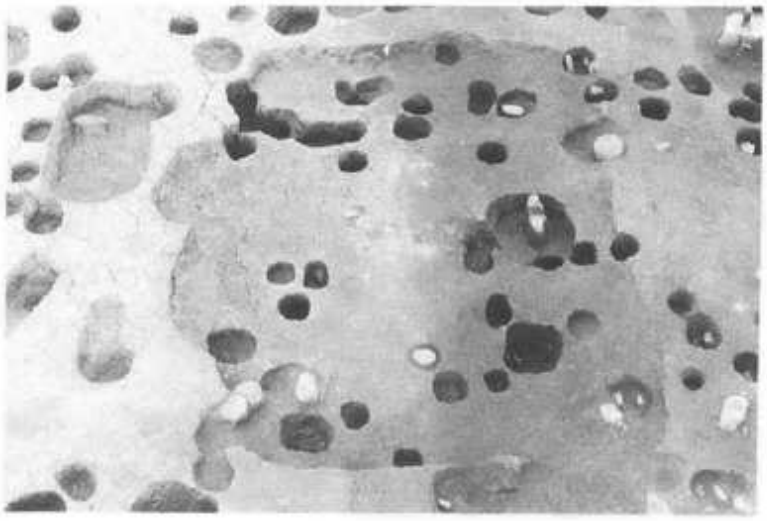
同上 炉址

44・45号住居址

図版 9



52・53・54号住居址



56号住居址

64・66・68・67号住居址
重複状態

溝址３・４

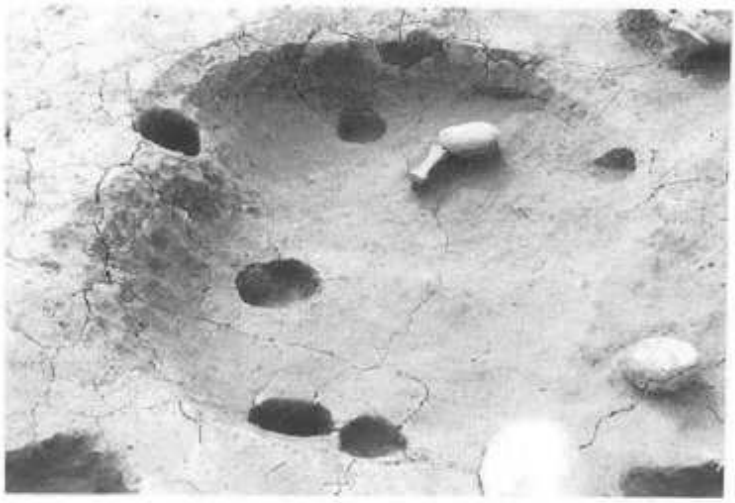
竪穴10

竪穴４・21，土坑36

竪穴11，土坑55

竪穴11遺物出土状態

図版11



竪穴9

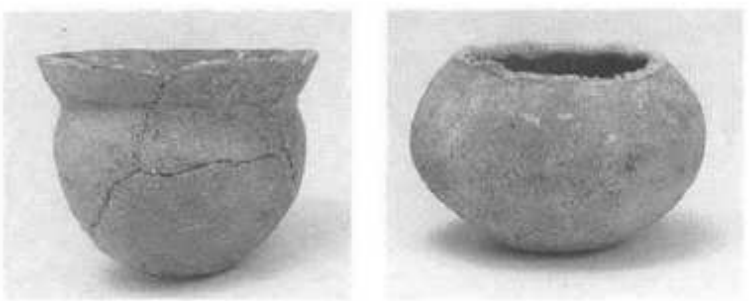
集石1

集石2

土坑77・42・43・41・45
（左隅奥から）

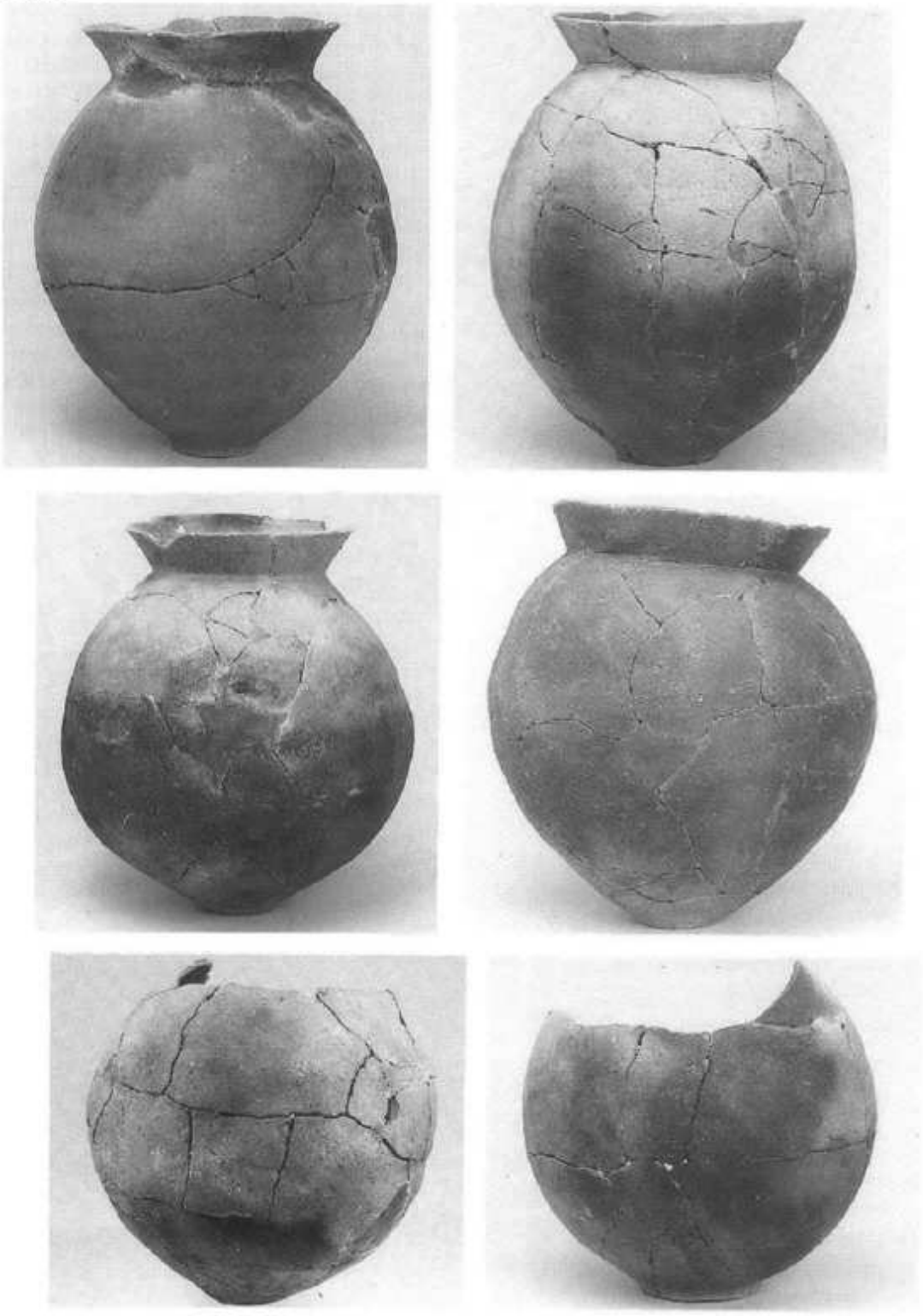
63号住居址出土石器

67号住居址出土土器・石器



55号住居址出土甕・壺

図版13



59号住居址出土甕

59号住居址出土甕・壺

同上
小形丸底土器

同
高坏

図版15

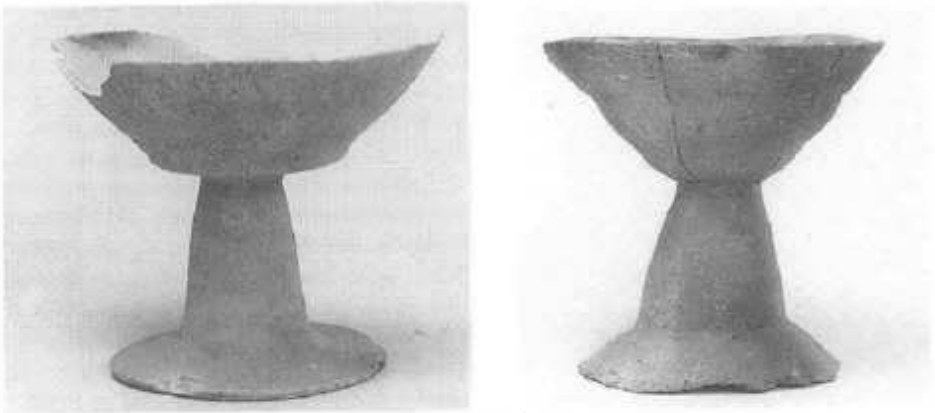
60号住居址出土 甕

同上 小形丸底土器

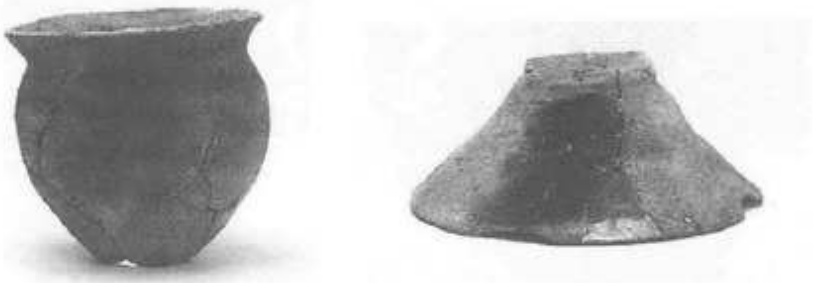
同 高坏

同 砥石

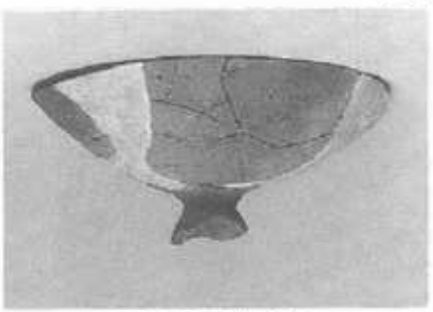
61号住居址 甕・小形丸底土器・鉢



同上 高坏



62号住居址 甕・高坏



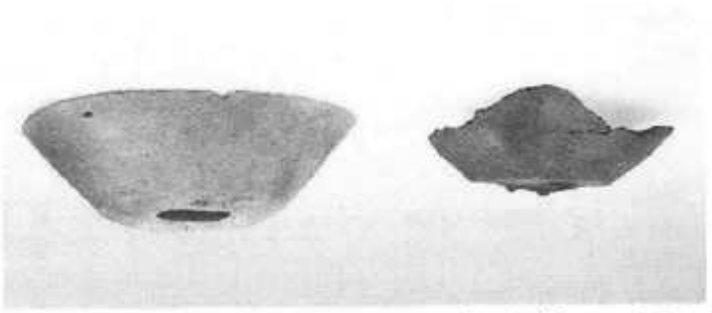
64号住居址 高坏

65号住居址 高坏

図版17

68号住居址出土高坏

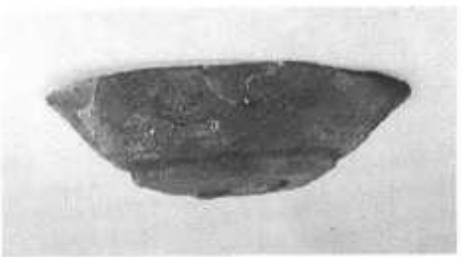
69号住居址出土甕



69号住居址出土高坏・てづくね土器

72号住居址出土甕

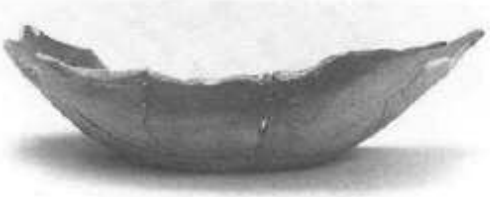
同上
甕・小形丸底土器



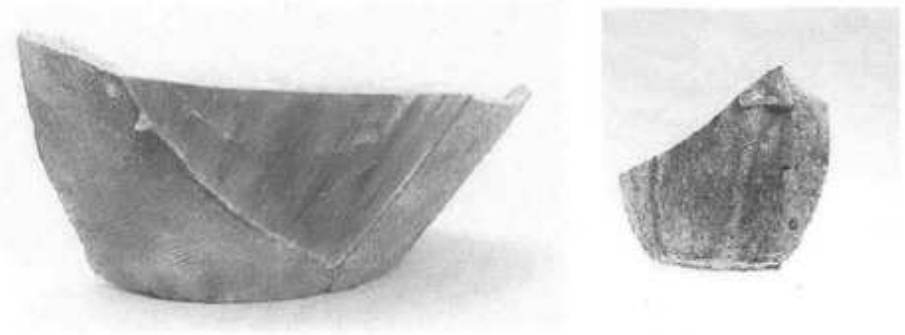
同 高坏

図版19

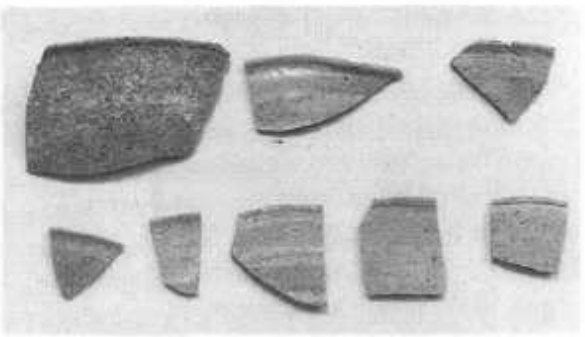
44・45号住居址出土甕



同上 坏



44・45号住居址出土須恵器甕・壺

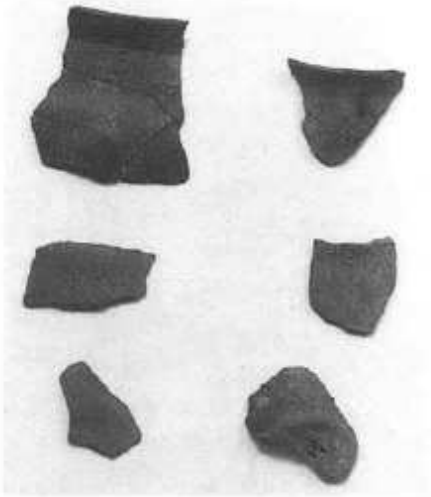


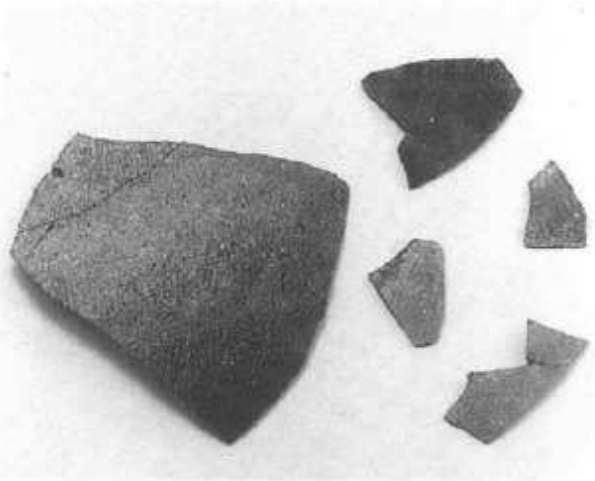
同上 坏

同 灰釉陶器

同 砥石

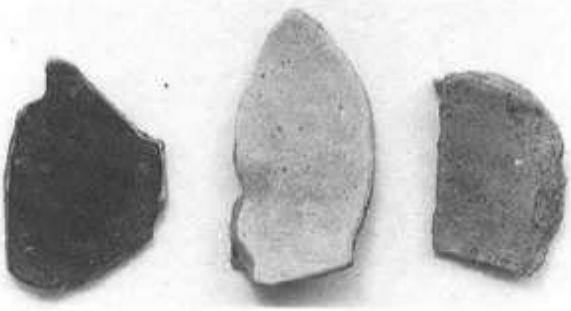
図版21





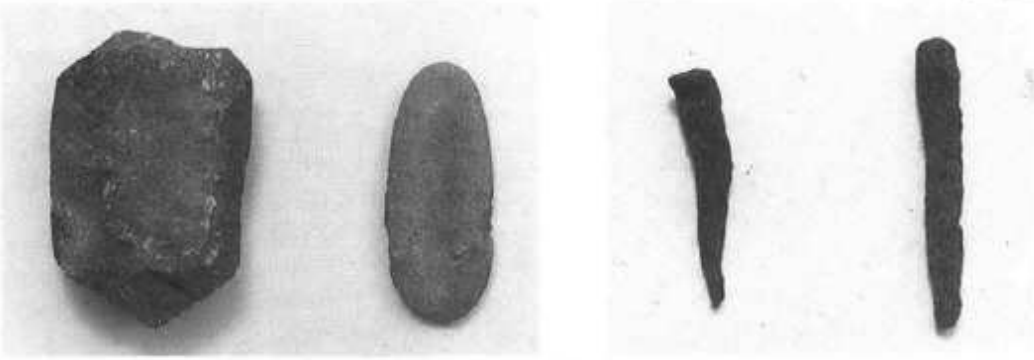
53号住居址出土甕

53号住居址出土須恵器甕・坏



70号住居址出土坏

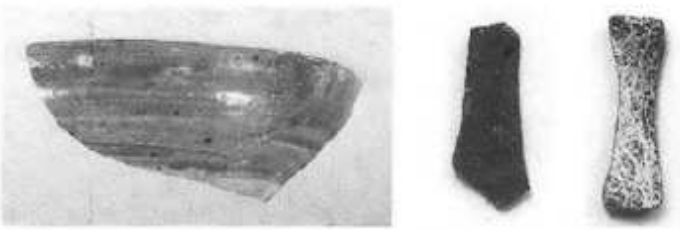
70号住居址出土灰釉陶器



溝址７出土 石器・鉄器

溝址14出土 甕・壺

竪穴５出土 坏



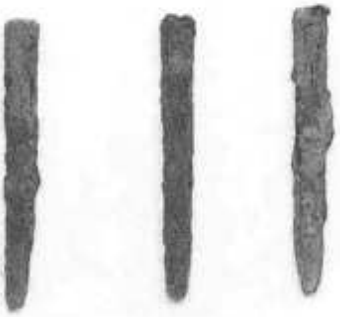
竪穴７出土 天目茶碗・常滑・砥石

図版23

竪穴10出土 鉢

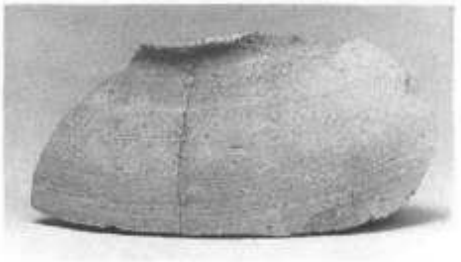
竪穴10出土 かわらけ

竪穴10出土灰釉陶器



竪穴10出土 鉄器

竪穴10出土 鉄器

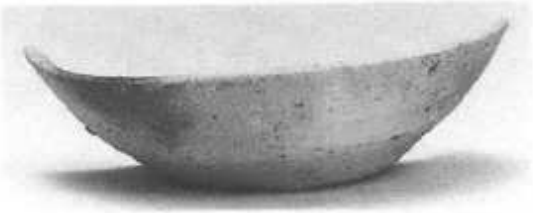


竪穴11出土 壺・鉢

竪穴11出土鉄器

土坑40出土鉄器

土坑49出土鉄器

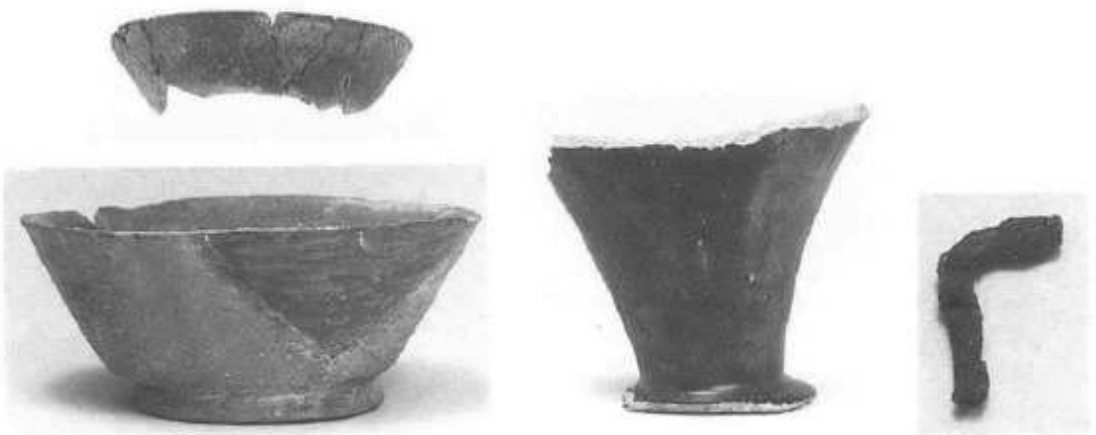


土坑53出土坏・鉄器

土坑71出土土器

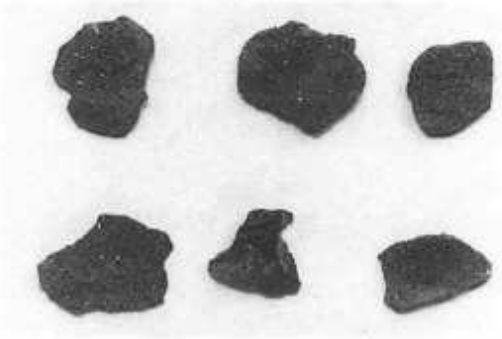
土坑79出土甕

土坑86出土甕・
小形丸底土器



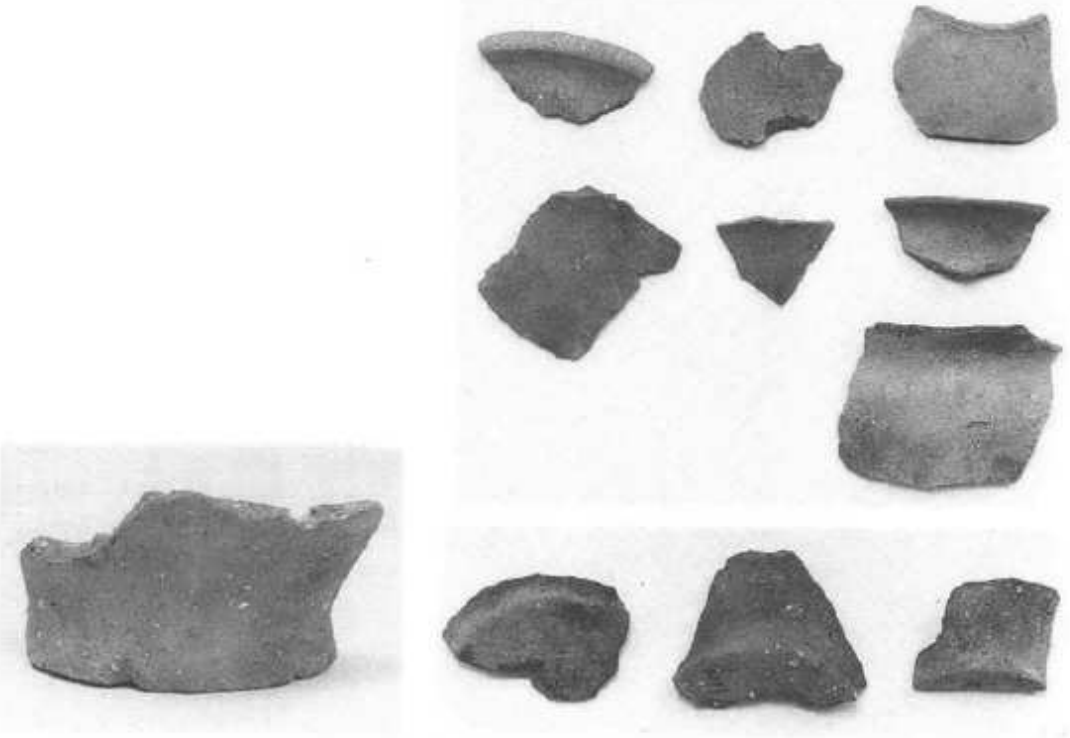
穴址出土遺物(甕・坏・天目壺・鉄器)

図版25

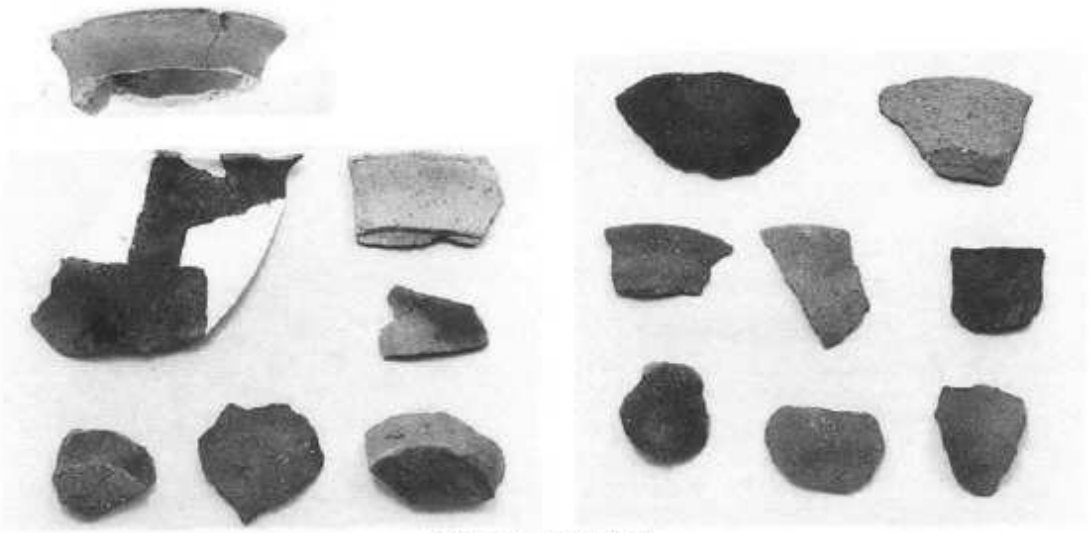


遺構外出土縄文時代土器

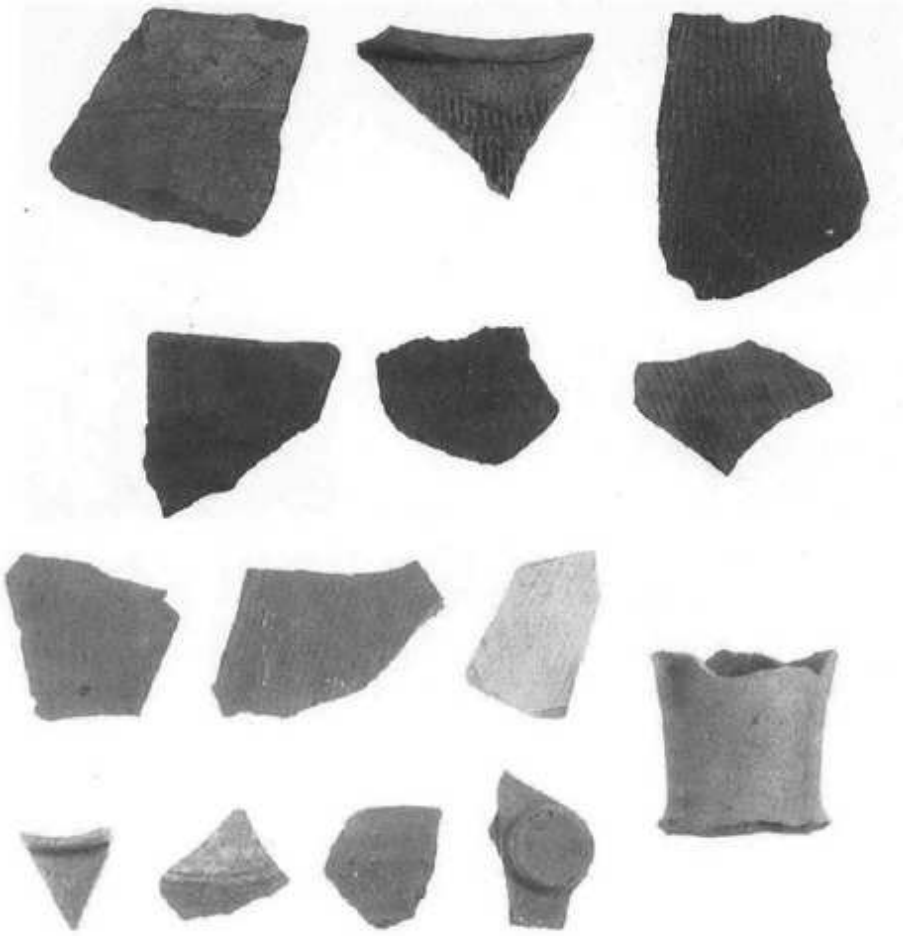
同上 弥生時代中期土器



同 弥生時代土器

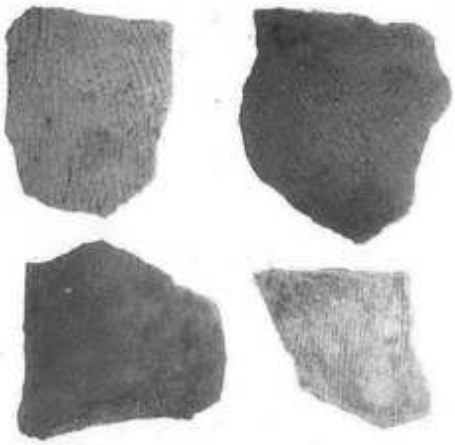


遺構外出土土師器



同上 須恵器

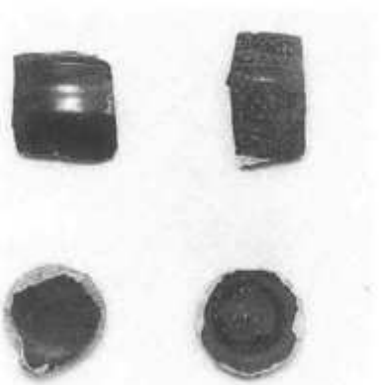
図版27

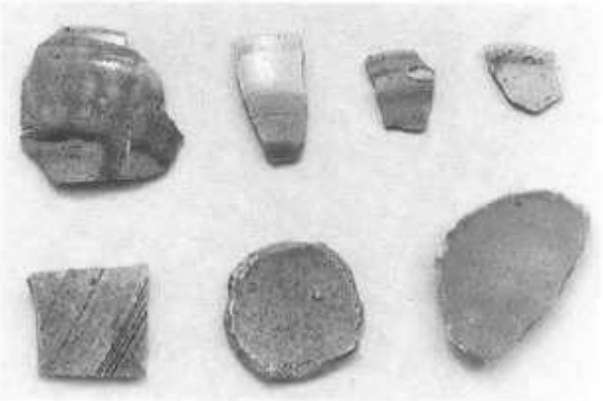


遺構外出土平安時代甕

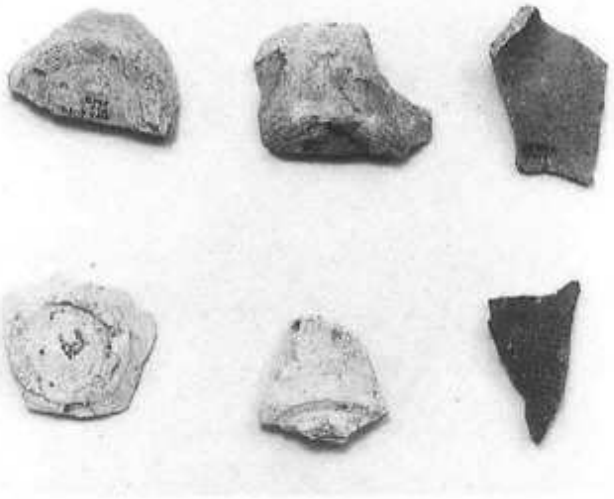
遺構外出土内黒坏

同上 灰釉陶器

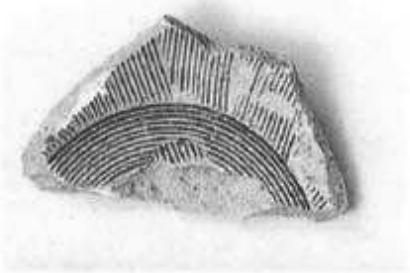




同 天目釉陶器・磁器



遺構外出土山茶碗・常滑



同上 おろし皿

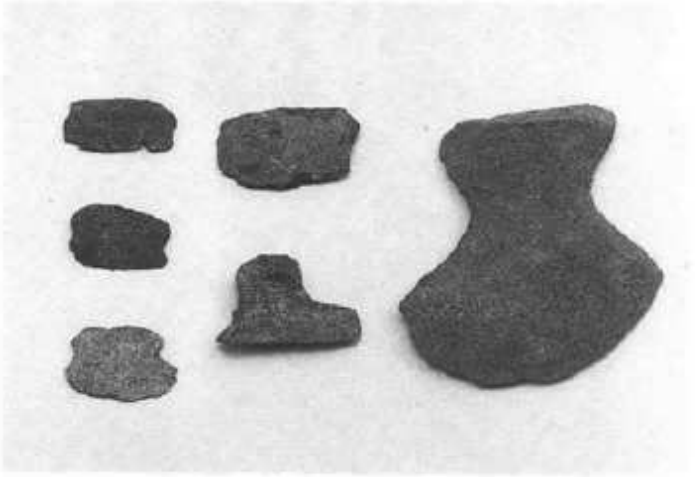
同上 すり鉢

図版29

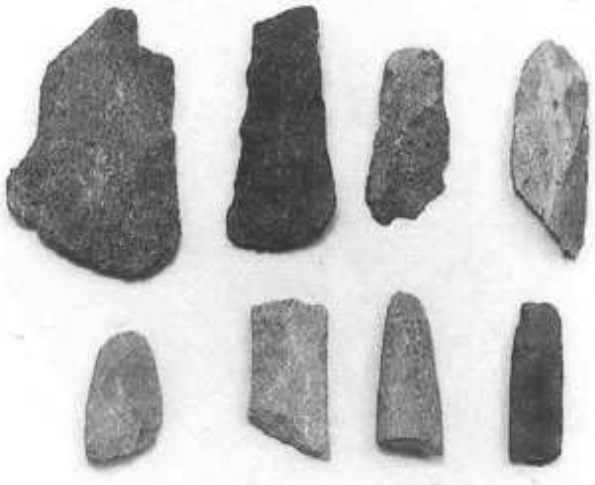
遺構外出土 黒曜石石鏃・使用痕のある剝片

同 石錘・不定形石器

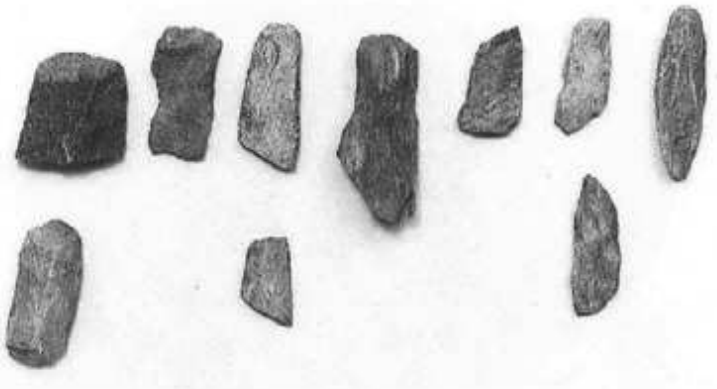
同上 磨製石鏃



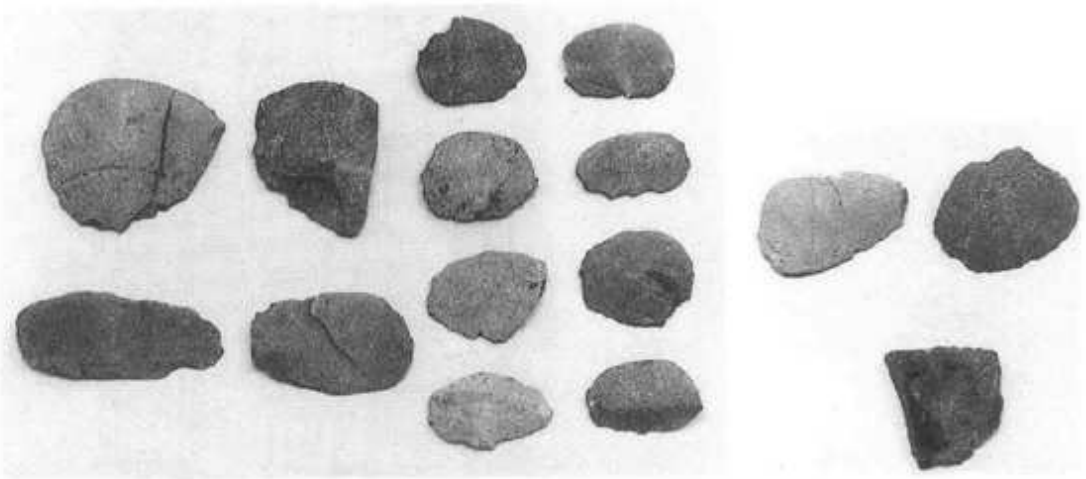
同 打製石包丁・有肩扁状形石器



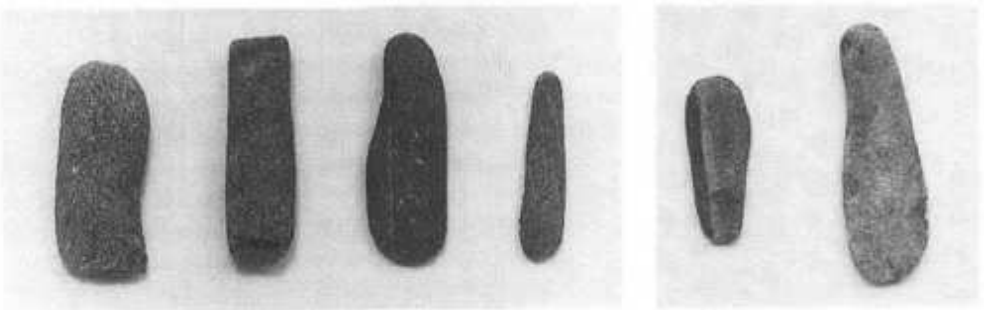
同 打製石斧・乳棒状石斧



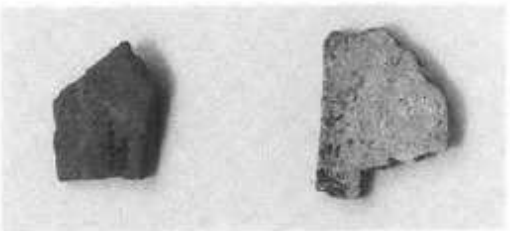
遺構外出土
打製石斧



遺構外出土横刃形石器



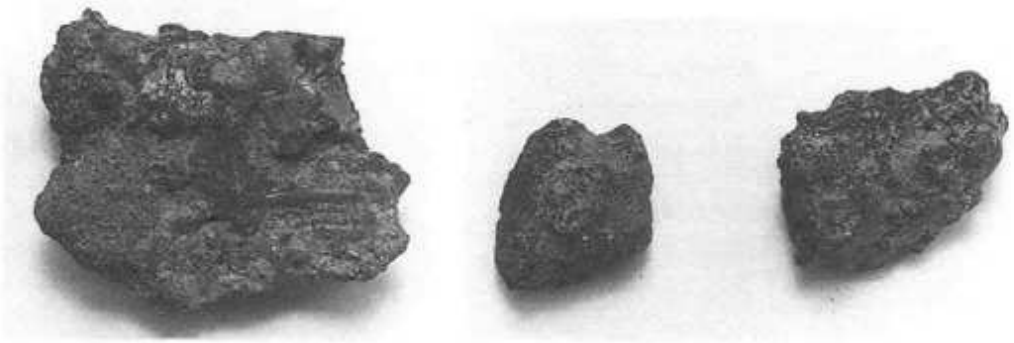
同上 敲打器



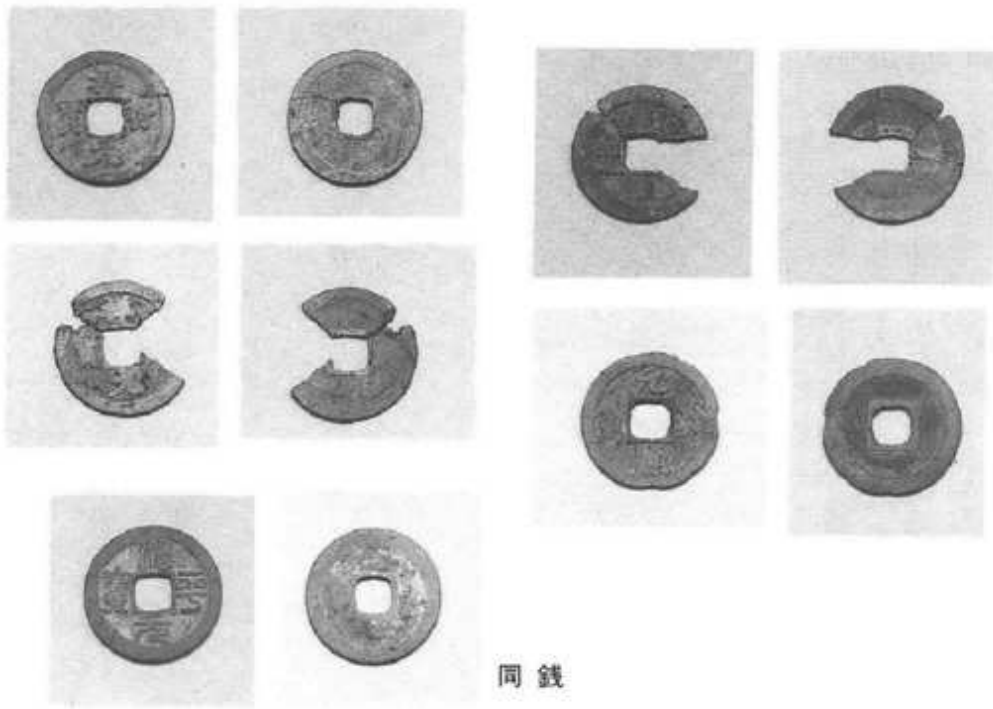
同 砥石

図版31

遺構外出土刀子・釘



同上 鉄滓



同 銭

重機による
トレンチ調査

重機による
表土剝ぎ

トレンチ調査

図版33

遺構検出作業

遺構掘り下げ作業

同上

穴掘り下げ作業

測量作業

清掃作業

図版35

ラジコンヘリコプター
による写真撮影作業

遺跡現地説明会
スナップ

同上

清水遺跡

雇用促進住宅建設にかかわる宅地造成に先立つ埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

1991年3月

編集・発行　長野県飯田市大久保町2534番地
飯田市教育委員会

印　刷　飯田共同印刷株式会社
(電) 23－3889